澤村傳へ聞今更わが功名を世にあげたる丞さと悦びけり

○加藤主計頭清正小西攝津守行長各肥後半州を賜ハりしに一揆起る天草領ハ島にて一揆の勢ひ甚だ盛なり小西志岐城を攻けるに天草木戸の一揆の長天草民部後卷に押寄せ志岐の東乃山に陣を清正の先陣山岡道阿彌岡田將監南部無右衛門少野木織部瀧野三位莊林隼人森本義大夫段々に進む清止鯛平次をして先陣を見せしむるに歸らぎ又飯田覺兵衛をやられしに飯田見切て歸る平次只今軍始らぞ先に進みて戰ひに逢んと云ふ飯田しらぬ事ハいふまじきよ先陣只今追立られん戰ひに逢ふ場にあらぎとてつれて歸る清正いかにと問るふよ飯田先陣ハ今打負て敵追かけ來らん二の勝ハ旗本にありといふ清正證ハいかにと問ふ敵東の山に陣し地の利を得たりといひも果ぬに先陣敗北して一揆まつしぐらにかゝり來る清正高き處より横合に突て懸り天草民部敗軍せしを三里計追討にしたり清正十文字の鎗を突折り七度鎗を合せ其勢に乘じて志岐の城を攻落されけり清正の鎗ハ十文字にて三日月の形なり志津の作なりしが突折て片鎌と成し刃と拾取て佛木坂の神宮に納しとぞ鎗の鞘熊毛なりしに瘧煩ふ人あれバ其毛一筋ぬきて戴かするに忽ち落けると云傳ふ朝鮮人ハ今に至るまで小兒の啼時鬼將軍來るといひて啼やみけるとかや

○清正一揆を攻る時或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしに凡組討ハ力によらず心剛にて手きゝたれば易き物なりと申を清正組打ハ危きもの也勇に誇る時ハ必ぞ仕損ぜべしと戒められぬ其翌日清正の眞先に森本馬を進る處に歩行武者一人寄合たり森本聞ゆる馬の上手なれバ敵を横さまにあてゝひらりと飛下り立上らんとする敵を引組で頓て首をとる清正に向ひ夕部申せしに違ひハ哉といへば清正大に賞せられけり

○朝鮮を伐るゝ時關東の諸將も兵を出さる伊達政宗ハ遠國たる故に騎兵三十騎鉄炮百挺鎗百本と軍配を定められけるに千計の士卒を引具し天正十九年正月九日岩手山を打立ち二月十三日京に着小西加藤ハ先陣たり岐阜中納言秀信を始めとして關東の諸將師を出さる其道ハ聚樂より戻橋を大宮に押通る政宗の旗三十本紺地に金の丸付たる具足着て弓鉄炮の者も同じ出立に銀の丶し付の刀脇差金のとがり笠をかぶり馬上三十人黑ほろゝ金の半月の出し豹の皮又ハ孔雀の尾熊の皮いろ〳〵の馬甲かけ金のろし付の刀脇差あたりもかゝやく計なる中にも遠藤文七郎原田左馬介ハはき添に木太刀を一丈計に作り帶たりしが鞘尻のさがりけれバ金具を眞中に設けて糸を結び肩にかけて馬に乘たりけり見物の群衆政宗の軍兵押通る時目を驚かす出立なれバ一同にをめきとよめきけるとぞ

明の援兵朝鮮に來り平壤に有て練光亭より日本の兵を望みしに江上に往來する者大劍を荷ふ日光下り射て電の如し是ハ眞の劍にあらぜ白蟻を沃ぎたる物なりといふ事懲毖錄にしるせしハ伊達家の二士の木劍の事にや

○朝鮮南大門の軍ハ文祿二年正月廿六日の事なり明の援兵鴨綠江をわたり押來る小西行長かなハぜ引退く時に小早川隆景ハ開城府に止り一軍せんと待かけたり溺田秀家使を以てとく都城に引返して一所に軍あるべしと申されしかども隆景吾日本を打立しより異國に討死せんとおもひ設たり年老ひぬ今生の思ひ出に異國の大軍まかけ合せ大國の耳目を驚かす軍して屍を戰場にさらさんと存する所なりとて引取ん氣色無りければ又大谷吉隆を遣ハして誠に雙なき志古の名將も是にハ過じされべとて二万計の兵にて大軍に取卷れ空しく討死あらん事口惜く只疾都城に入て日本の軍の先陣せられよと申せしかべ隆景さらば日本の先陣ハ隆景仕らん人に先陣をべかけさせじとて黑田長政久留米秀包打連て都城に歸られしが南大門の外碧蹄館に陣せられけり廿六日の曙に李加松が軍押來る旌旗を立つらね何十萬とも測るべからぜ秀家を始めとして大軍に野合の合戰危からん都城に籠らんといハれし時立花宗茂目を見出し刀の柄に手を懸敵とハけれべとて逃こもる樣や見へなん只馳合せ

蹴散さるべき物をと勇まれしかべさらば誰か先陣せんといふに隆景吾先陣せんと兼ていひつる事よ誰人にてもあれ思ひもよらぜとて頓て陣を進めらる士大將栗屋四郎兵衛村上彈正野島掃部三千計をめささけんで相戰ふ立花宗茂久留米秀包毛利元康六千餘り奇兵となり右の方三町餘りに陣せしが横樣にかゝる隆景旗本一万餘を率して一文字に切て掛り忽ち敵を討破り首數多得られけり宗茂取たる首二ツ鞍の四方手に付け隆景の方に來られしを見て取敢ず見事なりといはれしかば宗茂毎も仕る事なりと答へられけり此軍いまだ始らざりし時黑田長政唯一騎歩の士六七人召具し隆景の旗本に來る隆景よくとそ來られし先陣の栗屋よ力を添給へと言れしに長政悅びの色面にあらはれて承りぬとて先陣に向はれたり殊に寒風はげしう吹たりけれべ長政大綿帽子を被られしが先陣に行てぱらうしをぬいで世に聞えける水牛の胄の緒をゝられけり隆景の軍兵ぞも是を見てけふの軍に勝たりと勇みけるとかや長政ことし廿五才武勇をかく人よ信せらるゝ事なみ〳〵にハあらざりけり

○南大門の軍に明の兵を追かけ秀家の士國富源右衛門とて剛の者大力なりしがさハやかによろふたる敵に追付て三尺餘ある刀を取のべ三刀まで斬たれぞも甲堅くて手も負ぜ國富刀を捨飛かゝり引組だるに彼敵國富を取て押へたりはねかへさんとそるに大磐石を横たへた

ろ〻の加し國富脇差を抽て二刀させどもいかなる甲にや少も通らぞ已に危かりし時味方數十人落合て敵を〻討取たり

○朝鮮にて秀家を始め都城に在しに加藤清正進で行程數日を隔つ諸將粮盡んとそる時加藤遠江守光泰獨云く清正都城を放れて敵に向ふ人々都城を去て食に就んとせば清正を捨殺そべし今爰を去るものゝ復男子の交ゝならじ清正を捨ん事日本の恥也といふ人々粮既よ盡たりいかゞせんといはれしかば遠江守怒て砂を喰んものをといふ砂ゝくはれじといへば遠江守居丈高に成て汝等砂と喰ゝん樣よもしらじ我敎ふべきとて福島正則をきつと見ていかに市松いつの間に大きに成たるぞやとて又秀家に向ひて今までゝ中納言殿と敬ひ申たりきけふよりゝ中納言めと申すべし清正を捨殺し恥を異國にさらす人々なりといひそて〻座を立處に清正粮盡て都城に引退き三里計の近所に陣したりと告來れり遠江守ゝ清正と生死を同じくせんとおもへるにまぬがれけり

○朝鮮の平安川ゝ深さ八九尋四五百石積の船の往來有て日本にてゝ見ざる大川なれゞ川の廣さを諸家の十或ゝ七八町十町或ひゝ十二三町あらんといへども審ならぞ黑田長政の士吉田六郎太夫雜名六之介後萱敢此時六郎太夫といへり又助父子に見積れと下知せらるか樣の事に慣申さぬゆゑ覺束なしと辭それゞ父子が組に功者も有べしといわれて翌朝又助組の士を引具し川岸に出川の向に朝鮮人三人見えたり又助小柳權七ゝ長高き者なりあの向ひの人退かざる內に急ぎ堤の上を行べし指物をふる時踏とまれと言含め權七走り行其たけ向の人とひとしく見ゆるとき指物を振たれゞ立とまりぬ卽ち其間を打てみれべ八町五段なり長政聞て又助二十一才老功の者にも劣らじと稱美せられけり

○朝鮮にて何れの所にてか有けん清正の陣大山の麓なりけるに虎夜來りて馬を中に引さげ虎落の上を飛出けり清正口惜き事なりと怒られけるに小性上月左膳をも虎來て咥殺せり清正夜明ると山を取卷て虎を狩たるよ一疋の虎生茂りたる萱原をかきわけ清正を目がけて來る清正大なる岩の上に在て鉄炮を持ねらいるゝに其間三十間計虎清正を睨みて立止る人々鉄炮と揃て打んとそるを清正下知して打せられぞ自ら打殺さんとの志なり斯て虎間近く猛り來り口を開きて飛かゝる處をうたれしに咽に打込たれべそこに倒れ起上らんとせしかども痛手なれゞ遂に死しぬ

○明の援兵大軍にて朝鮮に來り日本の軍危しと太閤聞れ軍評定有し時蒲生氏郷進み出何程の事かあるべき氏郷に朝鮮を賜ゝれべ切取にして打破るべきものをといはれしかば太閤是

菅利政
後藤
虎を
殺さる
圖

より氏郷の大志有を忌にくみ給ふ又同時隆景使を以て隆景が存ぜる所ハ十万の軍兵渡海せべ城々を守らせ隆景先陣して明朝ゑ押入北京を攻落すべし此旨申せといふ秀吉小早川の智謀さぞあらん人々よく聞れよ秀吉功と遂ぜして死するとも秀次を大將として明朝に攻入んと時我魂魄冥に乗じて鉄の盾をつき唐土乃奴原を一々に蹴ころして捨なんものをむかしも柘榴を嚙て火となせし者の有しと聞く其小男の名を忘れたりといハれしかべ施藥院秀成夫ハ北野の天神の御事なりと申す秀吉それぞかし雷になりて天に上りしと言傳ふれど吾陰靈の塀はどもあらぬ物をと大音にいはれしを聞人ごとに驚きけり

○黒田長政朝鮮の全義館に陣せられしにある曉俄に騒ぎけれべ敵夜討にや寄たると井櫻に上られしに虎馬屋に入たるにてぞ有ける恐れて出る者も無りしに菅政利刀を提て走り向ふ虎咆かゝる處を飛違へて腰骨を深く斬付たり虎前足にて立あがり愈々猛りて危かりし處に後藤基次かけ來り肩先を乳の下かけて切つくれべ菅得たりやと虎乃眉間を切割て殺しぬ長政汝等ハ先陣の士大將として下知する身なるに獸と勇を爭ふ事おとなげなしとぞいハれける

○慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置て日本の軍船を防ぐ諸將番船を乘取べき評定

有か加藤左馬助善明目に餘る大軍を小勢をもて爭か打勝べきといはれしがひそかに手の者に下知し五八十八船に乘番船のかたに漕向ふ善明法を背く者どもを押留よとて追々船を出されしがやゝ有て我押止ぜハ止らじと言捨て船に乘漕出す河合庄太夫同庄次郎荻野作右衛門かぎ懸の三介五人打乘て番船の中に押入たり三介船ハ何れと問正中の本船に着よと下知しやがて乘移る敵其勢ひに恐れ船底に入て劔を拔鏃を揃へて待かけたるに善明少もためらハぜ飛込たれべ從者おじかハ殘るべき續て飛入てなで切にして本船を乘取たれべ諸將も追續き船を押出し來る既に鉄炮の藥に火移り燒船を乘取る者多し河合庄次郎ハ十六才なるが飛入とて海に飛込溺死す佃次郎兵衛加藤權七郎勝れたる功名せり嘉明一人の武勇にて七月十六日白畫に押寄せ番船百二十艘一艘に五百人三百人乘組たるを僅の士卒にて悉く海に切沈めたるハ古今に稀なる事どもなり

○太閤名護屋におハして朝鮮の軍はかゞしからぬを恕り諸大將を集め今ハ秀吉自ら押渡るべし三十万の軍勢を三手ゑして利家氏郷に先陣させ三道より打破り眞直に明朝に攻入るべし日本の事ハ徳川殿おはせべ心にかゝる事なしいかにやおもふと有けれべ東照宮聞し召し利家氏郷に向はせ給ひ人多き中より撰び出されて一方の大將たらん事面目にぞ抑々我

等弓箭を取て年寄かゝる時ゝ人の跡にうゞみ殘りたらんゝ口惜き事なり必ず一方の先がけを承いるべしと仰せられけるゝ淺野彈正少弼長政進み出で暫くひかへられ上殿下此年月の御振剋むかしに替りてこそあれ古狐の入替りたると存るなりと申も果ぬに太閤大に怒りやゝ秀吉が心に狐の入替りたる所謂吃と申せ申損じなゞ首打落さんものをとにらまれたるに長政ちつとも騷がぞ長政が如き何十人が首刎られんも何條事のあるべきそも〳〵よしなき軍起して朝鮮八道ゝ申にや及ぶ日本六十餘州に父を討せ兄弟を失ひ夫に離れ子に先立歎き悲しむ者滿々たり夫に兵粮の運送相加ゝり六十餘州の内悉くあれ野となる今彼向されゝゝに五畿七道盜賊發起せん事必然なり德川殿いかに思召るとも爭か是を防ぎ給ふべき爰を思し召て先陣とゝ仰がれまじ殿下むかしの御心ならんにゝ是ほどの事なぞ御心付のなかるべき是唯事にあらぞ一定古狐の入替りたるにあらぞや鄙き人の詞に人とらむとするゝゝ必ぞ人にとらるゝとゝ此事なりと憚る所なく申し放てゞ太閤何にもせよ已が主に斯雜言するこそ奇怪なれとて飛かゝらんとし給ふを人々押隔たり長政ゝさらぬ体にて人々に色代して靜に座を立て陣所ゝ歸りかゝる所に肥後國に逆徒一揆を企つと聞ゑけれゞ太閤大に驚き長政を召出し汝が嫡子左京大夫幸長罷向て切鎮むべしと下知せられ本多中務大輔忠勝と添て肥後國へぞ向へられける

○朝鮮にて何れの所の事にや廣き野に道ありて向ふは山の麓なるに大穴を構へ射手を伏置て行かゝる日本人餘多射殺しけり黑田家の兵井口與市が從者山崎喜藏いで參て見申さんといひもあへぞ走り行井口も馬より下り走入けれゞ山崎射手三人斬伏る井口續て攻入り追散す井口恩賞に望ゝあらぞあはれ朱柄の鎗免されたしといふ物しぞも寄合て武功度重るか或ひゝ一日の中に首七ツ取時ゝ朱柄の鎗もたする事もあり輕々しく許しがたき事にやといふ井口是を聞き其後一日に首七ツ取て朱柄の鎗もたせけり

○朝鮮にて清正全州に在る時釜山海より十里餘りの程日本の軍兵城々を守て七八里或ひゝ十里計にて伴の城を設けたり清正を太閤呼れしかゞ日本に歸るとて打立れけり戸田民部少輔高政密隅に有て清正と舊友なれゞもてなすべき用意して待れしが士大將眞鍋五郎左衛門神谷平右衛門を途中まで迎とす四里計出れゞ清正の先陣見ゆ其頃ゝ四方に敵なく無事おりゝ二人とも草羽織袴にて出たるに清正の軍兵皆物具して簟食付け旗をはり立て磨筒の鉄炮五百挺眞先に押て鉄砲にゝ火繩をはさみ火をつけたり清正ゝ溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の緒をしめ頬當脚當して草鞋をはき鞍の九本馬鬣の馬印を自ら背にさし月毛の馬に白泡かま

せて來ぎり二人馬より下て迎へけるを清正見て民部よりの迎の使者骨折なり早くそ也へ着陣せん殊の外に人々垢付ぬ風呂をたて下やまで湯を賜へりおべ大慶ならん此よし疾歸りて申されよと詞を懸らる二人承へると馬に乘急ぎ歸りてかくといふ程なく清正着陣せられ屏重門より入る樣にて民部近習の士二人寄て清正のさゝれし馬韝を取て旗籬に立る清正樣に上らるれべよりて草鞋の紐を解脚當の緒を解く時清正腰に付けたる緋曇子の袋を座敷へ投入たるにどうと落る米三升計に味噌銀錢三百文入られたり馬印をさすに腰のつり合ひ是にて能となり民部驚きて十里近きに敵もなくていかなる事ぞといへと清正ものは大事と心得たるぞよき由斷大敵といふ事有我物具せ也身を安じたくへおもへども左あらんにへ皆解るべし失故に身へ苦しけれども解なき爲にかくへせし也萬一の事あらん時解て事を仕誤るならべ今迄の武功虚名にならむ事を慮れべなり凡上を學ぶ下とて大將甘げべ下へ大に怠るものなれべ常々陣法を嚴にする事なり上一人の心下万民に通ぜるとかやいふ事の有よと答へられけるとそ

○朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時清正の花押殊よ筆蓋がさなりやゝひまいりしかべ福島正則冷笑ひて病重くなりて遺言の時の狀あしからんといはれしに清正我へさへ存せぞ戰場に屍をさらすともさたなく逃て褥の上に死んとへ思ひ設けぞされべ遺言狀何がなすべきと答られしかば正則詞なかりけり

○晉州の城を攻らるゝ時黑田長政の士大將後藤又兵衛基次龜の甲といふ車を作り出せり厚板の箱を拵へ内に强き切梁を設け石を落しかけても箱の摧けざる手當をし箱の内へ後藤入て棒の棹を指車を箱に仕かけ進退自由に廻る樣にして城際へ押詰石垣を崩して乘入けり

○慶長二年日本の軍復渡海し黑田長政の先陣栗山備後利安後藤又兵衛基次衣笠因幡母里但馬黑田宗右衛門以下三千計和事館豐臣家譜全義館に陣せし處に毋の援兵押寄る其よし長政に告よとて書簡を書けるを利安見て敵かゝりけるゆへ早々に救はせ給へといふ詞やある書改めよ敵押寄たり先陣へ少も心を勞せらるゝ事有べからぞとこそ申べけれとて直させてぞ告たりける斯て敵寄來れべ利安先陣して打破りたり長政聞とひとしく打出てもみよもんでかけ來られしよ敵早讃龍臺をさして敗北しけり先利安が陣所に入て何とて軍をしたるやといひも終らぬに利安目を見出し押寄る敵に辭退する事やとヤす長政汝等討死せべ我生がひなしと思ひてかくへいひしなり何とて疾告來らざるやといへれしかべ傍より告ヤす書簡の詞を書敬るとて遲かりさとヤす利安子細へしかくなりたとへ疾救へせんとヤすとも行程隔り

たれゝ無益おり敵ゝ四万計もあり味方必死を思ひ定て軍そべきにてたとへ屍を異國の野原にさらすとも名ゝ後の世に傳ゝるべし黒田が先陣の剛の者ども大敵に取巻れ潔く討死したりと言れおん又とく救ゝせと申さんにゝ後日に黒田が者ども主君の援ひを待かね皆打殺されたりと人に笑ゝるべし是日本の武名を穢すに非そや弓箭取身ゝかりにも名こそ惜けれ且は今生の暇乞と存じて告奉る書簡殊更に改め申さと申しければ長政大に悦ばれけり

○日根野備中守朝鮮に使としてゆくとき黒田如水に銀をかり歸りて後如水のもとに行しに如水近習の士にさきに人の贈りし鯛を三つにしてうの骨を烹てもてなせといひしかば客嗇の甚しき事よとおもひ居たり頓て肴を出し酒宴有りし後彼借たる銀百枚取出し返せしに如水はじめより返し給ゝらんとの心にてかしたるにあらそ異國に渡らるゝにより憑れしかば送り參らせしなりとて受け取そして止ぬ粟山利安ゝ如水の風にならひたるや粟山の戒をもてすべて世の有樣を見るに士といゝるゝ人の体こう無下にくちをしけれ多くゝ美衣を着かざり明暮酒宴して馬具武具やうの物いかに有るやらんしらそ多くゝ商家に典當し或ゝ茶の湯よとて古びかげたる器の何の用もあき物に數金を費やし博奕とてあらぬ戯に夜を明しかくばかり無二にいひかはしけん人の黄金を奪ひて其人の赤貝になるも顧そ是ゝそも盗賊の心にも劣りはてたる事なるべし扨物がたりするを聞ば多くゝ女色のたゝふれことのみにて禮義廉耻ゝ露たかりもしらそ又或ひゝ儉約にことよせて利倍のことにゝ錐刀の末をも爭ひ人を欺さて已が得あらん事を願ひ或ひゝ箸侈にふけりて用度に苦しみ商人に向ひ首をたれ其人の恩を得て金銀をかり是れを恥ともせそ門を出れべ從者あまた召具し我ゝ門地のしかゝぐなりとて途中にて人をいかめしく追ひ拂ゝしめ家人を飢しめて購ひたる價をやらそ大國の君も亦大かた斯の如し不仁不義の行ひをなして世の人の誹笑も知らそ世界ゝ皆かくなるよと思へば風俗の衰へ無下に口惜き事なり

○竹中重治曰分に過たる價を以て馬を購可からそ其馬又乘たる時能き敵と見うけ追詰て飛下んと思ふ歟或ゝ又鎗を合ゝせんと下り立時馬副の人の纜かざれべ此馬人の物に成るべし又かゝる馬ゝ得がたしと思ふ心出て期を延す事有り此能馬故に却て名を失ふ事もあるべしかせ士ゝ金十兩にて馬を購んとするに五兩にて求むべしをしげもなく飛下り乘放ちて能き時ゝ捨もそべしさて五兩の金にて又馬を求むべし馬よからす此心得有べきなり身をも義によりて捨るぞかしまして財寶をや塵芥とも思ゝぬ心掛常に有可こそ士の本意なれとぞ

○謙信の許に岑澤何某といふ士罪有て放斥せられしに越中の椎名に奉公し謙信越中へ師を

出されし時彼士叢にかくれ鉄砲を持て伺ひ居たりしが俄に鉄砲を傍に投捨て泣居たり謙信見出していかに岑澤めづらしといれしにさゞかりの仁君智將を討奉らんと存せし事悔しく成今遙に見奉りて先に屋形の心に背き又かゝる設けを工み申事此上もなき大罪なれゞとう〳〵首を刎らるべしといひてひれ伏ければ謙信打笑ひ吾に智仁とゝ相應せざる虚名なり疾馳歸りて椎名によく仕へよといれしかどもかの土越後に歸りて農夫と成て一生を終りたりとかや

○明智光秀が士野々口彦助山中鹿之介に逢て功名せん事を問鹿之介物まへにゝ必目の明ぬもの也能心得られよといふ彦助させる事とも思はぬ其後何れの戰にや川際に野々口打出たる處に朝霧たなびきて物色見ゑ分ぬ時に山中が敎へし事を思ひ出し手綱をひかへ爰にて目が見ゑぬといひしゝ吾後れたるならんと目をふさぎ心を靜めて目をひらきたるに川の半に物具したる武者大差物を指て只一騎渡り來るを見付て心もさゝやかに目も明かに成たれゞ押並べて引組でれち首を取たり後に彦助是も我眞實の功名にゝあらじ彼の敵大ざし物に身の疲れて輒く我れに組敷れたるならん彼敵も物前に目が見えざりつらんと語りき

○石谷十藏定清ゝ先祖ゝ遠江石谷村の人なり大坂御出陣の時江戸に殿させ給ひしに御跡より從者一人ゝ具足箱を脊に負せ自ら鎗を荷ひて潛に江戸を出駿府にて追付奉りけり兼て忍駕かりし御近習の人にたより江戸に殘り申事口惜く存じ重き御法を破りて參りぬ首を刎られん事ゝ素より覺悟したる事なれゞいかに御咎蒙らんとも露ばかりも悔む事あし申上て給れといひしかゞ將軍にゝ殊に法制を嚴に思召給ふなれゞ爭か御ゆるされの有るべきもし御宥あらんにゝ御あとより引つゞきて追々ゝ來るべけれゞ必ず烈しき刑に行ゝれなんされども捨置べき事あらねばかくと申そに台德院殿默しておゝしまそ十藏ゝ既にわが事聞ゑつる上ゝ今夜か明朝ゝ首を刎られなんと相待ち居たりしに十藏よべとて召れけり思ひ極めて進み出れゞ如何して法を破りたるやにくき奴哉切つて棄ばやと思へども若き者なればゆるすよと仰出されて黄金二枚賜りけりさて江戸へゝ重ねて誰人にもあれ一人も忍びて御供に參たらば重罪たるべしと固く仰出されたるとなり

○石谷十藏定清坪内玄藩に向て度々の功名世に高しあれ心掛にて功名を遂べき道もあらば敎へられよといふ坪内聞て能こそ問れたれ人々事に臨て神の力を賴み八幡々々といふ我も又賴みてゝ相だのみになりて成就せじと思ふにより我ゝ毎も八幡といふ神を刺通さんと一筋に思ひて後れを取らざりしといひけるとぞ

○谷太郎右衛門ハ武功の士にて黒田家に客の會釋にて招き置れけり谷ゞの曰く軍の場にて先敵より味方に氣を付べし一人先に進出踏こたゆる處に後より二人三人行重らば始出たる者を强としるべし其處へ行べからす吾ハ又別の所に獨踏出してこたへ居るべき志せよしばらくすれば又其處へ味方つゞくぞかし又日比心安き人のわが主君に寵愛せらるゝとも軍場にて其人のかたはらに寄べからす必す獨立の心得すべし又士ハ引鉄砲の上手といハるゝ事好む事にあらす敵を打立たき時か或ひハ城へ射込たき事のあらんに足輕ハ進がたき故に人をさして命のあらん時射あてされば面目なし危き場ハ敵も堅く守る故に多くハ犬死する事ありといへり

○可兒才藏吉長ハ尾州可兒山の人にて大剛の者なり篠を指物にす首を取て篠の葉を口中に押込投棄て後の證としける故世の人篠の才藏といひ傳ふ關白秀次に仕へ長久手の軍に秀次引き退かれしに岡本嘉助村善右衛門等蹈とゞまりて支へしに才藏が來るを見て山に倚かゝる心地せしとなりさて才藏殿ハ何方にぞと問て其退かれたる方に行けり目前の敵を見捨て引き退きしハ聞しにも似ぬ才藏かなと論じけるが或日聚樂にて語り出して才藏にいかなる所存有しやと問ふ才藏聞て何心なく殿の跡を慕ひたるばかりなりさ今人々の論を聞に尤也さらば暇申すとて宿へも歸らぜ直に立去けり後に福島正則招て七百五十石の祿を與へらる

才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり才藏其祿の半分を與へ竹内久右衛門といふ才藏が臺藝州廣島に在といへり

○石田治部少輔三成ハ近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子にしていとけなかりし時佐吉といひしゞの家貧しく近き邊りの寺にやりて在けり或時秀吉彼寺に行き佐吉が明敏なる故呼出して側に仕へしが頻に祿を增し水口四万石與へられける後三成に人數多招きたらんと問ハれしに島左近一人呼出されよと申す秀吉それハ世に聞ゆる者也汝が許に小祿にていかで奉公すべきといはれしかば三成祿の半分を分ち二万石與へんと答ふ秀吉聞て君臣の祿相同といふ事むかしより聞も傳へぜいかさまにも其志ならでハよも汝には仕へじゆゝしくも計ひたるかなと深く感ぜられ島を呼出して手づから羽織を與へて是より三成に能く心を合せよといとれけり三成佐和山を賜りたる時島に祿增與ふべきよしいひけれども祿更に不足にも見へぜ他の人々に賜ハりたしと辭しけり左近が父もと室町將軍家に仕へ江州高宮の傍にかひなきさまにて隱れ居たりしを三成招き出しけり

○秀吉秀次を養ひて關白を讓り夫より太閤と申す文祿二年秀賴誕生あり秀次よからぬ事と

もさま〳〵有ければ文祿四年七月八日三成太閤の前に出て關白の謀叛既にあらはれしとて證を正したる書を見せ申せば太閤怒て宮部善祥坊堀尾吉晴等に下知して疾伏見に來らるゝか一先高野に退き申ひらきあるか二ッの中よと云送られしかば秀次畏り承るとて其後粟野木工頭秀用白江備後守成定熊谷大膳亮直澄三人に此事いかゞ有べきと問へるゝに白江聞もあへぞ殿下只今聚樂を出給へん事然るべからぞ此三人の中一人伏見へ參りて犯さぬ罪を申開くべしかなへで討手來らば防矢射て思召定められん外他あらんやと申す熊谷此謀尤さる事なれども帝都の騷ぎとならん事其恐なきにあらぞまた謀叛人といはれんも口惜かるべし父子の禮儀なれば都を出て東坂本に趣き讒者を糺されん事を申すべし御許されなくば唐崎濱に打出て勝負を決そるの外道なしとぞ申しける粟野只今危きに逼て宥を請とも聞入られじ迚も通れぬ所なれば今夜伏見に押寄て屍を城にさらそべし婦人の縊れて死るが如くならんへ口惜き事なりと申けれども秀次みな用ぞして高野山に趣きけるが靑巖寺よて自害ありかの三人も所々にて自害せり是三成太閤の沒後世をくつがへすべきために先關白を失ひけると後にぞ人申ける

○關白秀次高野の靑巖寺にて自害ありければ事を司り寵愛せられし人々所々にて誅せられ

自害しける中に木村常陸介師春檢使の松田勝右衛門に向ひ今度關白聚樂を出て伏見に趣かせ給へんと定められし時師春申ぬるにへ太閤御對面だにおはしまさんにへ讒者のはゞ明らめ給へんされども夫までもなく中途より遠國へ放流せられ給ふかかひなく御身を白刃に伏給へん必ぞ此二ッの間なるべしあへれ太閤の使者を斬て捨諸將の妻子聚樂に有を人質に取罪なき事を申聞かせ給ふべしさもあらんよへ和睦も堅く定まり又戰にも勇名を遺すべし空しく聚樂を出させ給ふ樣や有べきと再三諫め申けれども吾太閤に敵する心なしとて承引せざりき然れば關白に於て異心ましまさゞる事明かなり此旨を達して賜へりなば其恩黃泉の下にも忘るべからぞと云置けるを松田折を得て秀吉に申ければ太閤木村が志と愍て妻子に米百石を與へて京都誓願寺の近所に住居せしとぞ

○秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に來る村重が士河原林越後守治冬猿めがつらたましひ遂にへあたをなすべし今刺殺ん事易からんと村重にさゝやきけれども村重聞入ぞ此事を秀吉に語りければ秀吉治冬を呼出して懇に詞をかけさしたる脇指を扳て引出物にぞしたりける村重拒替のなくてといへば秀吉吾刀一ッを賴みて信長に奉公そる者に非ぞといはれけり後秀吉世を平げて治冬を深く惡みさがし出して殺されけるに治冬君の爲に其仇を

除くゝ武士の常の事なり秀吉舊き怨を忘れぎ無道なりといひて死したりけり

○秀吉或時紹巴に向ひ吾發句せん汝脇句せよとて

奥山にもみちふみわけなく螢とせられしに

しかとも見ぬ燈火のかげ脇紹巴の句なり

紹巴螢ゝ鳴虫にゝ非をと中秀吉聞て螢に聲なくとも吾鳴せんとせば鳴ぎしてや有べきといはれし時細川幽齋かたへより

武藏野やしのをつかねてふる雨に螢よりほかなく虫もあし

とよめる歌のありければ秀吉悅れけり

此歌ゝ螢の聲ありといふ心にゝあらぎ雨降る夜ゝ皆虫の鳴止むなれば光の見ゆる螢より外虫なしといふ事なり

○天正六年秀吉播州三木の別所長治を擊つ時谷大膳ゝ濱手の大將たり兼て大膳ゝ寄騎にと秀吉望まれしかども信長飾されすして加勢たらしめらる大膳敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討取たり秀吉疾かさの丸出丸の名也攻られよといへゝ大膳城堅固にして容易に攻取難しと答ふ秀吉日頃勇名高き大膳小城一ッ破りかねたるやと詞をかけられけれべ大膳も怒り秀吉も既に刀の柄に手を懸べき色なりしかば竹中半兵衛立ふさがり戰場の勝負こそ力を尽すべきにいかなる事ぞといふ處に蜂須賀彥右衛門も來りて秀吉の轡を取て押返す夜に入て秀吉酒肴を持せて大膳が陣屋に至りけふの武功援群也先の問答ゝ我過にて後悔大方ならぎとて懇情甚し其後大膳手勢を率てかさの丸へ攻かゝる城中もこゝを大事と防ぎ矢石を打出せども大膳少しもひるまぎ士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破りたれば手負死人數をしらぎ寄手押つゞけゞ大膳念なく乘破りたるが數ヶ所手を負て踞居たる所に法師武者猩々緋の羽織着たるが引返して大膳に向ふ大膳吾疲れたり近寄て首を取て高名にせよといふを聞走懸りて一太刀打つ大膳敵の草摺を取て引寄せ脇指を抽て刺貫く處に別所が士大將由井山兵衛と名乘て引返して馳來り大膳を一太刀斬たりかゝる處へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄てたゝみかけて由井を打て芝居に打すゑ押へて首を取父に向へゞ大膳ゝ息絶たり出羽ゝ父の死骸を陣屋に入れ取たる首を秀吉の實檢に備ふ秀吉大膳が討死せし由を聞てせめて死骸になりとも對面せんとて陣屋に行惜き人を討せけるよとて涙ぐむせばれけり

○秀吉病重かりしかば朝鮮渡海の軍兵を引取んと計られける時朝鮮へゝ心德川殿赴かせ給ふ可しさらべ日本ゝ自ら德川殿に歸服すべしと人々いひし處に思の外に秀吉石田三成に

越前秀康
妓女國の
舞を見て
涙を垂
ろし圖

しせられて朝鮮に赴きけりさてゝ日本の權威は三成に歸すべしといひふらす黒田如水獨是を然りとせず朝鮮の事三成是を承るにより日本ゝ德川殿の掌の中よりと覺ゆ三成是より伐りて人是を嫉みなん然らば德川殿の仁德に服さ從ひて日本ゝ自然と德川殿に歸服せんといはれしが果して然りき

○越前の秀康卿伏見にて國といふ妓女を召て舞せられし時襟にかけたる水晶の珠數見苦しきとて物具の上にかけ給ふ珊瑚の珠數を賜はりけるがしばし舞ける時頻よ涙を流し給ふ人々怪しみければ秀康卿今天下よ幾千万の女あれども天下一の女と世に譽られ名高きゝ此女なり吾天下第一の男と世にゝれども此女にさへ劣り果たるとおもへば泣れけると仰有りけり

○越後の士大將直江山城守兼續ゝ朝日將軍義仲ゝ乳子樋口次郎兼光が末孫なり謙信に仕へて景勝に至る景勝奥州にて百万石を賜りし時米澤三十万石を直江に與へられ倍臣の中第一の大祿なり長高く容儀骨ぐら双なく辯舌明らかに殊更大膽なる人なり且文藝にも暗からぜ五臣註の文選ゝ此人板行させたるなり詩をも作りて

春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花歸なぞいふ句も世に聞あけり伏見の城にて諸大名幾集も並

居たる中に伊達政宗懷中より金錢取出して人々に見せられしに其頃金錢の始りし頃にて珍しとてもてはやさる直江が末座に有しをこれ見られよと有し時直江扇ゝ上に金錢を置て打返し女童のはねつくやうにして觀しかば政宗いや苦らも思ゝぜ手に取れよと云も終らぬよ直江謙信の時より先陣の下知して麾取し手にかゝる賤しき物とれば汚れる故扇に載るなりとて政宗のかたに投戻しけり兼續父も山城守といふもと僧なりしが還俗して武勇を事としけり

○石田三成或雨夜のつれ〴〵成しに直江を近付私語けるゝ卑賤より出て天下を治るゝ大丈夫の志なり我豐臣家の恩深し太閤斯世におゝしまさん中ちゝ思ひ立つべからぜされども終にゝ旗を揚天下をとらべやと存るなり其時德川家父子をべ如何して討亡すべき武畧を廻らし給ゝらんやと語りしに直江此を幸とやおもひけん是こう志を所なりされども德川父子關八州を領して且滯生氏郷といふ勇將に親しみあり輙く勝べからぜ先氏郷を滅し景勝に會津を賜りなんや然らべ吾景勝に謀りて旗を揚我先陣して師を出そべし其時西國の諸將たちをかたらひ押寄て關東を討辻そべきよとこまごまと相謀り終に氏郷を毒害し後秀行八十万石の地を削て會津を景勝に秀吉賜りたるゝ此謀より事起るといへり

○慶長三年八月十八日太閤逝去其頃台德院殿伏見におわしまして太閤の病重かりしかば關東に赴かせ給ふん事延引なりしが俄に十九日伏見を發して關東に歸らせ給ふ是東照宮遠大の神慮なるべし四老奉行内々相計り德川殿伏見に有て權威日々に增長すべし秀頼公を早く大阪へ移し諸方一同に參集りて尊敬すべき事然るべしと東照宮ゟ强て申して同四年正月十日大阪ゟ移居あり東照宮も送らせ給ひて大阪へ御出あり片桐東市正且元が宅に御止宿ありけるが十二日のあけぼのに俄に打立ち給ひて淀川を御船にて上らせ給ふ處に枚方近く川岸ゟ人多く群りけり若や謀奉る叛反の輩に有べきかと驚く處ゟ井伊直政が足輕と見ゆると申者あり程なく御船近く成ければ脇五右衛門なといへる物頭跪きて待奉りて頓て伏見に入らせ給ひぬ此頃既た世間さまゞに云ふらしいかなる事か出來らんと人々あやぶみおもへり東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結せられ門を押し開き敵寄來らば堅固に防ぎ守らせ給ふべき設あり門を開く事然るべからぞと申ものありければ門を閉て守らば敵に侮らるゝなり只押はれて軍の支度をせよと仰せ有りけるとぞ京極高次參りて大津の城へ引移らせられんやと勸め申されけるを聞召敵寄べ上の臺へ押上げ金札の宮の邊にて頓丸に成て一と合戰すべき吾が兵二千計やあらん敵何萬もあれ打破る事かたからぞと仰られけり正月十九日安國寺瓊長老生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帶刀四人四老五奉行の使として東照宮に參りて伊達政宗福島正則蜂須賀至鎮緣組の事によりて德川家獨擅なる事ども豐臣家の爲然るべからざる由申旨あり依て世の中愈々さまゞなる風說あり其頃柳原式部大輔康政伏見に上るとて二月廿九日尾州宮に着けるが伏見の騷がしき由を聞日夜道を急ぎて道すがらにてきけば伏見にて既に東照宮の御館へ敵押寄たりなどゝいひふらす廿六日の晚膳所ゟ伏見よりの飛脚に行逢いまだ弓箭へ始まり申さぬといふを聞康政悅んで則膳所に陣し秀頼の下知と稱し伏見の騷に付き東海東山兩道の人留するとふれさせ勢田矢橋を三日押留たり其頃の騷しきに諸國より聞傳へ京伏見に集る人殊の外多かりしに押留られ草津野洲を始めとして何万といふ數計るべからぞ扨康政三日の後未刻に攝へたる關所をひらかせたれば旅人一同に京伏見に入る康政膳所を立て七千計の人を率ゐて伏見へ入りければ京にて關東より數万の軍兵馳着たりといひふらす康政小具足着て鉢卷し馬じるし押立て參りければ御前に召して御手づから御のしを下されけり康政下知して御藏より料足數千貫出たさせ人々に分渡し內府の軍兵六萬にてかけ着たれば館にて兵粮の用意俄に設けかねたりといいせて店屋物を買來らしむ數千人京伏見淀に馳廻りて赤飯菓子酒や雲の物一つも殘らぞ買來れば關東より十万の

軍兵集りたりと人々思ハぬ者もなし是に依て石田が謀空しくなるといへり東照宮柳生又右衛門ハ石田が士大將島左近と同國のよしみにて懇なりと聞し召され左近方へ行きて物語して彼れハいかにかいぶらん聞て來れと仰有りしかバ柳生左近に逢て世間の物かたりしいかに成るべき事ならんといひけれバ左近聞て今松永明智二人の智謀決斷ある人なけれバ何事か有るべきと打笑ひけり此子細ハ或時石田密謀に及びけるに左近豐臣家のためを存せんに斯わらで止べきやされども爰に存る旨あり大事を企るにハ我志す處を無二無三に決斷して少しも猶豫有るべからずしかるに去年より度々仕課そべき圖を空しくはづし給ふ事多し既に時を失なひぬ能々世のありさまを見るに石田の家を惡む人々大かた德川殿に心を寄たり當家の存亡計るべからす一日の過るも殘多し只理を非にまげて唯今まで疎遠の諸大將達へも〳〵りくだりて遺恨なく計ひて交り親しみしべらく時を待べきも一つの計策にてこそといひけれバ三成されバ縱令一時に能志を遂るとも後の安かるべき樣を計るなりといひけるに左近いや〳〵事能く一時に勝を得るならバ後に何の危き事かあるべき內府に親しき人々を積るに其兵二万に過べからぞ味方素より心を合する大國の人々又近國の兵を集るとも忽馳寄て五六万にハ及ぶべし景勝卿麾配を採て下知し關東を攻破らんに何程の事かあるべきとて又存ぜる旨をいひ出しけるに客の來て三成座を立けれハ樫原彦右衛門居殘りて左近に向ひいかにも仰さる事也松永彈正明智光秀ハ無双の惡逆の者なれど事を決斷するに誰か相並ふべき此詮議の破り相手に賴むべきものをといひけるとかや其れによりてかく柳生にハ答へけるとなり

○石田三成を始め相組する人々加賀利家を推尊みて東照宮を傾け奉らんと日夜相謀れり利家の長子利長細川越中守忠興を招きて累年親しみたる間た薄からすさぞな危ふからんを扶給ハんやと問ハるゝに二代の知音にてあれば聊疑畧あるまじと答へらる利長尤斯こそ有るべけれ此頃日石田三成小西等相計かつて內府の向島の館を攻圍んと議決しぬ潛に知せ申すと語られしかバ忠興熟々と聞きて日比の親しみ斯る大事を告知らせ淺からぬ事なりと心得たり明日參りて申合せんとて歸られけるが直に向島へ參りて東照宮御對面有しかバ忠興近習の人を屏けて只今參る事別の子細にハあらす石田等黨を結び利家を依賴して君を亡し申べきと企て利長と年頃の親しみによりて具に洩承りぬ彼等が謀に落ちざろ御設こそ然るべくと申されけるを聞し召過にし年信長攝州出陣の比弱年にて武勇の譽れ有し故申通せしなり斯る深志あらんとも知ざりける悔しさよと悅ばせ給ひて櫛原康政を召していかゞ有へ

きと仰せ有り事急にて後れてハ人に制せらるべしと申處に忠興國のたすけハ人の與する事最一に候へバ淺野幸長を召れ候へ彼ハ必德川家に心を寄べしと申されけれバ頓て使を走らせらるゝに取あへず參られたり忠興出向ひて事の子細を語らるゝに人多き中にかゝる事を知せらるゝ事交のかひ有かゝる時ハ疑の生じ易き習ひにありとて忠興幸長先誓紙を書て奉りぬ若敵寄せバ幸長ハ宇治川を固めなん忠興ハ敵の中に打交り不意に一軍仕るべしとぞ相計られけるされとも是も始終勝を全うすべき道にもあらぜ利家と和平有に踰る事あるまじ、只兩人に任させ給ひぬとて其翌日忠興夙ゑ利長の許に行向ひて昨日の密謀一々内府に告たりとぞ語られける利長色を變じてこハそも戯にや實にやと驚れけり忠興されバ愚者も千慮の一得此事を思慮するに石田謀で兩雄を鬪ハしめ其弊に乘んと料るものに兩雄相鬪ひて亡びなバ安藝の輝元備前の秀家などを大將として吾等が如き者ハ手もなく攻平げなん所存見顯し寛仁の内府に與してこそ家をも起すべけれ三成と心を合せて名を汚し身を失はんハ必定にてかく申す詞を許容せられなばとく内府と合親利家と和睦有りて世穏かならん事こそ然るべし是全く前田家を佑る處なりと詞を盡して規誨せられしかバ利長も深く思慮して道理ゑ當れる事どもなりさらバ父ゑ申さバやとて利家に斯と告て利害を詳に語られけるに利家も諾せられけり

○關白秀次生害の後細川忠興の家に罪蒙るへき事起れり其子細ハ秀次當時の大名財用乏しきにハ潛に金銀を貸し給ふ事あゲ是ハ人の心をとらんが爲且ハ財を利せんが爲なりけり忠興も黄金二百枚をかりてけれバ彼家金銀出納の事を司どれる人急ぎ彼金返し給ふべし券契を破り捨べし左なからんには太閤の奉行に券契を出すべしとぞ申ける忠興いかにも叶ふべからぜ此事太閤に泄聞えなバ罪科に處せられん事疑ひなしいかゞそべきと案じ煩らひ長臣相集りて議しけるに松井佐渡守申けるハ某年頃德川殿の御内なる本多佐渡守正信と親く相語らひし彼に付て德川殿を頼み參らせん德川殿ハさる賴母しき人にておはしませバいかで是程の事にて人の家亡んとするを見捨給ふ事ハあるまじと申す忠興我日頃内府と親しくもなし斯る事頼ひゑ便なしされども汝正信と親しからんにハ試に計り見よといふ松井本多にしか〳〵の事有といふ德川殿聞し召其儘松井を召れ人をのけて尋問せ給ひ正信して唐櫃二つ開かせらる一つに黄金百枚つゝを入られたり其黄金の箱ゑ題せし年月を見よと仰せ有り正信是を考るに廿一年の前未三河に御座有し時なりと申す德川殿松井に向はせ給ひ凡金銀ハ出納の司ある事にて若人知れず用んとする時に吾心に任せ難しされバ此黄金を

貯る事斯る事を待よ年久し今其家の爲に吾年比の志達しけるこそ嬉しけれとて自ら是を松井に賜ふ松井大よ悦びかゝる有がたき御事ハあらね既に亡んとする家の斯再び繼べく事偏よ君の御恩なり細川が家の有らん限ハいかて此情を忘奉るべき速に本國に申下して黄金めし上せ償ひ奉るべきと申す東照宮聞し召しいや〳〵此事世に泄聞えあんにハ兩家の禍にこそあれ夫故に斯人知れぬ用ふべき料の物取出したれゆめ〳〵償ん事然るべからぬと仰せられしかハ松井殊更に悦び急ぎ歸て此由を申さんとて御前を立て出にけり遙經て忠興其事となく御館に參り御對面の序に正信を呼出し東照宮に向て申けるハ年頃忠興が家人に仰下されし事謹で承りぬ何事のおハしますべき事のなけれども若御家に事有ん時ハ必ず君の御爲國をも身をも捨〻此度の御情に報じ奉らんそるなりさりながら忠興常に伺公仕るよハ本意遂ん事叶ふべからぬ是より又素の如く疎々しくなされ度とて御暇申て出ぬされハ年頃忠興東照宮と親しからぬして利長を諫爭はれし故に利家も一向我家の事思ふなりと心得て忠興の申旨よ從ハれしとあり

○慶長四年大坂に在たる諸將の中福島正則淺野幸長黒田長政己下七人石田と不和なりし人々使を以て朝鮮に有し時各力を盡し軍せしに目付に定られし福原右馬助直高垣見和泉守家純熊谷内藏允直陳大田飛彈守政信等私曲を攜へ太閤に達せざりし事どもを憤りて罪科よ處すべき由申やられしより事起りて爭論甚しく使度々に及べり七人の諸將此事たゞに止べきや石田を討亡しても必ず所存を遂べしとの趣を石田聞て上杉景勝に如何すべきと問ふ上杉も案じ煩ひしに佐竹義宣日頃三成に親しかりけるが是を聞て伏見より大坂に趣き三成が許に到て別に存る旨もなし只德川殿に告て和平の事を頼むべき外謀有べからぬとて三千計の兵を以て三成を伴なひ伏見に趣きけれハ諸將事を延したる故石田を逃しつるよとて既に追かけんとせられしに早伏見に着たらんと聞しかば齒をかみてさて止みけり東照宮聞し召太閤在世の時ハ寵を頼みて權威に誇り無禮にも有ぬべし今に當りて諸將の申さる、所其理なきよあらざれども罪の疑しきハ輕くすとかや聞ぬとて强てなだめ給ひけれとも尙止むべからざれべさらべ今世治りたるよ弓箭を起さんとや力なき事どもなり我石田と心を合せ諸將と軍すべしと仰られしにより止事を得すして怒を押へてさて止りぬ其後今世の亂となるべきも又穩かあらん事も一已の所存に有べし暫く佐和山に退て公の万事に相たづさはる事なくて然るべからん子息集八正の事ハ我よく家を全うせん事を計るべしと三成に仰られしかハ添なき由謝して佐和山に歸るべきや否景勝に相計りしかば景勝我會津に歸て

上らぎゝ内府催促有ん其時侮りたる体を顕して罵るはゞならば必軍を出さるべし行がゝりにたやすく打破られんや固く支て戰ん其間よ大坂に討て出て素より心を合せる諸將を集め旗を揚られよ是に過たる謀有べしとも覺ゑぎと計られしかば三成佐和山に趣くにぞ定めける三成が士大將島左近昌仲三成ゝ勸めけるゝ秀家秀詮も兩端を持するにや覺束なく佐和山の軍兵を計るに一戰を決するに不足あるまじ一千餘を止めて佐和山を守らせ滯生備中舞兵庫高野越中と某各々二千の兵を率て風上より火をかけ所々を焙となして攻かゝるはゞならば内府拒さかねて引退れん處を追詰〳〵軍せば爭か打洩すべき万に一つも志を遂ざるならば潔く御腹召れよ空しく佐和山に退きなば後悔するとも益あらじ居ながらあたら圖を外さん事口惜けれといひけれども三成ゝ景勝と相策りし故昌仲が謀畧を納ぎして止ぬ三成既に佐和山に趣くに及んで七人の大將猶憤深かりしかば道に俟て討取べしと云ひぶらす東照宮聞し召今ゝ打拾置ばや如何すべきと本多正信を召て仰あり正信つら〳〵思慮して今日本を取て德川家に献ずる者ゝ石田にてこそある其故ゝ三成奸曲あるもの人々惡みたれども又三成に與する者も多く容易く討亡し難し故に言を禮儀に託し手を德川家にかりて亡さば悉く平均に歸せんや諸將外にゝ殿を敬すといへども内にゝ隙を伺ふ人もありなん

故大閤の恩を得たる豪雄秀頼に背くに忍びず三成を憎むの心を移して殿に懷きヤすべし三成あらべ殿を敬し重んぜん事愈厚かるべし三成久しく人の下にかゞむべき者にゝ非ぎ頓て弓箭を取べき事掌の中に有三成敵とするに足んや其時三成に打勝給ひなば殿自然に勢ひを得させ給ひて誰か驍さ從はん日本三分の二は殿に歸服すべく只三成ゝ御心を付られぎばらく彼を立置れしるべからめと申けるを聞し召入られて三成が旅程心許あしとて結城秀康卿をもて送らせ給ひけり

○東照宮景勝を征伐に關東へ向はせ給ふ時江州水口に御泊りあり其明の朝長束大藏大輔御膳を奉るべきと申て御約束ありしに夜四つ頃俄に水口を打出させ給ふ御輿をかゞ者出合ざりけるに渡邊忠右衛門守綱草鞋脚半かけにて御輿のかた〳〵をかきけるを誰ぞと仰られしかゞ渡邊忠右衛門なりと申を聞し召何とてかく不意に打出るを知たるぞと御尋有けれゝ若年の時より御傍に仕へ奉り身の是ほどの事を仕るまじくや情なき御詞也とぞ申ける忠右衛門宵よりかくあらんとをしはかりて御輿のふちを枕にして臥居たりけるとかや其夜土山に着せ給ひて翌日水口へゝ昨夜時をとりたがへて早く立たりと仰遣されけり

○東照宮景勝征伐の御時小山にて石田兵を西國に起せる告を聞し召前にゝ景勝が勇將なる

あり西國ハ皆敵なりと人々驚きたりしに花房助兵衛職之を召て汝ハ近年佐竹が許に有て義宣が心ハよく知たらんかゝる亂に二心有て軍を出しわが歸る道をや塞ぐべき又義宣謀反の志あるまじとならべ起請文を書て我に見せよと仰られしに花房承り義宣ハさはめて信のわつき人なれば前の子細ハあるまじ只人心の反覆ハ父子の間も計りがたき事にて起請文ハ御ゆるされを蒙るべしと申す東照宮助兵衛ハ深田が家の長臣と聞たりしに器量の小さ男よと大息つかせ給ふ花房かくと後に傳へ聞われ起請文を書ならべ佐竹二心あらじと軍兵の疑ひを散せん爲の仰なりしに察せぞして起請文を書ざりけるこそ口惜けれたとひ義宣軍を出したりとも我何の罪の有べきと深く悔みけるとぞ

○景勝を征伐せさせ給ふ時七月廿四日東照宮下野の小山に御着陣ありける處に其日伏見より石田三成佐和山を出て大坂に至り諸大名と相謀り亂を起すの旨告奉る則先陣の諸大名諸將を召れ東條法印津田小平太本多中務大輔井伊兵部少輔を以て今度三成兵をあぐる間定めて妻子たちを悉く押籠べし心中の難義察せられぬ且豐臣家のゐめに企る旨申ふらせべ秀吉の恩を請たる人々多けれべとく大坂におもむき妻子のかた付又ハ三成に心を寄られんも少も遺恨にあらぞと仰出されけり皆疑惑や有けんとかくの詞なかりけるに上杉義春入道入菴末席ゑ有しが進み出福島正則加藤嘉明黑田長政に向ひ各思慮にも及ぶべからぞ人じちを三成に出し置只今御味方申て其質を棄べ妻子の恨世の誹も逃るべからぞ秀頼公へ出し置たる人じちを三成横取にしたるなれべ三成と一戰に及ぶとも妻子の恨世の誹も有べからぞ人ハともあれ我ハ先御手を引討死を遂べしと申されけれハ皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ其座に是ほどの事辨へざる人ハなきゑあらざるも素よりなれども時にあたりて義春の片言援群に聞ゑけるとなり

義春ハ能登の畠山義則の弟なるを五歳の時より誹信もらひ置れて上杉定實の養子とせられしなり

○同じ時國清公參議輝政朝臣の事小山におはしまし大坂の北の方に誰か使すべきとて慶長五年七月廿四日長臣を召て其姓名を書て出せと仰らる各奉りぬとて其明る朝書付て出すに渡邊惣左衛門とぞしるしたる公も左の袖より出させ給ふに同じく渡邊を記させ給へりいかなる患難をも堪て事能使すべき人也と人〳〵思へる故なりさらべとて渡邊を召て此旨を仰られしに此ハ大事の御使にて辭し申す衆議一決せし上ハ兎角の論に及ざるとの仰を蒙りさてハ今一人添られよ人ハ病と申事もあれべと申けれハ野中市左衛門を相副らる書二通を渡させ給

ひて仰を承りけるが程なく東西の戰あるべきに大阪に赴く事こゝろよからぬ色の見ゑければ公たやすく關所を通り得じ若殺されたらば吾馬の前にて討死したりと思ふべしたばかりおはせて大阪の屋敷に到らば今度の一番首取たるにもまさるべしとの詞により二人下人も召具せぎ七月廿五日小山を出て其頃三河の吉田ハ公の領地なりしに巳が宿所へも立よらぎ笠をかたふけて忍ひて打過ぎ尾州熱田に至れば船着に大竹の虎落をゆひて守りたり神職の大原左衛門大夫ハ渡邊が知れるよしみ有て潛に立よりたり爰にて大夫が下人竹をかたげわら一把をくゝり付て七八町計先達て此をしるしに案内者として伊勢の堺に行て夫より野も山も皆敵の中を忍ひ通れハ飯を乞べきやうもなくわら米をかみ關の地藏に行着ぬ行あふ人ごとにあやしみおはれ關所にて殺されなんよく心得られよと口々にいふ關の有樣傳へきくになか〳〵通るべきやうハ思ひもよらす伊賀越にやかゝるべき淺間越にや行べきと二人打かたらひて先伊勢の大神宮の祝上部左近が許に行て宿を借んと立よりければ今何方より參り詣る人のおるべきさとて取あハぎ左近立出て一宿の事ハさて置ぬとく出よ棒にてたゝき出せと罵りけり二人にくき奴かなまさしく池田家の恩を請たる身なるにと怒れともせんかたなく空しく立出る時左近追ついて何國の人ぞと問池田三左衛門尉が士なりと答ふ左近し

からばそこの川堤の下に乞食のそてたるむしろをかぶりて待れよと小聲にいへば二人さる樣もあらんとていひつる詞の如くしたり夜に入て左近來り晝の乞食ハ何國よあるといふを聞てこゝにゐりといふさてひそかに相約して左近が家の裏の戸口より内に入り奥の一間にしばし疲をやすめたり左近今の時家にある下人も打とくべきにあらぬば晝のごとくたのもしけなき事を申たるよとていそぎ飯をしたゝめ出し夫婦給仕をしたりけりさて道の事を問に淺間越ハ人の往來まれなれば此頃ハか乞食をも殺し中々通りかたかるべし只一命をかけ物にして伊賀越を通られといへばさらばとて荷だハらをおひ做たるつゝれに身をやつし御被箱を笠につけ刀をも左近が許におきいと見ぐるしき小脇ざしを求出して指たりけりかくて曉に宮川を打渡り關所近くなりて見れば通るべきやうぞなきやかて一封の書をば深田の中に深くかくし埋み其日ハ行暮て山にふしあくる朝一通の書をこよりにして青草をとりて一二三の印をし笠の緒として一の關所に行かゝる固めたる士どもかゝる大亂に伊勢に詣る者やあるそれ打殺せとひしめきけり二人ハさわがぞとくより伊勢に詣て此さわぎに及び一夜の宿をもかすべからぎとの法令によりいづかたにとまるべきやうもなく進退きハまれり大阪の妻子も心元なく天照大神をたのみにまかせて歸るぞとたばかりけりさらばとて荷

だいら御祓箱脇ざしの鞘を打くだき髪をとかせ帶袷わらぢまでも改見てあやしき事もなきよとて通しければ夫より次の關所をも事ゆゑなく打過ぎて大和の奈良に出て寺に入酒を求て飲たりけるに住持の僧さかな參らせよとて別によき酒を出し又薄茶をも出しければ悅んで二人腰につけたる錢をあたふるに小僧多しとて請取ぞ其時住持の僧の曰能もたべかりて爰までおいしたれたま〳〵爰まで忍び來る人もあれど皆關所にて殺されしよくたべかり給へ故ある人とおぼゑたりと語れば二人心の中に打驚きたれども伊勢に參りける物語して天照大神に助られて無事に下向すと答ふ僧つく〴〵と聞て是を信ぜぞさならんにゝ別の事もあるまじ關所を事故なく通ふれたらんにゝ朋友たちに奈良の出家ゝ見つけたるもの哉とかたられよといふ二人見しられじと打笑ひ出て行く奈良と大坂との間に關所有何者ぞと答めければ又前のごとく併勢に參たる歸路といへばさらばとて改めたりあやしき事もなきに通さばやといふ所ゑ番の坐上に有りける老人物ないゝせそ是非を論ぜるに及ばぞ斬て捨よと下知しけり末座より眞の參宮の者と見ゑしを斬て乘ば神の祟も恐ありと再三いひしかべ二人危き所をのがれて大坂ゑ行着たる東國方の諸將の屋敷にゝ虎落ゆひまゝし大坂の兵士門々を警固して內外の出入も絶たれば兼て知たる材木の商家に行きて大根を買ひもしや聲を聞知ゑと打廻りて大根を賣る眞似しけり久保田市太夫窓より見ていかに渡邊に似たる人もあるかなといひて大根と一聲よべべ渡邊久保田が窓の下に行き笠をとり大根をさし出すうちに宿をとへばしか〳〵なりと答て材木屋がもとにぞ歸りける野中に斯と告て悅びあへり若原勘解由北の方に屬て有けるに久保田かくといへべ門を守る大坂の士ことわりて薪を荷ふ人夫三十五人を出し其中一人を殘して渡邊を其かゝりとし薪を荷ひて門を通る時警固の士此男ハ今朝出たる者にあらぞと押留たり久しく煩ひて打臥居たるか快くて今日出たる人夫なりといへども更に聞入れぞ勘解由立出てさま〳〵にいひ斷り通り得て北の方の前に參り公の仰せをこま〳〵と述て笠の緒をとさて奉る北の方ゝ簾を隔て對面あり其後渡邊に祿ましあたへ給ひ賞せらる〻事大方ならぞ誠に危き處を遁れ得たる事どもなり

○會津征伐の御時東照宮下野小山の途中にて左右の近習の人々に向ゝせ給ひ我麾を忘れたりあれなる小竹林に串になるべき細竹を切れと仰せられしかば則切て奉るをたゞ紙をとり出させ給ひ鞍の前輪におしあてゝ切裂てくゝり付け二つ三つ打ちふり給ひ景勝などを

一○打破らんにゝ是にて事足ぬとの給へり實に麾をわすれ給ふにゝあらぞ上杉家ゝ父より已來武勇の家にて景勝驍將なれば人々あやふむこゝろある故景勝を侮らせ給ふの機を示させ給

だいら御紙箱脇ざしの鞘を打くだき髪をとかせ帶袷わらぢまでも改見てあやしき事もなきよとて通しければ夫より次の關所をも事ゆゑなく打過ぎて大和の奈良に出て寺に入酒を求て飲たりけるに住持の僧さかな參らせよとて別によき酒を出し又薄茶をも出しければ悅んで二人腰につけたる錢をあたふるに小僧多しとて請取ぞ其時住持の僧の曰能もたべかりて爰までおいしたれたま〳〵爰まで忍び來る人もあれど皆關所にて殺されしよくたべかり給へ故ある人とおぼゑたりと語れば二人心の中に打驚きたれども伊勢に參りける物語して天照大神に助られて無事に下向すと答ふ僧つく〴〵と聞て是を信ぜざならんにゝ別の事もあるまじ關所を事故なく通ふれたらんにゝ朋友たちに奈良の出家ゝ見つけたるもの哉とかたられよといふ二人見しられじと打笑ひ出て行く奈良と大坂との間に關所有何者ぞと咎めければ又前のごとく併勢に參たる歸路といへばさらばとて改めたりあやしき事もなきに通さばやといふ所ゝ番の坐上に有りける老人物ないゝせそ是非を論ぜるに及ばぞ斬て捨よと下知しけり末座より眞の參宮の者と見ゑしを斬て棄ば神の祟も恐ありと再三いひしかば二人危き所をのがれて大坂ゝ行着たる東國方の諸將の屋敷にゝ虎落ゆひまわし大坂の兵士門々を警固して內外の出入も絕たれば兼て知たる材木の商家に行きて大根を買ひもしや聲を聞知ゝと打廻りて大根を賣る眞似しけり久保田市太夫窓より見ていかに渡邊に似たる人もあるかなといひて大根と一聲よべば渡邊久保田が窓の下に行き笠をとり大根をさし出すうちに宿をとへばしか〳〵なりと答て材木屋がもとにぞ歸りける野中に斯と告て悅びあへり若原勘解由北の方に屬て有けるに久保田かくといへば門を守る大坂の士にことわりて薪を荷ふ人夫三十五人を出し其中一人を殘して渡邊を其かゝりとし薪を荷ひて門を通る時警固の士此男ゝ今朝出たる者にあらぞと押留たり久しく煩ひて打臥居たるか快くて今日出たる人夫なりといへども更に聞入れぞ勘解由立出てさま〳〵にいひ斷り通り得て北の方の前に參り公の仰せをこまぐ〳〵と述て笠の緒をときて奉る北の方ゝ簾を隔て對面あり其後渡邊に祿ましあたへ給ひ賞せらるゝ事大方ならぞ誠に危き處を通れ得たる事どもなり

○會津征伐の御時東照宮下野小山の途中にて左右の近習の人々に向ゝせ給ひ我麾を忘れたりあれなる小竹林に串になるべき細竹を切れと仰せられしかば則切て奉るをたゝう紙をとり出させ給ひ鞍の前輪におしあてゝ切裂てくゝり付け二つ三つ打ちふり給ひ景勝などを打破らんにゝ是にて事足ぬとの給へり實に麾をわすれ給ふにゝあらぞ上杉家ゝ父より已來武勇の家にて景勝驍將なれば人々あやふむこゝろある故景勝を侮らせ給ふの機を示させ給

二

一

ひしにや然る所よ西國中國一同に御敵なりといひふらし小山より引返へさせ給ふ時又彼の竹林を過させ給ふに上方を攻破るにゝ此麾も無用の物なりとて棄給ひけり前後に大敵あれゞ人々愈〳〵疑ひおそる〳〵故に猶々恐る〳〵に足さるの機を示し給ふなるべし

○同じ時伊達左京大夫政宗ゝ急ぎ本國に歸りからめ手より攻め入るべきよし仰を奉り大坂を打立ち夜を日につぎて馳下る白川より白石まで皆かたきの中あれゞ道ふさがりぬ常陸國を廻りて岩城相馬にさしかゝつて國に歸らんとするゝ相馬また累代の仇なり然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して常州を經岩城と相馬の境に到り先相馬が許に使をたて此度德川殿上杉を征伐し給ふにより政宗からめ手より向ふべきよしの仰を承りぬ路既に塞るはどにやう〳〵此地に馳着ぬあまりにはやめて道をうちしゆゑ疲れてけん顯ゝくは城下に旅館をあまらゞや馬の足休めて明日國に歸り入らんと存ぜといはせたり相馬長門守義胤これを聞きあつはれ運の尽たる事ぞかしさらぬだに伊達ゝ相馬か年比のかたきなりましてや味方討ん一方の大將承りたるといふものをいて〳〵今宵一夜打して案内知ぬ奴原を一人も殘らぜ討取て年比の仇に報い又今度の賞にも預らゞやとてやがて民家をしつらひて迎へ入れ人々集て夜討の評定したりけり爰に水谷三郎兵衛といふ者はるかの末座に居けるが進み出末座

の異見恐入ども既に僉議の座に連れゞ所存を殘すべきにあらぜ抑窮鳥懷に入時ゝ獵者もこれを殺さぜといへと政宗はどの大將年來の恨をすて〳〵君を頼みて來りしをたゞかりてやみ〳〵と討れん事勇者の本意にあらぜ長き弓箭の瑕瑾ならぜや又彼が國境駒が峰に至らんに行程僅に三里けふ日未だ未の時にさゞめらぜ政宗が國に入んとだよ思はゞ日夕ならざるにゝ至るべしそれに僅の勢にて止る事深き慮なからざらんや只此度ゝよきに警固して國に返し里ねて戰ひに臨ん日勝敗を天運よまかせらるべきにやと申けれゞ一座の人々此議に同じ兵粮秣わら鹽魚に至るまでつみ置かゞりを燒て夜廻りそ義胤が士ども政宗ゆまりにしづまりかへりたる体こそ心にくけれいざ試んとて夜ふけて後馬二匹とりはなち人々走りちりて以の外にさわぎのゝしる政宗小童一人に燭もたせ白き小袖を上に打かけ左の手に刀を提て立出相馬殿の御人やとい〳〵向へゞ物音高しよくしづまれよとて又内にぞ入たりける夜明れども立ちもやらぜ已の時ゞかりに成て義胤のもとに使して一禮しさてしづめて馬を打て行ひそかに人を付て親しつるにかの國の境駒が峯のあなたに伊達家の軍兵雲霞の如くみち〳〵て出むかへぬかくて關が原の事終りて相馬すでに上杉に心合せたれゞ亡ぶべきに極る政宗訴へ申されしゝ相馬ゝ年比政宗がかたきなり石田上杉に與しあるが一定なら

んにハ政宗彼が爲に討るべし然るに君の仰せ奉つりて馳下るよしを聞て深き恨をわすれ新恩を施じき彼が逆謀に非るの証なり又累代の弓箭の家永く斷ん事不便の至なりと度々あげ申されしかハ後にハ本領を相馬に賜ゝりけるとぞ聞ゑし

○岐阜の城を攻る軍評定の時國淸公大手に向はんと仰られけるに福嶋左衛門大夫正則聞て吾こそ今度の先陣なれとそあらそはれける井伊本多公に向ひて内府の縁者あり讓られよと有けれバ正則ハ尾越より西美濃に入て大手に向ひ公ハ河田の渡より寄させ給ふに定りけりやゝ有りて正則搦手吾こそ向はめ尾越ハ城に遠く河田ハ遠淺なれバ馬にて渉り易かるべし大手に向ふも城を早く攻破らん爲なれバ只搦手よりよせんものをと申されけるを井伊本多正則の領地なれバ大手より船筏を以て渡されん事安かるべし三左衛門尉ハからめ手より向はれよ既に定つる上ハ今更かへんも然るべからぬと申されしかバ正則さてハ吾敵地に入て相圖の煙をあげて後池田殿川を渡されよといひて大手に向はれけり頃ハ慶長五年八月廿一日のまだ宵ぐらきに公ハ淸洲をうち出河田のあたりに陣してあくれバ廿二日の曉に川涯にをし寄給へバ伊藤五郎右衛門と云もの岐阜より津田藤三郎を始として新加納村におし出して警したり味方の軍兵勇み進んで早川に打入んけしきなり公馬を乘廻し今しバしぞと下知せさせ給ふ此時貝福右衛門時ハよかりぬと申せバ公然るべしと宣ひける詞の下よりさかまく波に馬をさつと打入二三間歩ませ鞍つぼにおりさがり貝に川水をすくうて打そつしいかにも高く吹出す寶螺の聲諸陣に響き渡る是より一同に打入て一騎も殘らぬ向の岸に打上る公味方の陣を整へよみたりにすゝむなと下知ありけれどもなどためらふべき吾おとらじと進みゆく事三町バかり公今ハ時てそよけれと腰に挿たる麾を取て一ふりふらせ給へバ一同にどつと打てかゝり忽敵を擊破られけり八田太郎兵衛久次北る敵を追かけたる所に朱色の物具着てむらさきのぼろかけたる武者一人息つぎ居たるを見て馳寄たりかの武者ハかちなるがひたとをりしく八田馬よりとび下り鎗を合ハせつひに討ち取りたり是れ前田半左衛門なり

○岐阜中納言の士飯沼小掛平といへるハ四天王と世にいはれし剛の者あり新加納の軍破れし時小さ堤を前にして居たりしに池田家の士大將森寺政右衛門忠勝が弟四郎兵衛長勝飯沼を目がけ一間あまりあり玄溝を馬に聲かけてひらりと飛せたり飯沼が左右より鉄炮を打懸けれども甲冑にあたつて其身ハ手も負ず競ひかゝりしが敵ハ多勢ついくとや思ひけん飯沼が者どもちりぢりになりぬ森寺馬を乘寄れバ飯沼名乘れと詞をかくる池田が内の森寺四郎

兵衛と名乗る飯沼池田が内の森寺ならべいさといふより刀を抽て森寺が馬より下んとする處を右の膝口を切たりしかゞ森寺左の方に飛下り馬を隔て切合けるが又左の腕よ疵を蒙り今ゝ叶ゝじと思ひて白刃を握り掌をくられながら無手と組飯沼をおさへ透さず刺通せしが疲れはて首を取れども既に人よ奪るべかりしに從者久兵衛といふ者走り來り近づく者を追はらひ馬に搔のせて興國公武藏守利隆朝臣の事此時新藏と稱しゆす十四五騎にてひかへ給ふ處に參りてかくと申しけり

○岐阜の城に諸將おし寄る時一柳監物直盛の兵一騎先駈して川に馬をさつと打入けり直盛に付られける目付兼松又四郎正儀九尺計の十文字の鎗を提鹿毛なる馬に乘て堤の上にひかへて是を見あはれ剛の者よ老武者か若武者かと問るゝに直盛聞て安井新九郎とて今年廿二三にや成けんと答ふ正儀吾ならべ功名をとぐべきに若武者なれば惜き事よといひも終らぬに安井向の岸に待かけたる敵の中にかけ入て討死しけり直盛馬を蹴たてゝ進むけしきに見あしを正儀おし止め早くとてやゝ有てこゝぞと云まゝ馬を川に打入られしかゞ直盛もおとらじと渡されけり敵敗北しけるに正儀閻魔堂のこなたにて追かくる味方をおしとむる直盛など追討ざらやと問るゝに敵はや陣を整へたり引かへさば一定味方崩るべし百々木遣い岐阜の古兵なれゞふみ止んと思へども地の理なくて退くならん今見られ上返すべしといひを終らぬに竹林によりて鉄炮を打かくる正儀少しも騒ぎ相向ふ事暫く有て城兵遂に引退く正儀敵是にて一面目有に似たり此より返さじといはれけり直盛岐阜の町口にて將机に倚て鎗を横たへ敵出ば一鎗せんと正儀の方を見やられしに正儀いや敵は出ぎと云しに果して軍はなかりけり亂しづまりて後直盛正儀を嬰し今度の軍毎事仰の中りけるが中にも安井が討死をと察せられしはいかなる子細ぞと問れしに正儀聞て死生有命とていかで人力の及ぶべきさりながら川を渉りて先陣する時は馬のあげ場二三十間も置て敵の前を横さまに乘りあとに味方つゝぐとき大音に名乘べきことなり左もなくて唯一騎岸に打ち上り敵の眞中にかけ入り討ち死にすれど敵に利を得さするなりとときにより地により進退のしわざかはるものなりと能く老兵にうけたまはるほどに六十に及んでなほあがらへ武功をもとぐとぞ語られけり

○岐阜を攻破る時黑田田中藤堂等の諸將は犬山を押へたりしに犬山の城明のきける故岐阜をつして打向ふ所に大垣より石田嶋津二万餘り打出ておし來る頃しも八月兩の後合渡川水かさ增りたり諸將香が鳴の札の辻にひかへ各將机に據て川をや渡す待てや戰ふと評定して

決せざ高虎銀の天衝の立物打たる冑を着黒ばろ掛たる武者は黒田家の土大將後藤又兵衛なるべ去存る旨を聞べやと て扇を揚てまねかれしかべ後藤はろをもりかけて來り跪き高虎いかに此川を渡るべきか待て利有べきかと先の程よりいへども決せざといはれしかば後藤打笑ひ評定も時によろ今日岐阜の城攻に後れまた爰にて一戰なくべ内府に御面目はあるまじ川を討死の塲ときはめられん事然るべししからざは男子にはあざざと大言すれば諸將尤なりとて川を渡されけり

○合渡を渡る時長政の士大將黒田三左衛門可成川の東より遥に敵を見渡して長政の側へに馬を乘よせ朱の枝釣のさし物指て黒き馬のたくましげなるに乘たるいよき敵なり必討取べしといふ長政勝敗い運命による事なりなどたやそう敵を討べきさなれひりといはれしに可成耳にも聞入ざ川に馬を打入向ふの岸にはせ上り遂にかの武者を切て落し首にさし物を添て得たりけり石田が物ぬし村山利りとゝへる剛の者なり可成が此功をむかしより毛付の功名とてたぐひすくなき事なれなり

○合渡の軍に長政の内神谷小介先がけして川をわたり待かけたる敵の中よおめいて懸入けれ〻鎗だまに揚られ既に危かりし時長政の軍兵進みかゝりて敵を追たてけれ〻小介流るゝ

血に朱に染たるを戸板に載て長政の前に來る小介けふ我と先を爭んもの長政ならでい有べからざと思ひ長政をきつと見て小介より先立て鎗を合せし者一人もなしと申けれ〻長政汝ならで誰か先がけすべき手負もの、氣をいりて物心ふいあしきといはれけり小介後に有馬の温泉に浴して創愈けり

○關ヶ原にて東照宮いまだ岡山に御着陣なき已前諸大將地の利に據て直々陣取たりしに或夜諸陣俄にさわぎけり寺澤志摩守廣高臥ながら徐よ我臥に聞たりといひて剛かいて褒られけり廣高士六人歩の者六人を物聞とゞ三番に互にかはりて道を異にして小の事も必告來る今夜告來らざれ〻夜討にあらざる事を元より知れたるゆゑなり其あくる夜忍びて加藤嘉明の陣所を通る者ありとらへて忍ひか火付か切て捨よといふに嘉明其士い主君の爲に死を顧ざ己陣所の備怠りざ被いかにして吾を類ふべき殺すと彩ざると勝敗にかゝはらざとて追はなたれけり

○關ヶ原の時大坂の舟手村上彦右衛門嘗平右衛門九月十二日の夜桑名に着十三日諸將に對面し安國寺に向ひて味方陣所の休見及びたる處心得られざといふ安國寺吾もさこそ思へされども關東者一人に上方勢十人の積りなれば四五日もちこたへなんにい必勝べしと答ふ村

上味方山どりの有樣高くとりあがりまばらなり戰ふべき色にあらぜとく下りあふ事も叶ひがたからん東勢ハ物し故陣所あつく見ゆ一兩日を過ぜして合戰あらん覺束なしといひて歸りしが果して計りし如去村上ハ敗軍の時阿濃津より九鬼大隅守嘉隆の許にゆき夫より上方にのぼりけり

○關ヶ原の軍の前九月十四日浮田石田軍を出し一色村に兵を伏せ樣瀨川を渡り中村式部少輔の軍兵の陣所に押寄て鉄炮を打かくる中村が士竹田五郎兵衛先がけして打て出る有馬豐氏も陣所相ならびたれべ兵を出を竹田は討死し伏兵に射ちらまされ敗北しけるに中村が士大將野一色頼母白はろかけ栗毛なる馬に乘崩るゝ味方をはげまし返し合せたるに敗內匠引で通りけるを詞をかけ何とて返し合せざるやといへば敗ふりかへり手負たりとて川を渉そ頼母鉄炮にあたり馬より落たりしを其組の士松村清介頼母がわたかみをとりて引ぞり退きけれども敵追來れべ頼母が上帶を切刀脇指計取て退けり其後富村といふ者頼母が首をとる其前の日野一色數二人國清公福嶋正則等の諸將の前へ出岐阜攻落され功名致すべきやうもなくさて此よりは中村が者ども軍始仕らんといひけるに軍始はわれ〳〵どもがわざなりいはれざる事をいふとて不興なりし其中に正則目を見出し怒られける故左樣にも仰られざるが大夫殿のおし付羽織のうしろ紋を見ゆたる事もありき式部事太閤より以來先陣を勤め何れの軍にも功名とげしとかくつかまつりて御目にかけんといひしとぞ

浮田石田等が軍兵競ひかくれば矢野助之丞金の團扇の指物林文太夫は赤はろかけて二騎面もふらぜかけ向ひ進む敵を追崩したる有樣目を驚かせり赤坂の御本陣より御覽せられ井伊直政本多忠勝に御下知ありて人數をまとめらる此を樣瀨川のせり合といへり

○樣瀨川にて三成が兵勝に乘て進む處に有馬の士稻次右近鳥毛の半月のさし物にて服しけるを横山監物といふ三成が七馳寄て引組だり稻次が從者助け來り横山を引伏たる處に敵走り寄て稻次が冑をとり引仰く稻次ふり放さんとする時從者又助け來りて敵を一太刀斬るかゝる處に堀尾忠氏のはろの者はせ寄て誤て稻次が手の者を切伏て首を取稻次は終に横山が首を取また敵をも打取り馬を靜にゆゆませて東照宮の御陣所に參りけるを御覽じて先に此陣のかたへより敵に向ひたる武者功名したるわ誰が者ぞと仰有しに有馬法印かたへに有て豐氏が手の者おりとゆす稻次首帳を記す處に行て從者を味方討に打せたり其首帳をべ消て給はれと云聲を聞し召何事ぞと問せ給へべ子細を申すこゝろ大軍のみだれ合たる戰ひには味方討もある物よとぞ仰られける

○浅香庄次郎後左馬介は奥州葛西大崎の木村に仕へ其頃鼠白秀次の不破萬作蒲生氏郷乃名越山三郎と共に天下に聞ゑたる美少年なり木村家滅て石田ゝ仕へたりしゑ咎を蒙る事の有しに株瀬川にて鼠の皮の羽織を着銀の大釘の立物討たる肯にて中村かはろの士梅田大藏が首を取り大垣にはせ歸り三成隅矢倉に居たる下にゆいて鬱氣をゆるされよかしと呼ゝる三成聞て能こそ軍したれといひけれゝ又馳行て三成が軍兵を引揚ゑり後に加賀和常にまぬかれて奉公しけり

○林半介は美濃安八郡青柳村の百姓なりしが石田ゝ仕へて祿七百石俵番たり石田兵を起せの時佐和山の城中に軍兵を集め書院にて饗禮を行ひ吾今かゝる一大事を思ひ立運を天命に任すといへども汝たちが武勇をひとへに頼む處なり其旨を存して軍忠あらゝば賞は功によるべし其紙束の印として酒盃を座の中央ゝ出しける時林逸の末席より進み出て軍に臨みて一番と知らぜ二番はかく申半介としろし召れよとて其盃を把て飲たりけれゝ皆惡さふるまひよといひしが株瀬川にて一番首をとりぬ斯く両軍物別れする時稲葉助之丞ゝ企乃切裂の指物にて秀家の軍士の殿し林は白じなへのさし物指て乗さがり殿しけるが猶も本多忠勝乃兵に向て只一騎輪を懸る有様敵ありとも思はざる体なりしを東照宮御覽じてあつばれ不敵者哉武功に志す者はあの武者の草摺をいたゞけと仰有けり

○關ヶ原の軍の前日伊藤長門守至孝が大敷の陣所に石田使を以てとく大垣に入て一所になられよといひ送りしかゝ至孝大垣に行所を偽永左馬助壽昌市橋下総守正舒したひけるに伊藤金左衛門紫はろに蛇の目の紋付たるをかけ三宅平大夫と唯二騎殿しけるが十四五騎斗追かけたり伊藤大音あげ大事の殿に勝負なせそと云て引退く三宅ゝ馬より下立しが鬨の聲に駭て馬ゝ口に付たる下人をふみ倒してかけ出しぬ歩立に成て靜に退くに日ゝ暮たりかゝる處に正舒ゝ兵市橋勘左衛門追ついて詞をかけ鎗を合せんとせしゑ三宅とゝ昔より親しみ深かりけれゝ互にうの聲を聞き知りて夜中誰も知ざる處に行あひぬるこそ幸なれ爰にて戰ふとも何の功名か有べきいざとて立別れけり至孝大垣に入て三宅ゝ討たれしならんとをしむ處に歸り來りて玄かゝなりといくゝ至孝悦んで鹿毛なる馬によき鞍置て與へ三成ゝ黄金三十兩引出物にぞしたりける伊藤ゝ十六七のころより功名ありて赤き手ぬぐひ和鉢巻としけれゝ敵例の赤手ぬぐひ又出たりと世にいはれし者なりある時軍破れて川岸を只一人引さ退そく時餓疲れけるゑ敵一人腰ゑる兵粮を遣ふを見走り寄て斬伏せ腹をさいて飯を取出し川水にひたし洗ひて打喰ひ陣所に歸りけるとなり

○關ヶ原にて諸將物見を出されしに馳歸りて敵或は八九萬又は十萬計もあらんといふ所に黒田長政の物見毛屋主水敵は一萬によも過ぎじといふやがて東照宮の御陣所に參て申せば敵は大軍なる處汝が詞こそあやしけれど仰せられしかば主水承り且敵は七八萬もあるらんされども雨軍の勝負を計りておのが身に懸て軍に志す兵は幾程もをせを石田に小西等が賴切たる者ども彼是合せて一萬計りに過ぎじ一陣敗北せば餘の戰かはせして敗るべし申けるに東照宮主水に敵の内通を知りたるにや軍の情によく通じけるよと感じさせ給ひ御手づから饅頭を賜りけるをふみ檀に有りて此れを食して出けるのち彼は本姓は何といふにやと仰せ有りければ「より毛屋と申すと申せばいやとよ北國の毛屋といふ所にて功名せしゆゑ毛屋と姓を更つると聞たりと仰せ有りけり主水もと山崎源太左衛門に仕へ後黒田家に奉公し朝鮮にて平安道の小川を渡せし時味方は遥に渡せるにやと云ひけるに主水味方は川上をわたせしなり子細は馬の沓草鞋の流れしにて察せしとれへば長政尤なりとて渡されしとかや主水後千五百石の祿なり此時は旗奉行たりしが合渡の軍よいかにしたりけん長政の旗じるに成し時主水馬より飛下り鎗の鐏を以て旗竿をうつむけ汝等も之旗を仰げなば忽切て捨んと下知して岩卷といへる旗さしの强力の者に取分てかたく戒め主水もをい〳〵

と聲をかけて押立てたり

○黒田長政もとより石田と不和なりしかば關ヶ原合戰の前すぐり立たる士十五騎明日の軍にぬけ懸すべからず吾馬の廻りに引そひて軍せよ石田と手を取組て討ちとらんと用意せられけり石田が陣の前に柵あり島左近昌仲左の手に鎗をとり右の手に麾をとり百人計引具し柵より出て過半柵際に殘し靜に進み懸りけり長政馬より下立鎗を堤てにらみ合たる處に菅六之介政利少し高き處に上り五十挺の鉄炮を透間なく横合に打たせけるに眞先に進だる敵手負て左近も死生は知らぬ倒れしかばひるむ所を長政どつとおしかゝり切くづされけり左近は肩にかけてそこを退ぬ菅後より六千石の祿賜はり和泉と稱せ長政筑前の國領せられて後闘ヶ原にて撰にあひ長政のかゝへに有て軍しける人々集て閑話しけるが石田が士大將鬼神をも欺くといひける島左近が其日の有樣今も猶目の前に在が如しと云ひけるに其物具の事をいひ出して更に定かならぬ人々口々にいひしかば其軍の頃石田が方より有ける士の筑前に仕へけるを三人呼寄て問ひれば左近胄の立物朱の天衝溜塗桶かゝ胴の甲に木綿淺黄の羽折を着たりしと語る人々驚きて近々とつめ寄たるに見覺えざる事能うろたへたるよ口をしさ事かなと云しに其中に取わき剛の者の云けるは見たがへたるいわれなからもことわり哉左

近が引具したるい昔そぐりたる物しにて七十計い柵際に殘し三十計左右に立て麾を取り下知したる有樣つく〳〵案するに三十人計の兵とも鎗の合べき際にさつと引取味方べら〳〵と追かけんを近く引寄せ七十餘人の者どもえい〳〵聲を揚て突かゝり手の下よ追崩して殘りなく討とらんとの手だてなりき今思ひ出れば誠に身の毛も立て汗の出るなりかく酒汲かはして心安き朋友と物語をるとい大よことならぞや人々大かた目のたゞしひは失ひたるにぞ若其時横合より鉄炮にて打をくめぞいわれらか首い左近が鎗に指貫れなん見たがへたりとて必しも恥にあらずとぞいひける

○關ヶ原よて飯尾甚大夫安信只一騎黑田長政の陣の前に馬を乘寄せ大音あげて名乘けるをいざ討取んといやりをの若者ども進みけるを野口左介益田與助見て只一騎先馳したる志昔をいはゞ一の谷の木戸口にて熊谷平山ぞ終夜名乘つる休なり平家の士出合さりしも志の者を助んとなるべしたやすう討べけれども失い情なし後を見よと鎗を横たへて制しければ飯尾慶々名乘て馬を引返しける飯尾は豐後國富來の垣見和泉守が兄利右衛門が子にて五千石の祿にて秀家に奉公し居たる

○蒲生備中眞令い石田が内よて聞ゆる勇將なり關ヶ原の前軍評定の時眞令明日い偏に必死と思ひ定めらるべしと云ふ島左近明日先陣に進んで忠義を昔として打勝べき物をといへゞ眞令また昔より利を得ろい天のたすけによるといへども軍の正しきと法令の嚴しきとの二ッにありよく内に省たまへ偏に必死と思ひ定められべ勝の半なるべし左あらぞい復御目見致さじとて座を立ちけり眞令元より敗軍をさとりて三成に必死を究めし詞を出したり斯て關ヶ原にて只一騎三成が陣よ乘行て何事にかいひけるに三成うちぢなづく眞令馳歸り饒ひかゝる敵に向ひて散々に戰ひけるが織田長益に合て昔い蒲生の家にて横山喜内今い石田が内にて蒲生備中とて人に知れたる者なりといへべ長益神妙にこそあれわれに降參せよといひも終らぬにこい何事ぞやとて拜み打に斬て打落を長益の從者千賀文藏鎗を以て突通すを其柄を握て引組たるに文藏が弟文吉刀をとり直し眞令を刺て遂に打取けり眞令が子の大膳は戰ひ半に首一つ提て父に見すれべ功名も何にせんといふを聞又東よ向ひて押かゝる敵にかけ合せんとせしが父討れたりと聞

まてしいし我そわたりて三ッ瀨川あさみ深みも君にしらせん

といふ歌を高らかに唱へ自害したり

關ヶ原に出陣の時母われ汝が富貴を願はぬにいあらざれども弓箭の家に生るゝ身は昔より

名を重んぜる習ひなり凡物二つは兼がたし身を全うして名を忘れよとは云べからぞといひしかば父と共に死して母の戒にたがはざりけり

○越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は會津征伐に從ふとて兵を出さんとせしに石田三成より樫原彦右衛門を使にてしひて佐和山の城に來られよ密に評議そべき事有りと云せけるに此は心得ぞと雖も是非を論せぞしひければ事を得ぞして佐和山に到る三成悦で今度關東を討亡すべき謀をぞ語りける大谷驚て故太閤常に德川殿の智勇の備りたるを崇敬おはしましき今德川家を打亡ん事思ひもよらぞといひければ三成我上杉景勝と計て景勝旗を揚られより其約を變じて景勝一人を攻殺させん事本意に非ぞ運を天命に任するの外道なし豐臣家の恩の恩を厚く蒙りたる身なれば秀頼公の爲にかく一大事を思ひ立たるぞかしあど豐臣家をわすれられしやといへば大谷さらぞ力なし命を秀頼公に奉りて今度の軍に討死すへし但かゝる一大事を思ひ立れんには思慮すべき事二ッ有申出して見ん用ひらるゝやといへば三成いかで所存を防ぐべきと悦しかば大谷が曰世の人石田殿をば無禮なりとて來々に至てもこゝろよからぞいひあべり江戸の内府は只今日本一の貴人なれども卑賤の者に至るまで禮法あつく仁愛深し人のなつき從ふ事大方ならぞ是一ッ次に大事ゝ智勇のニッならでゝとけ

得がたし石田殿には智有て勇足ざるかと存ぞ今度毛利浮田も皆かりに同意したる人々なり必しも頼みとすべきにあらぞ水口の長束と計り内府關東に歸路の時石部あたりにて旅宿の時夜討して火をかけ十死一生の軍せば勝利疑なきにあたら圖を外されぬ内府關東に歸られけるゝ虎を千里の野にゝなつが如し十全の勝をはかられなば又圖をはづして悔むとも益あらじ此上ゝ命を秀頼公に奉るの外他の道なし士卒は皆平塚に下知させて然るべしとて伊益の驛に至り平塚に告れば平塚大に驚き三成志大なりといへども大軍を率うべき將略なし然るにかく興せられしゝ禍をまねくといふべし然れども既に許諾せられたれば いかんともすべからぞとて三成が迄り來りし使者には心得たりとぞ答へける吉隆敦賀に歸しに關東勢岐阜を攻落しけると聞て敦賀を打出て關が原に到りしが秀詮の裏切をもとより悟りければ僅に六百餘の陣を一手になし關ヶ原におし出し鎗衾を作りて秀詮に向ふ吉隆ゝ目を病て士卒ゝ皆平塚に下知させ練絹の小袖の上に村蝶を墨にて書たる鎧直垂を着四方取はなしたる竹輿に乘たるが秀詮裏切して討ずかゝられしかば大谷齒をかみ秀詮の不義骨髓に徹せり敵の旗本を目にかけて切つて入るべしと下知しければ木下山城守大谷大學戸田武藏守重政平塚因幡守爲廣けふを最後と思ひ定め面もふらぞ切りて懸りしかば秀詮の先陣足立もあく敗

北そされども藤堂高虎を始め東國の軍おしかけ進み來れば秀詮の先陣もり返して討てかゝるされども死狂ひする鋒先に秀詮の先陣又追立られけり爲廣敵あまた討とり其首を吉隆に送り此首自ら討ち取りし冥途乃つとに致すべし日比の約束只今討死しなんとく自害して人手にかゝられざれと云遣ハし外に歌一首書添たり

名のためにすつる命ハ惜からじつひにとまらぬうき世と思へべ

吉隆使に向ひて武勇といひ和歌といひ感ずるに餘り有はや自害して追付再會すべしと答へて甥の祐玄といふ僧に返しを書せて使に渡しけり

契りあらハ六のちたまたにしハしまておくれ先たつ事ハありとも

かくて平塚ハ戰ひ勞れて畔に腰かけ息つぐ所に小川土佐守祐忠が兵櫻井太兵衛鎗を提歩み寄る平塚立上り我ハ平塚因幡守なりとて散々に戰ひけるが終に倒れながら十文字の鎗を投出し汝が重寶にせよとて討れけり戸田重政も思ふほど切て廻り討死したりければ大谷が軍敗れて吉隆自害しけり行年四十二歳とかや岩佐五介首を羽織に包み其邊の田の中に埋み先手に向ひ討死しけるを藤堂の士大將藤堂仁右衛門其の首をとりて御旗本に奉りける

○瀧川内記辰政ハ左近將監一益が末子なり秀詮に仕へて松尾山より秀詮の軍敗北の時いさみかゝる敵を支へて從者に首五ツとらせ秀詮のもとへ持せやり其の所をさらで吉隆が兵に鎗を合ハせ岸より下たに敵を突落したれば山田喜内其の首を取る敵なは競ひかゝりけるを笹地兵庫と俱に散々に戰ひて首を取たり後池田の家に仕へて祿三千石士大將たり此の軍の時廿四五計の年にや

○田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳にて關ヶ原に出從者敵を突伏田邊を馬より抱おろして首をとらせしと也幼少にて武功世に名高かりければ黒田長政田邊に逢て大に感賞し田邊とりかひたる從者を呼出し其事を問るゝに馬より抱おろしたるに刀を抽て振ひければ恥しめて首を取たりと云長政さてハ勇士なり振ハぬにかゝりたらば十方なき故と云べし恥しめられて首を取たるハ勉めハげまぬによりて勇氣を致す所なりとて彌ほめられけり

○辻小作ハ福嶋正則に仕へしが可兒才藏と親しみ深く共に世に聞えたる物しなり中黒道隨ハ石田賓客の如くもてなし置けり關ヶ原の軍敗れし時中黒唯一騎落行兵の中に蹈止りさんざに戰ひけるを辻見ていざ討とらばやといへば可兒なさけなき事をもいふもの哉たすけばやと云辻さてハ生どれとや可兒に好まれて辭し難しといひすてゝ馳行ところに中黒馬を深田に打入て鎧を合せても更に動かぬ辻詞をかけ日頃の好みに助んぬるよ早く取付とて

鎗の鐔をさし出そ中黒かゝるきゝに命助かりても何にかせんとて既に自害をべく見ゆしかば辻何とたばかるべきや神明にかけていつはらじといへばとりつきたるを辻主從引わげて陣所に歸る可兒見て大に悅びけりさて辻ゝ物具脫て腮よあり仰に打臥して只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有樣にて物語す中黒あまりに餘りたるよと心中にいかりけれども命を助けたりし恩を思ひでさてやみぬと後に中黒此事を語りて笑ひしとなり中黒後井伊直孝招きて祿二千石あたへられけり

○關ヶ原の軍破れし時島津義弘眞丸に成て福島刑部少輔正武の陣の前を切拔んと一文字におし通る正武十六才かけ合せんとする處を梶田又右衛門死狂する敵に軍ゝせぬよとて追留たり東國勢おしかけしかゝ義弘の從子中務大輔豐久義弘の馬のかたへに乘寄てさゝやく体なりしがやがて大敵にかけ合ゝせ討死す義弘今ゝ是までなりとて取て返されけるに阿多長壽入道成淳義弘の馬の前に打ふさがり大將ゝ千騎が一騎に成りても猶死をして謀どめぐらすを道とこそすれとく打破りて引き退き給へといふまゝに馬の首を引直し島津兵庫頭最後の合戰をするそと呼ゝりてさんゞに戰ひて討死しけり成淳が義に屬まされふみ止り支へ戰ひ討死する者多かりける其ひまに義弘又士卒を集め列を整へ引退く時松平忠吉井伊直政

あますおとて追かけたり義弘が兵ども種ヶ島の鉄炮を腰に挿たるを拔出しひた〳〵と折しさて打かけたるに忠吉直政共に手負てそれより物わかれしたりけり義弘近江の甲賀にかゝり老翁一人案内者にゝて道しるべさせ伊賀ゝ山路を經て上野まで行着かれたり爰ゝ筒井伊賀守定次の城なり使を以て島津義弘唯今打過ぐると云ひ送りて行處に野武士四五百人がはど山の中に待かけたり義弘物の數とも せず打破り二人生捕て上野に立歸り大手の柵の木にからめ付けさてそれより奈良に出かの老翁にゝ刀にさし添られし赤銅の笄をあたへ此をしるしに必薩摩に來たれ今度の勞に報せんとて大坂に至り船に乘鹿兒島に歸ふれけり

一說に左近丞と云姓薩摩に有り是ゝ慶長の比大坂の商にて年久しく薩摩の米をあきなひける者なり關ヶ原破れて後義弘大坂に着れしに士一人先達てかの商家に行きしかば彼商待わびたる体にて君ゝいかにおゝしますぞと問ふいざとよ討死ありしよと答へければ商家涙を流し年比厚恩を蒙りし事なれば關ヶ原破れぬと聞くより必ず爰にわたらせられんと相計りて船を設けて待居たるかひもなく口惜き事ありせめて御供に參らんとて水中に飛入んとせしをおし留め今の時なれば人心のはかり難くてかくゝいひしなり實ゝ一方打破て爰におゝせしなりといへばうく疑れしゝ恨あれどもそれを云ゝんに時移るべしとく

舟にのらせられん樣をこそといひも終らぬに義弘來られしかば酒樽を積其間にかくしの
せ其身も付添て直に薩摩に赴し其者の子の中一人薩摩に仕へし其子孫なりといへり
彼の老翁薩摩に行べやとおもへども道遠けれバ空しく過しに程經て人にいざなはれ鹿兒島
に行て笄を出しけれバなどとく來らざりしぞとてさま〳〵饗し黃金五百枚あたへいざなひ
し人にも黃金あまた與へて人を添ておくり返されけり

○細川忠興の北の方へ明智光秀が女なり父謀反の時忠興に向ひ申されけるハ父ながらか〳〵
るくハだて事よくなるべしともおもハれぞ瀧川柴田なんど申人々多ければ必ず軍敗るへし
女の淺き智慮にも口をしくこそ存し男の身ならんにハ鎧の袖にすがりても諫め申べきを力
なし君もし與せさせ給ひなば世の譏いかでか遁れさせ給ハんと涙に沈まれしかば忠興光秀
に同心なかりけり其後程經て秀吉伏見に有りて諸大名の北の方を呼入て饗れし事の有しに
忠興の北の方かくと聞き女の人なくて一問に入りて他人にまみゆる事やあるわれも召れん
とならばとて懷に匕首を用意せられけり此れより秀吉の惡行ハやみてけり石田西國の諸將
をかたらひて兵を起す時諸大名の北の方を大坂城中に取入れんとするを北の方聞て傅に付
られし河喜多石見稻留伊賀小笠原正齋を呼て吾此所を出ん事思ひもよらぬ城中に取こめら

れんハ恥辱なりよく斷を申たべ猶聞入れられぬハ是を限と思ひ定むべしと語られしかば正
齋殿東國に向ハせ給ひし時おもひかけざる事のあらんにハ正齋はからひて武將の恥なさら
しそと仰せ置れき敵奪ひとらんとするならば其時思召切せ給へと申しけりかゝる處に城中
に入よと使を以ていハせしかば再三斷の旨を述けれども聞入れぞ七月十七日の未の刻ばか
りに大坂の軍兵五百餘り玉造口の屋敷をとりまきてとく城中に入り申されよさらぬハ亂れ
入りて奪取んと呼ハりけり女房ばらあハて〳〵泣悲めども北の方ハさわぐ色もなくかくあら
んとハ兼ておもひ設つる事ぞとよ正齋介錯せよわれ生る世にまみゑざりし人々に死しての
後も見られんハよからじとて面に覆而打かけくゝり袴着て刀を扱胸につきたてられしかバ
正齋眉尖刀にて介錯し其まゝそこにて腹を切んとぜし處に正齋が小性はしり來たり殿の北
の方と同じ處に自害あらバ後の訓のあるべきと云ひければ正齋あまりのいたましさにわす
れたるよとて障子の外に走り出家に火を懸け石見と共に腹切て炎の中に死したりけり伊賀
ハ光秀より附られし身なれバ遁るべき道もなさに人にまざれて落うせけり忠興の北の方か
たみとやおもハれけん手ぞさみのやうに書すてゝ硯の中に入られし哥に

先たつハおなしうきりの命にもあさりてをしき契とぞしれ

落出たる女房の取傳へて世に殘りけるとなん

○三成兵を起す時大津の城に入りて京極高次に對面し彌秀頼公の味方有るべしとぞ申ける高次の士に安養寺門齋と云し者黒田伊豫に向かひ今三成城中に入る事誠の天のあたふる處なりからめ取りて關東に奉らんと云黒田聞て三成を生捕とも西國の諸將大軍にて攻圍むべしいかでか防ぐ術のあるべきとて聞き入れぞ門齋わざ笑ひ三成い譬へば亂の首なり其餘い手足の如し首を碎くはどならば手足何の恐のあるべきたとへおし寄せるとも固く守りて戰ふべし軍せぞして三成ゐ生どるならば天下に名を揚勳功誰かならぶべき吾年老ぬれど三成をからめん事いたやすからんとて今村掃部をも勸しかども爭論し時移りて三成城を出にけり門齋いもと淺井長政に仕へ姉川の軍ゑ生どられ龍ケ鼻の陣にて信長の前に引出す信長の曰けふ勝に乗て小谷を打破らんと思ふいいかに汝が命を助けおん此勝敗いかなるべきと問ろゝに安養寺承り長政が父下野守小谷にありて其兵三千計おらん然るに疲れたる兵を以てかろがろしく攻られし事然るべからぞと申す信長打うなづいてけふ取たる首ども出して安養寺に見せて其姓名を問ろゝ中ゑも竹中久作が取りたる首を見て遠藤喜右衛門直繼と申者ゑてあるいかなる有樣にありしと問ふ竹中聞きて首一つ提殿いいづくにましますぞと云

ひてちかづき進み來りしまゝ敵のまぎれ入て殿を切奉るならんと思ひ引組で討ち取りしと語りければ夕部大依山にてもし軍破れなば必ぞ生て歸らじ信長を一太刀恨み申さんと遠藤がいひつるが果して其の詞の如くなりきといふ其の次に出せる首を見て是い安養寺が弟にて彦六甚八と申者にて死べ一所と契りしに先だちつる事こそ口惜けれとく首をはねられよとて其の後いもいぞかゝる所に秀吉其比い藤吉郎と云ひしが栗毛の馬の汗かきたるに諸鎧を合いせ白沫かませて馳來りいざ小谷へおし寄攻破るべきといひしに信長いやとよかろがろしき軍いあぶなしとて許されぞ秀吉後悔あらんものを急ぎ寄せ給へと强れども信長聞き入れぞしてさて止けり安養寺い只首をはねらるべしといひけれども吾に奉公せよとてさまゝなだめ申されけれども降參せぞ遂にゆるされて小谷に歸りけり安養寺にたばかられて信長軍を返されしかば淺井三年經て小谷の城落たり其後安養寺淺井と京極と一族なりし故高次に仕へけり若き時三郎左衛門とぞ申ける

○高次い關東に素より心を寄られしを大坂より朽木河内守元綱を使にて秀頼公の外戚たれども江戸大納言殿にもゆかりあれば人の疑ゝ散せん爲に幼息熊若丸を人じちに出されいへとなり高次かろゝしく敵の色をも立がたしとて止事を得ぞ熊若丸を出して北國に軍を出

されけるが岐阜の城おちたるよしを聞て北國に向ひたる人々大垣をさして引き返へされしかば高次北の庄より直ゑ海津にかゝり九月二日の夜半に大津に歸り立花宗茂筑紫廣門粟津に陣せしゑ夜討にせんと謀られしに黒田伊豫同心せゑして止ぬさらばとて關寺の門を閉城下の兵粮を取入れ專ら防禦の支度せられけり宗茂廣門石部より引返へして勢多に陣取廻元の陣代毛利元康等ゝ三井寺に陣し久留米秀包南條中務を始めとして三万七千餘四方よりおし寄せたり中にも宗茂の軍兵ゝはげしく攻つめて死人をふみ越て乘り入らんとす防兼て京口の旗をしぼりければ多賀出雲守眞先かけて塀を打ち破ふり三の丸に閧を作りかけてひたゝとおし入りけり山田大炊赤尾伊豆足輕頭にゝ井口左京大橋肥後安養寺門齋使番山田三右衛門横山久内田中茂兵衛茨川口を固めたるに京口より敵亂入しかば二の丸をさして引退く高次使を以て何とて三の丸をすてゝ早く二の丸へ引取るや仕寄を付けられなば防ぎがたかるべしはやく敵を追出せと下知せられしかば門を開て切つて出る山田大炊十文字の鎗の鐏を片手に取て胄の上にてふり廻し參るゝと呼ゝり懸て一番に鎗を合ゝせ敵二人突伏たり此れを山田大炊が茨川口の鎗と世に稱しけり赤尾ゝ猩々緋の羽折を着て長身の鎗にて數人突伏せ山田三右衛門も散々に戰ひけるが討死せり二の丸に引取る時山田と赤尾とかゝる〳〵六度まで返し突拂ひたる殿の振廻目を驚しけり二の丸の門際にて赤尾山田已下ふみ止りける時唯少齋門をたて關貫をさす赤尾ちつともひるまゑ長身の鎗をかたゝらに置敵の方へ足を投出し草鞋のひもを結び直す其武者振を敵見て少しためらふ時少齋門を開けば中に入る事を得たり赤尾棄殺んとしたるよといひしに少齋敵追すがうて二の丸に攻入んとする故にこそ門をさしてけれ各々助ん爲に城の危きを忘るべきやといひければさばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり黒田次郎兵衛尼子宮内安養寺長門三田村安右衛門今村掃部赤尾久助中井民部小豆掃部油井周防等ゝ京口を防ぎけるが三の丸へ攻め入る敵と戰うて討死すくあからゑ銚子五郎兵衛ゝ始闘白秀次に奉公せしにあくまで酒をすきけりある時朋輩に語りけるゝ殿下のかたへに立置れし白熊色白く丈長しあはれ胄の上にみだしかけて軍の先がけせん物をといひしを秀次聞て銚子を呼ひて是を着に酒を呑とて彼の白熊をあたへられしかば銚子誠にありがたく存しぬたはひれに申せし詞し弥しめされてやらん若此後軍のあらん時先に申せし詞をいかにせんといひけるが今日栗毛のしぼ革よ金の筋つけたる羽折を着かの白熊の雪の如くなるを胄の上にみだしかけ十文字の鎗を横たへ尾闘甚右衛門と共に亂れ入る敵五六人突伏て胄の鐏を傾け一足も引くまじいぞと呼ゝり討死したりけり事る君ゝ

異なれども賜ひたる白熊にて敵味方の目を驚す討死をぞ遂たりける尾關いもと柴田勝家に仕へしが後高次北國より歸られし時尾關を近づけ夜酒を酌て密にさゝやかれけるハ吾石田よ與するよあらぢ歸りて大津の城を守らんと思ふなり敵の眞中に小勢を以て軍せん事尤かたき事なり汝が智勇を賴むと語られしに尾關涙を流し人々いくらもあり中に何と思召れて斯仰せぞや此上ハ二つなしと答へければ高次汝討死すべきやわが爲に命を捨んとおもふ者多けれど謀を同じくする者稀にこそあれ汝偏に討死とのみおもへるハ吾志に非ずといハれしかば尾關かく身にあまる御詞を承りてハ骨をさざむはどの堤がたき事有りとも此恩に報し奉らんといひしが此時銚子と俱よ戰死せり後高次城を出られけゐ時赤尾と山田と高次の輿の左右に供しけるを見て寄手の軍兵指をさしかの大膽者ト と云ひあへり

赤尾伊豆ハ美作が子なり伊豆幼かりしが僧と成て多賀に匿れ居しに十二歳の時多賀明神の鳥居のはとりにて遊びける處をいづれの家の士にや十二人打連て通りしに行あたる士怒て小僧め無禮なりとて拳にて頭をうつ伊豆飛かゝり其士の刀を抽て只一打に切りはなしつと走りぬけて赤尾にかくれ居たりしが後京極に仕へけり

○立花宗茂使を城中にたてゝけふ味方討死の中に十時傳右衛門と申者ありとりわきて不便に存るなり骸を返し給ハれとて物具の色を書て云送られしかばやがて返しぬ又城中よりも山田三右衛門が首を返し給ハれと望れしかば冑を添て送られけり此を大津の死骸返しとて勇士死後のはまれとしたり

○高次大津の城を守りて固かりければ高野の木食上人を以て和平を執行ふ高次さらに同心なかりしにさきもの長臣黒田伊豫寄手に心を通じければ力なく和平して城を出京都大佛の養源院に立寄りそれより高野に赴く關ケ原記に三井寺に立寄るといへるハ謬なり三成亡ひて後東照宮高次を召けるに今度諸將皆大功有し人々なるに吾城一つ守りとげざりし身の立さじらん事口惜とて出られぢ又使を以て御物語ありたき事あり尚出られぢハ我行かん年老たる身を勞せられんよりハ若役にと仰出されしかゞ高次辭しゐたくて出られけり東照宮此度城を攻ける敵兵大垣に至る程ならば關ケ原の軍危かるべきよ九州の大軍を數日隔られしゆゑわが軍の援となりし事大津城中の軍兵殘らなく關ケ原に來りしよりも遙にまされり敵より乞たる和平なれば恥にあらぢと仰らる大津にての事なれば近江にて四十万石賜ふべしとなりしに高次聞てかく賞せさせ給ハゞ關ケ原にて大功の人にハ百萬石を賜ハるべきかおもひもよらぢと固辭申

されけり

○立花宗茂大津の城攻に足輕に繩だすきかけさせ其繩目に玉薬の早合をはさませて箭をつがふよりも早く鉄炮を打せられたけり

又細川家の鉄炮ハ口薬入を革にて今世のはながみ俗の如く造りて用ふ事の急なる時指にてひねり入て利あり又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手だれの射手あり常に矢を取て俄に出る時十筋も持たき事のあるに腰よさせゞ走るに落るとて革にて角袋造りて緒を付け腰にさげそれに入れて腰にさしけり其名を猿頭と名付たり

○會津に向ハせ給ふ時伏見の城にハ本丸に鳥居彦右衛門元忠二の丸にハ松平主殿頭家忠松平五左衛門松の丸にハ内藤彌次右衛門家長をおかせ給ひ六月十六日東照宮打立給ひ十七日伏見の城にて鳥居を召今度士卒少して殘り止る事を抑せ有しに元忠臣が存そる處會津ハ强敵なり一人なり共召具せられて然るべし伏見にハ臣一人よて事足ぬ世上無事ならずして變の出來ん時ハ近國に援ふべき味方もあらぜ今の十倍の軍兵を殘し置かれたりとも防ぐべきやうハなし申しけるに東照宮默しておハせしがやゝ有て駿州宮ヶ崎にて十一に成し時彦右衛門ハ十三にて初て出たりしよ年久しくもなりぬとて御物語よ夜いたく深けれゞ元忠會津の御留守世に變なくべ復御目見も仕りなんもし事あらゞ今夜ぞ永き御別れとゆて座を立兼

たりしに東照宮御袖をもて落る泪をおそひてぞおハしましけるかくて石田兵を起せしかゞ伏見を攻べきやと評定しけるに增田長盛城固うしてしかも内府の内よ名高きものどもあれゞたやすく落べからぜ先はかりて見んとて山川半平を使よしけり元忠對面すれば增田が申にハ今度輝元秀家景勝德川殿と弓箭をとり九州中國の諸大名皆同心せらるかゝれば此城を請取申すべし長盛久しく德川殿の御したしみ深けれゞ此事然るべしとハ存じかねども思慮の及ぶべきにあらぜ伏見の城ハ太閤さゞかれて今德川殿始くあづかりておハしませば德川殿の城と申べきにあらぜと城を出て内府に忠を致さゞ道あらんと存るよし云遣りければ元忠聞きて過し頃内府會津に向ひし時かたく守れと命せる然るを今敵に渡す事ハ存じもよらぞ增田殿ハ内府にしたしみ有ゆゑかゝる事を逃らるゝ旨心得られぜ若おめ〳〵と城を渡さんよ同じくハ城を枕にせよとの使たまはらゞ忝しとも申べしとく城を出よとハ武將の詞にハあるべき事とも存ぜぞとく寄せられよ討死せんと答へしをかへりて長盛に告るかたへに渡邊勘兵衛有しがつく〳〵聞て感じ入りて頻りよ涙を流しけれゞ長盛も我れもをしき人を殺さん事のなげかしきとて共に涙を流しけるとぞかくて三万餘りの寄手四方より攻めけるに少しもひるまぜ十日余防ぎけるに甲賀の者内通して七月晦日の夜松の丸に火をかけ

しかゝ寄手力を得て攻入たり内藤ゝ精兵の手さゝにてさし詰引詰射ける矢に死人數をしらぞ終に氏藤父子も討死し主殿頭五左衛門を始として殘なく切死にぞしたりける元忠本丸に有て門を開かせ門際より六七間しさりて士卒三百餘白刃を援そろへしづまりかへつて待かけたり寄手しゝし攻入り兼てためらひけるに元忠大音あげ一人にても敵を討つて死そるぞ士の志なれ吾三方ヶ原にて足に手負ひ行歩心にまかせざれども逃んとせゝこそ足をも顛ぶめいざ最後の軍せよと下知そる聲を聞て一同に切て出而もふらぞ戰ひて一人も殘らぞ討死しけり元忠戰ひ疲れて玄關ゑ腰をかけ息つぐ處に雜賀孫市重次死骸を踏越てすゝみよれば吾ゝ鳥居彦右衛門よ首取て功名にせよとて物具脱で腹を切たりしかゝ雜賀其首を取たりけり本丸に二つの門ありけるを大手の外ゝみゑ堅く鎖してければ一人も逃ちる者なく討死しけるとぞ後元忠の首を大坂京橋に梟せしを京の商佐野四郎右衛門と云もの鳥居にしたしみ有しがかゝる忠義の人の首を惡逆の罪人と同じくさらぞ事やあるとて夜深て盜取智恩院に葬りて一字を建龍見院と名付しかば石田聞ゝ必定刑罰そべしせんなき事なりと云ける者あり佐野吾久しく恩を受し身なれゝ白刃をふむまでこそなからめ是程の事ゝ人の義なり義なきゝ禽獸なり人生て死せざる事なし刑罰にあゝん事ちつともをしからぞとぞいひけり

○筑前中納言秀詮先陣の士大將平岡石見松野主馬各祿一万石なり伏見の城攻に主馬が仕寄の竹把を城中より火箭を射かけ燒たりゝかゝ其所を退きて竹把を付んといへども村上三右衛門聞入ぞ燒跡ゑ竹把を付ぞしてゝあるべからぞとて主馬と相謀て竹把を付直し竹把の上にかゝ土をぬるべき用意しけり主馬外に出る事を嫌ふ人々ゝ士たりとも内にて土をこねられよ又土をぬりたらん者にゝ中間下人なりとも士とせんと下知しけれゝ下部八人出て土をぬりたりしかゝ其後竹把を燒ざりしとなり旗本より大崎源二といふ者使に來り仕寄塲より堀端まで間數幾許かあると問ふに村上間を打しとなし凡十二間許もやあらんと答ふ大島とてもの事に間を打んといへゝ城近く箭玉の飛來る所に强みを出して何の爲ぞといふ源二殿ゑ問れて間をうたぞといゝんは快からぞといひしかゝ村上旗本の使に先陣の間をうたする事ゝ有まじとて村上靜かに出て竹を間竿に切一間づゝうつ源二先へ廻り靜かに一つ二つとさし終れゝ十一間半なり大島村上進退のふるまひ見物なりと云ひあへりしに源二ゝ廿二歳伏見落城の日討死しけるとぞ

○三刀谷監物孝和ゝ其先祖承久の亂に軍功有て出雲の三刀谷の鄉を賜ゝりけるによりて氏としたり其末雲州尼子の旗下に屬しけり孝和が父彈正左衛門久扶毛利家に奉公しけるが後

仕を止て終りぬ孝和い吉田兼治にたよりて吉田に居たり玄を關ヶ原の時安國寺北村五郎右衛門を使にしてまねきけれども聞入ぞ細川幽齋の丹後田邊の城に行て力を合せんとす從者ども奥州い大國なり景勝い勇將なりいかでかたやすく破るべき西國一同に石田に與しぬ德川家の危き事近きに何とて安國寺が招をいなみ給ふぞと云けるに孝和聞て石田島津に叛かせ内府を引付軍を起させあとにて京大坂と取しめん謀こそ然るべけれ德川家の傾國其便よき會津よ手始をしたるい無謀なり三成必定勝べからぞとて吉田家い幽齋と緣者たりしかば田邊よ行て大敵にかこまれしかども持こたへしい偏に孝和が智勇たくましかりける故なり

○大坂の軍兵一万七千を以て田邊の城を攻る細川忠興い奥州に赴き父幽齋城に有三刀谷孝和大剛の人にて度々切て出防ぎ戰ふ幽齋和歌に長じたる人なり古今集の秘訣爲家卿のしるされしを殊に秘藏せられしが兵火の爲に焚ん事を桂光院知仁親王慮らせ給ひ使を以てかの古今集源氏物語を禁裏にまゐらせよとなり又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて城に赴き給ふともいへり則其書を奉るとて

いにしへも今もかいらぬ世中にこゝろのたねを殘ぞ言の葉

又烏丸光廣卿のもとへ封じたる歌書をやるとて

もしほ草かきあつめたる跡とめてむかしにかへせ和歌の浦浪

斯る處に前田德善院を禁裏に召田邊の城責和平の事を勅命ありけれべ寄手かこみを解て幽齋城を出られけり光廣卿幽齋の許より送らせし書いまだ封をひらき給いざりけるがかへし

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝひ返す浦島の波

幽齋かへしに

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてたに見すかへぞ波哉

○古田助左衛門い古田兵部少輔重勝に任へて祿千石を受く景勝を征伐の時重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置れけり三成兵を起せし時大坂の重勝の屋敷をとりかこみ松坂の城を渡さぞい重勝の北の方を殺害すべしといひ送りしに助左衛門此城い殿の仰なくて人に渡さん事存もよらぞ若さあらぞい北の方害にあひ給いんとや誠にいたましき事なれどもいかにせん妻子の死するが悲しきとて城を敵に渡せしと殿を人讒りゆべし運尽たらば死を潔くそる事弓箭とる身の習ひなり人々い大坂の屋敷にていかにも成るべきに敵やがて城に寄來らべ散々に軍して討死し冥途にて對面せんと大坂の屋敷に云送りけりかゝる處に重勝も東國よ

り歸り來り松坂にたて籠る此時富田信濃守信高阿濃津を守られしが加勢を重勝に乞ふ兵を分ちやるべき体のなかりければ助左衛門阿濃津へ加勢あらん事尤望む所なり敵阿濃津を攻て其後爰に攻來らん若阿濃津落ざる前に東方の味方來らば敵敗北せん其時は古田が士は敵の旗をだに見ぬ富田が力にて松坂を持たりなど人に笑はるべし又加勢あらば隣國相援ふの義に叶ひ又阿濃津にて敵を防ぎしは古田が加勢の故ありと世に申すべしと勸めて五百人の軍兵を阿濃津にやりけりやがて重勝の領知の百姓の中に大家なる者二十人を士として城にこもらせ後は百石の地をあたふべしと約しけり是人質の心にて百姓をさわがせじとの術なり闘ヶ原の亂治りて後重勝約に背んとせられしかば助左衛門信を失ふ君の道にあらぞかゝる言葉は金石よりも堅くすべき事なり是より後又欺んとて百姓ども何事も聞入まじ信なくば立すと申事あり臣ごの祿地を分ちあたふべしといひければ重勝約の如くせられけり

○毛利秀元吉川廣家富田信高の阿濃津の城を攻る時城兵城の乾の隅に有ける伽藍を燒拂ふ處に俄に風かゝりて煙を城に吹かくる寄手是に乘じていざ打破んとて宍戸備前守隆家先がけして攻入りけるを分部左京亮政壽城中に加勢有しが切て出宍戸と戰ひ互に痛手負たり信高本丸の大手にすゝみ出鎗を合せて相戰ふかゝる處に容顏美しき武者緋ぢしの物具中二段黒革にておどしたるを着鎗を提來り富田が矢面に立ふさがり支へ戰ひたり秀元の兵中川清左衛門といふ者を討取たかくて富田門に入る時かの武者を見れば殿は恙なくわたらせ給ふか討死と聞て形は女なりども男におとるべきやとて出申すといふを聞ば信高の北の方なり信高の北の方は浮田安心の女也信高驚きて且悦び打連て城に入り今日の有樣たぐひまれなりと云あへり

○闘ヶ原の軍敗れぬかば長束大藏大輔正家江州水口の城に引こもりしを國清公船戸帶刀を使として降參を勸めらる船戸是は物なれたる人然るべしと辭し申けれども汝とく行向へよと仰せられしかば船戸方三四寸計の小き鉄の板を造らせふところよ入れて水口に行き長束に逢降參あらば士卒も別の事あるまじ此旨よく申せと申なりといふよ長束阿濃津の城攻して闘ヶ原にさせる軍もせで口惜くさらば此城を枕にせんと手の者ども存する處なり然るに降參せんは恥辱なりといへば船戸長束がかたへの士を呼て懷より鉄の板取出し燒てたまへと三左衛門尉が詞今かく申所偽なき印に鉄火をとりて見せ申さんとて思ひ切たる体げにもいつはりならざりしかば長束感じてたとへたばかられていかにならんも力なし汝がしわざたぐひなきによりて降參仕ると相違あし是は見苦しき物あれ共まゐらすとて貞宗の脇指をあたへけり船戸尙座を立ざりしかば長束小性をよんで硯取出し降參すべきよし書て船戸

にあたへ〻かべ船戸歸りぬ

二四〇佐和山の城をかこむ時堀尾信濃守通晴渡邊喜兵衛を呼で凡城を攻むるヨ敵の虛實土地の要害長に知らでゝ叶ふまじいかにもして生捕をせべや汝事よくせんやと云れければ渡邊首を取だに易からぢまして生捕せん事叶ひがたしと申しもはてぬに渡邊が弟才兵衛進み出殿の仰に何とてさゝの給ひぞ喜兵衛年老たり軍令を司るにゝ然るべしかゝる力業ゝ才兵衛に仰付られよといへべ喜兵衛思慮なき事な申う無禮なりといへ乞通晴大志壯力人の及びがたき事をもなし得べき眼さしよと才兵衛を稱せられしのべ才兵衛座を立げり兄の詞ゝ禮義なり汝が詞ゝ血氣なりと人々戒めけれども吾思ふ子細あれべこそとて夜の更るを待て從者一人打連ひそかに城際にしのびゆく茂りたる桑の木の下にさゝやく者あり近くなりてそれのぞのさゝと二人鎗とりてかゝるを才兵衛一人ゝ突伏せ一人ゝ追ちらし首を從者よもたせ城に忍入りて生て歸る事萬に一つなり此有樣を兄に語れと云て堀に添て行所に夜廻りそるとおほしくて打過る其跡についてゆげばふり顧て名乘れとて弓ヨ箭をつがふ才兵衛小聲に敵の忍び後より來るぞ爰に待ちて打んといひつゝあゆみより一丈計になりける時鎗を取のべて敵の弓弦を突切て其儘鎗を取直し諸膝ないで打伏せ上ヨ乘かゝり汝よく聞よ吾殺さんとにゝあらぢしかゝの子細有て忍び來りしに行あひたるゝ天のたすけなり汝死んとならべ吾汝を刺殺して自害せんそれゝ益ぶし吾に隨ひ來れよといふ彼士怒て既に斯成し上ゝ命生んと思ゝんやとて疾刺殺されよと云才兵衛聞て二人空しく死んより生て功あらんこそよけれ軍神も照覽あれ吾偽なきよといへばさらべいかにもせよと云才兵衛悅んで引起し物具よ付きたる塵を打拂ひけれべ彼士あゝれ汝ゝ大剛の人にてしかも辨舌明かなりからめられぬれど恥とゝ思ゝぢ名ゝ松田大介と云ものなりといへば才兵衛松田を先にたてゝ始首を取たる所に行ば從者喜兵衛殿も追つゞいて出給ふが歸られぢといふ才兵衛いかにし給へるにや松田ゝ逃べき人にあらねども汝付そひ居よと云て城の方にゆく所に喜兵衛歸りたるに逢生捕をして兄弟打つれ歸りてかくとヲす通晴ゆゝしき事をもしたるよとて一同にとよみあへり生捕ゝいかにせんと申を東照宮心に任せよと仰あり才兵衛松田に甲せし詞しかゝあり松田に腹きらせられべ臣先死罪になるべしといへば勇有又なさけ有りとて松田もゆるされけり

二四一〇田中兵部大輔吉政石田を生捕にせられしがいと懇に會釋して數十萬の軍兵をひきゐるられし事智謀のゆたしき事と申すべし軍の勝敗ゝ天の命なれべ力ヨ及びがたしと禮義正しか

石田三成
生捕らるる
東照宮
本多忠純
一谷弁
まもる圖

りけれべ三成打わらひ秀頼公の御爲に害を除き太閤の恩に報い奉らんと思ひしに運尽かくなりし事何をか悔むべき是い太閤より賜いりし切刃正宗の脇ざしおりかたみにまゐらそよとて與へけり

馳走の士を付てもてなしたれども片時も早く死んとて食せぞ馳走の士いかで兵部がはからひに及ぶべきよくいたいりて最後の御用意候へかしといひけれべさらば此頃腹中のあしきに韮雑水をたまへと云しかば其設してす、めけれべ快く食して打伏て鼾ありきたり

田中石田を引具して大津に參りけれべ東照宮本多正純に石田を守護すべきよし仰出されけり正純石田に向ひて秀頼公年若く事の是非をしろしめさじ唯太平を致す道おそ有るべきによしなき軍おこしてかく恥辱にも及れしぞかしと云しに三成吾土民より國を賜ひたる恩たとへんやうなし世のさまを見るに德川殿を打亡ぼさぞい終に豐臣家のためよからじと思ひて秀家景勝を始として同心なかりしをしひて勸めて遂に此軍をば起したりき戰ひよ臨んで二心ある輩裏切せし故勝べき軍に打まけぬるこそ口惜けれ二心ある人だにあくべ汝たちを始めかくの如くからめなんに志を失ひたるよ運盡ぬれべ九郎判官も衣川にて空しくなりたりき吾打まけしい天命也といふ正純智將い人情を計り時勢を知るとこそ申せ諸將の同

心せざるも知ぞかろ〳〵しうも軍を起されしものかな軍敗れて自害もせでからめられしいかにといふに三成怨て汝い武畧い露も知ざりき腹切て人手にかゝらじとするい葉武者の事よ頼朝公土肥の杉山よて朽木の洞に身をひそめし心いよも知らじ大庭いからめられなべ汝に嘲らるべし大將の道いかたるとも汝が耳にい入らじ今い是までなりとて物もいいぞ扨石田を始め小西安國寺生どられて三人の肌に木綿のやぶれたるものを着たるを東照宮聞し召石田い日本の政務を取たる者なり小西も宇土の城主なり安國寺またいやしむべき者にあらぞ軍敗れて身の置處なき姿となるも大將の盛衰い古今に珍しからぞ命をみだりに棄ざるい將の心とする所和漢其ためし多し更に恥辱にあらぞ其まゝ京中をわたしなべ將たる者に恥をあたふる事吾恥なるべしと仰有て三人に小袖を賜りけり石田に見すれべこれいたがあたへたるぞと問ふ江戸の上樣よりといへばそれい誰事ぞといふ德川殿と答ふれべ三成何德川殿を尊ふべきとて一言の禮に及ばぞあざ笑ひて居たりけり

三成を誅する時車よ載て六條河原よ出すに石田顔色平生の如くなりしとかや又石田治部が天下を取たと云けるを聞て打笑ひわれ大軍を率ゐ天下わけ目の軍しけることい天地やぶれざる間いかくれあらじちつとも心にはづる事なきよはやさぞしてもありなんといひ

けるとぞ

○小幡助六郎信世ハ上野介信繁が三男にて上野の人なり十五歳にて大阪に赴き諸家の体を見るに石田ハ太閤無二の寵臣なれバ仕へけり後禄二千石をあたへけり關ヶ原にて三成敗北の時おし隔られ三成に從ハぞそこを切ぬけて三成が行方を尋ね江州石山に來りしを郷民からめとりて大津に參る百姓をバ賞せられて金二十枚を賜ハりぬさて信世を召出され石田が行へをとハせ給ふ信世申り三成が士小幡助六と申す者にて主の在所よく知申す然れども年比恩を請たる身の今日の難をのがれん爲に主の在所を申す不義也たとへ骨をひしがるゝとも かたく申まじき 試に拷問あれと申切てけり東照宮聞し召忠義の士なり三成が行方ゆめ〳〵知たるにあらぞしらざる故にこそ落行くからめられたれ士ほどの者を拷問に及ぶべからぞ將たる人ハ忠臣義士に不便をこそ加へめとく縄をとけと仰有て則赦させ給ひけり信世近きあたりの寺に行其由こまゞと語りおもハざる外に赦を蒙りたれども亦恥にあハんも計りがたし屍をかくし給ハれとて自害しけるを大津に申上けれバ殊の外にをゝおせ給ひけり

○關ヶ原の亂の時加藤嘉明の北の方大阪に在しかバ河村權七郎を伊豫の松前より大阪にやりけるに忍びて屋敷に至り北の方に相見え松前より長臣等がかハりとて參りし若奪取んとせんとも臣かくてあらんほどハ危くなき思し召れぞとて屋敷の隅に井樓をあげ柵の木ゆひ敵にぞかへるが如しかなハぬ時ハ自害をすゝめ臣も御供申べしと云けるに細川忠興の北の方自害の後人質を奪ひ取事止たりけり河村に二百石の禄を增興られしに後河村いひけるハ大阪川口の守り固く中々通るべき樣なきと尼ヶ崎の漁夫をかたらひ船に乘網の中に身をひそめ敵の中に入りて守りしハ必死を思ひ定めたる事也關ヶ原の軍に首取たる者に同じからぞ然るに恩賞の薄き事明らかならぬ殿なりとて出奔しけれバ嘉明怒て探出して誅せばやと云れしかバある山中にかくれ居たり大阪の亂起りし時嘉明江戸に殘しとゞめられ不慮の事あらば取まきて攻殺んといひあへり其頃夜更て河村嘉明の屋敷の門をたゝき青木佐右衛門を呼出そ青木あやしみ立出て見るゑ河村なりこハそもいかなる事ぞといふ河村事あたらしきやうなれども君に仕ふる者の忠を致すハ常の習ひなり然るに過にし大坂の事ゑはこりて殿を嘲りて出奔しける事後悔今さら益なし十餘年山中にかくれ居しにしかゝの事にて殿も危くおハしますと聞て夜を日に繼て參りたりとハへば青木誠に義理の志ハさる事なれども殿のひかり甚しければかくと申たりとゆるされじとて歸られよとハへバ河村臣たる者

の義を知れなば河村ハなど來らざるやといいるべきに門内にだに入ぞとく歸れとハ口をしの詞よ此上ハ町屋にかくれ居て殿の先途を見んと云しかば青木さらば先申して見んとて内に入嘉明ゑ告れバそれよび入よとてやがて寢所に召出されしが一目見るより涙を流されしゑ河村も涙にぞせび君臣しばし詞もなかりしが河村おもひもよらぞ殿の御前ゑ出る事よ今生の思ひ出と申す嘉明汝が志いハんやうもなしと悅れけり夜明て河村こそ來れとて下部までいひはやし大軍の援有ぞ加くいさみけり嘉明寵愛しく八千石あたへられけり程なく病死しけれバ奥州四十萬石ゑなられし時河村ながらへたらんにハ國政の輔佐たらんにとなげかれしとかや

○加藤清正の北の方も大坂に在しを石田人じちにとらバやと云を聞しかバ清正より付られし竹田善兵衛家正大木土佐恆持謀を廻らし轉法口に居ける清正の舟奉行梶原助兵衛に山梔子の煎汁を飲せ四五夜ねふらせぞ疲れおとろへ大病人のごとくなりしをかごにのせ綿帽子かふらせ前後に衾かさね門番の前にて戸をひらき斷て屋敷にゆく事度々に及べり後ハ見なれて更に咎めぞ又川口にて蜆蚫船を晩ごとよこぎくらべをさせてけり是も番船見なれて後ハいづれハ早きおそきなどいひて守おこたりぬかゝる所に清正より吾ハ石田に與すべきやうなしいかにもして北の方を敵にわたさぞして落せよかしと云來りけれバ大木たくみつる事にてハあり北の方に此由を告て梶原が衾の下に北の方をおしかくし其上にもたれかゝりて毎のごとくかごの戸をひらき門番の前を通りけり土佐も跡より供して若見咎められおバ北の方を刺殺ぞ切死にすべゝと思ひたれども事故なければ轉法口に行きて頓て蜆蚫船に乘こぎ出し番船の前をつと行過て二三町にもなりければあれハいかにとさわぎひしめく間に鳥の飛かごとく一里あまりもこぎのびぬ番船どもたばかられたるよとて碇をあげ追付んとせし間に行過て遂に肥後に下り着れぬ大木竹田ハ大坂に居殘りて此事浊聞ゑ打手來らば思ふほど戰んと待懸しに闘ケ原の軍やぶれしかば思ハざるに難をのがれけり大木もと佐々成政に仕へ後清正に仕へ才略篤實兼備へしものなれば清正寵愛厚かりしに今度の事により又二千石の祿を增あたへられしとなり

○前田利長の士松平久兵衛若き頃より兵書を讀一飯の間も懈たらぞ常に人に語て云此一人に對するわざにあらぞ万人を一刀に斬の道ありといへり利長大聖寺の城を攻落し引返す時利長の士大將山崎長門守淺井暇よりせんと云久兵衛道細く左右深田なれば大軍の進退いかゞ有べきぞ退さたらん時長重兵を出さバ進退共にかなひがたかるべし敵ハ案内者なり必定

味方不利なりといへども山崎聞も入ぬ既に大聖寺を攻落し大軍なれば敵ハ攻られざるをよきにしていかでか討て出べき若軍を出たさばおしつゝみ一人もあまさぬ討取べしといへば久兵衛長重ハ勇將なり大聖寺の後詰こおくれ口をしく思ひて打出んこ其鋒日比に倍せん吾ハ怠り敵其虚をうたバ危き事なり又誰にもあれ吾城を馬の蹄に蹴ちらして過行敵に箭の一筋も射懸ぬしてかゞまり居る者やあるべき明日の軍陣をみだされなわが敵を恐れぬ證ハあと人々に知らせんものをと云ひけり其夜物主皆張番を出す山崎打巡り見て久兵衛が足輕ハ何故に味方近くに置たるやといふ久兵衛聞もあへぬ勝敗の理をしらぬ敵を侮り勇にはこりて利害にくらき身の士を下知する事こそうたてけれといへば山崎聞て敵を恐れてしかしたるならんと罵りしをかたへよりせんなきあらそひよと留めけり久兵衛いよ〳〵憤て強敵にあたりて目を驚かさん物をと思ひ定めて居たりけり長重の士大將江口三郎左衛門正良惣がまへより見渡せバ敵段々に引退く時こそよけれと兵を出しおし行敵を喰留んと鉄炮を打かくる長重もやがて兵をすゝめらる金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣色めくを見て江口麾を取かゝれと下知すれば松村孫三郎馬を乗出し敵の陣の中を乗切たり荒田五兵衛つゞいて馬を入る長父子ふみ止りこゝを專途と戰ひけるが討るゝ者多し長好連ことし十八歳手の者あまた討せ敵の中にかけ入て討死せんとせしを横田久右衛門馬の口に取付引返す長重の軍勝に乘あまさじと追詰たり太田但馬ハ殿の陣に軍ありと聞兵を返して馳來る水越縫殿介山城橋において鎗を提敵に向ふ松平久兵衛ハ太田が陣よて足輕を下知して居たりしが銀にて飾たる冑を着黒さ物具にて馬を駈よせ來り馬を乘はなし水越が前につと進出て小松の士拜郷治大夫と鎗を合せしかバ水越もりゞいて安孫子作大夫と鎗を合す爰にて双方手負討る、者多し互に精力盡て相引よひき退いても別れせしなり後に利長二人の前後を問れしに久兵衛申けるハ縫殿介ハ初よりふみ止りなば一番誰か爭ふべきと申す縫殿介ハ久兵衛敵に鎗を合せし事はやく一番なりと申す利長聞て武功ハ猶及ぶ者あらんかく讓る志万人にもこゝたりとて一番を松平に定められ共に感狀あたへられぬ松平此時祿五百石後三万石を賜りて伯耆とはひけり

○利長の兵山田勘六郎ハ十四才にて父の仇を討たる人なりある日利長拏藏の戸を開くとて山田に鎗をあづけられしゆゑ急ぎ來れと呼れしにおそかりければ怒て持たゝ杖にて突れしに思ハざるに額に中りて血流る跪て平伏せしに脇差の鞘走りけれバ手むかひもするやとてたゝみかけて杖にて打んとせられしをかたへより山田を引のけたり山田此より病と稱し

て引こもり居たりしに關ヶ原の亂起りて利長大聖寺の城を攻る時一段高き所に打上り武者おしを見物せらる山田五六十人計引具しけふを最期と出たちておし通り城につくと先がけして一番に乗込鎗にて乳の下を突とほされ痛手なれべ堞の下におつるかねて從者にいひふくめしかべ息絶さる内ゑ利長の前に舁來る利長見て後悔せらるゝ事甚しく其あやまちを懇にことわりて涙を流さる山田やがて死けり行年廿歳世にすぐれたる美男なりしが大剛のはたらきして討死しけり其前日したしき朋友に奇南香をわかち贈りしを其頃大聖寺さやらといひてもてはやしたりといへり

○關ヶ原亂の時大友義統木付の城を攻ると聞て如水後卷せられしかば大友立石に引退き石垣原に先陣をおし出す黒田の士大將久野治右衛門歳わかしとて曾我部五左衛門を添られしか敵四五千計立石の民家を後にあて待かけゐるを久野遙に見て金の天衡のさし物さし栗毛なる馬に乗かゝれと下知しけるを曾我部今しゞし待れよはやらば勝利あるまじおり立て馬に息つがせ一同にわりでつかゝせ後に味方のつゞかん時衝かゝり一戰すべしといへども聞入ず久野が從者荒卷軍兵衛と云者豐前の地士なりしが若き時宮松といひて十五歳より功名せし剛の者五右衛門が詞尤なり馬にあて倒し蹴ちらそと申ゝ敵によるべしけふの敵ゝ國替の時よくしりたる者にて皆物しなり近年落ぶれて此亂を死すべき時節と思ひ定め鎗を膝の上におきしづまりゐたる所へ一騎二騎ばら〳〵とかけ合せんにいかで勝べきや鎗をつき折はどの軍ならでゝ叶ふべからずとて馬より飛下り久野が馬の口に取付わか氣ながら餘りのはやりやうにこうあれ後陣に先をさればこそ恥ならめ後ゑおし詰ん時に悪てつき崩すべしと云ひけるに平田彦右衛門といふもの馬に乗ながらいや〳〵後陣をまたんとせべ井上野村するどき男なれべ必先を爭ふべし大友ゞの者ども木付にて疲れ又爰に來たりたりすゝめ〳〵といひけれべ荒卷怒て平田汝と共に豐前の者なるが度々手なみゝ知たるよ今井の攘の軍に汝を追かけて具足の押付切たりし疵ゝ有るべきに其後四兵衛治右衛門が父汝を呼出すとて問れし時汝がけなげさに討とめざりきといひつる故に祿を得しかばわが蔭と悦びしゝ忘れたるかといひすて〳〵馬に乗先がけすれべ二十騎計つゞいたるをおしつめてかゝりけり敵三手に分れたるを一陣を突崩ゑ久野はやりたる者ゐれば少もためらゝゑ一文字に乗込戰ひけれども大友が兵ども度々の事にゐれ今度の亂れに故主の招きに從ひけふを限りと芝居にひたと折しき待かけたれば久野主從五騎一所にて討れけり曾我部ゝ久野が討れたる所に横あひにかけ入て討死を平田ゝ久野が討るゝを見て馬を引返して引退きぬ荒卷ゝ敵競ひ掛るを

見ていざ引んとて人數を集るに敵嚴しう進むを見て言をば皆捨させ馬に輪と懸て引さがり後殿して引退きけるが久野が討死を知ざりし故其日の功名いたづらに成にけり黒田の二陣の士大將井上九郎右衛門元房後に周防と云野村市右衛門後隼人道に到にて鬨の聲を聞此山に上りて敵の軍立を見招くべしと井上手の者に下知し進み行野村先に軍あるゝ分明あり何見わくる事の有べきといへども井上ご陣おしかためて通さゞれゞ今少し先に押出されよ廣き所にて陣せんといへども聞入ざれゞ猶言しを怒りける所に井上主從三騎小山に乗あげさし物をぬいて味方をまねき陣をすゝめけり

井上野村敵ゝ皆かちだちなり馬のかけ場をたのむとも必死の敵にかろ〳〵しくかゝりがたしとて皆馬よりおり立勝に乗たる敵にて殊に諸代重恩の士どもけふを限と思ひ定めたるなれゞ敵かゝるとも相がゝりそべからぜ待軍して突崩したりとも足を亂して追べからぜと下知しづ〳〵とおしかゝる大友が兵是を見てまばらがけせゞ忽突崩さんと思ひしにたがひけり石垣原ゝ原の中に高さ一丈餘の石垣土手六七町計もづゞきてけり井上野村あの石垣をこなたに取ちば軍に勝べしと進みければ敵も同く進んで石垣を踰んとせしをつき崩したれども北るを追ぜ井上鎗を横たへ押とゞめ野村ゝ馬を乗廻し兵を整へたり大友の士大將吉弘加兵衛宗像掃部是を見てかくてゝ味方まけ軍あるべし敵勝に乗て足を亂さん所を追立んと思ひしに力なしとても討死せんと思ひ定めたれはいざかゝらんとて二千計しづ〳〵とあゆみよる井上野村是を見て少しもさわがぜ折敷て相がゝりにもせぜ待懸たり間近く詰寄て散々に突合切合て大友勢一町計引退きけれども追もかゝらぜもとの芝居に跪て心靜に息をつゞ大友勢又押懸りて爰をせんどゝ火を散して戰ひけり吉弘ゝ尖眉刀を打ふりけふを最期とふるまひけるを井上見ていざ參りあゝんと詞をかくれば吉弘打笑ひ渡し合せしが草摺のはづれを十文字の鎗ようかせて深手なれば少ししさりけるを小栗治右衛門が從者弓を持たるが眞中を射つらぬく吉弘心猛きといへども終に叫ゝで言をば小栗取てけり宗像も井上が從者大野勘右衛門と引組たる處に勘右衛門が弟休也と云し法師武者走りより掃部が脇腹に刀を突立ていやとばねたりければ遂にそこにて討れけり大友の勢突崩されてゝさつと引き又おしかゝり戰ひけれども井上野村追かけぜもとの芝居に跪き又かゝれば立あがり突のけ幾度といふ事をしらぜ大友が勢終に打負て殘すくなく討れしかゞ僅計になりて立石に引返ぜ義統力尽て加水ゑ降參せられけり

○義統木付の城に向ふ時細川忠興の士大將松井有吉加藤清正に加勢をたりければ三宅喜

藏をやられけり三宅殿の先陣にて功名せんと思ひしに他國に往て城まかゝまりをらん事ハ存も寄ざる事なりといふ清正汝が武功ある故に他國につかはしたりとも吾名を汚さじと思ひ寄たるに已が名を貪るこそ心得ね永く我家を去て心まかせにせよといハれしかば三宅そこを出て庄林年人にかくと告殿の咎を蒙りたれど殿ならで奉公せんと存する大將ハなしあれ隱し置て給ハらんやといひしかば隼人心得たりと許しけり清正宇土の城を攻る時三宅ハあかねの三本じなへの差物さし夜半より鹽田口の堤に行て明るをまつ宇土にハ南條元琢こもり居たり此元琢ハ伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次が二男にて兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが毛利元就と軍する事度々に及けるに敵寄ると聞て只一騎馬上にて上帶しめてかけ出し半里が程に軍兵ども追ついて速に國境に馳行押寄る軍兵を追散したる勇士なるが秀吉の勘氣にて小西行長が許にかくれて朝鮮にても武勇の振廻せしかり此度清正寄ると聞只一騎城を乘出そ元琢が從者福西九郎大夫是も十八の時より朝鮮の軍にあひて物師なるが元琢にれくれじと城を出て馳行處に山の上に清正の馬廻の馬印ひらめきて見ゆければ彌進んで三宅に行合元琢馬より下りて三宅と鎗を合ハせたる處を福西透間なく走りより三宅を斬りかゝる三宅がつきたる鎗を元琢掴りてつひに引奪ひて既に危かりしに三宅が從者元琢が冑の眞向を一刀斬付たり元琢目眩さてくるゝ廻りながら刀を拔て三宅が從者を切倒そ清正詰の三本じなへハ三宅喜藏をらん討そな者どもと下知せらるゝ詞の下より飯田角兵衛莊林隼人馬にもろ鎧を合せてかけ來りければ元琢敵つゝきなばあしかりなんと三宅をすてゝ引返す清正三宅を呼て其日被られし羽織に千石の祿を添てあたへられけり其後關ヶ原の軍破れて行長生捕になりしかば清正使を城に立城を明候へと云れしかば城代小西隼人自害して城中の者ども助に給ハらんやと申す清正許諾して八代の城代小西若狹も自害し宇土八代を清正に授く清正南條に六千石の祿を與へられけり三宅我もさ存るなりといひけるとぞ

○清正宇土に圍む時ある夜敵夜討をべしなゝ解たりそと下知せられけり果して杉本次郎介を大將として清正の陣に夜討す日下部平介坂川忠兵衛鎗を合せ散々に戰ふ杉本守固きを見て城中に引返す田中兵助ハ酒に酔て臥居たりしが鉄炮の音に驚き起あがり鎗を取てかけ出しに敵引取搦門内に入る杉本一人大手の柵の木戸口に殘り止りたり田中詞をかけたれば杉本十文字の鎗ふて田中を一鎗つきて柵の中に入にけり清正火を燈し軍せし者どもを呼れしに田中今夜先がけしたりと申す清正能見て一番ハ日下部坂川二人の内也二人とも箭創有弓

い鎗を合そる時射て一同にかゝれば射がたきものなり田中が創い右の腕にあり鎗創ならば左の手に有べしことに横に疵のあるい汝が自ら切たるにやと云れしかば田中敵い銀のおもだかの立物打たる冑を着十文字の鎗にて杉本次郎介と名乗たりき猶偽と思召さんにい不幸の至とて退きけり後城明わたし杉本も清正に奉公しければ此夜討の事を問れしゑ杉本城に入んとせし時とつはいの冑を着鎗を提て走り來りし武者を一鎗切きしと申す清正田中が詞證據に符合しければ五百石の祿をあたへらる田中其夜一通の書を殘し虛名を蒙り世の誹にあふ程に加祿に本の祿を添て返して肥後を立退けり田中い其初盗賊よて有しが石川五右衛門といへる强盗の長を秀吉の時京の三條河原にて刑罪せられしに道々見物の男女群をなす田中其中に紛れて石川を引て過る時につと飛懸り石川が繩取を唯一刀に斬倒し五右衛門殿日比の恩に報せしと呼いりさわぎひしめく間よ人の中に走り入終に逃出ける男なり此時二十六歳とかや

○關ヶ原の軍に功有ける諸將の家臣を召て東照宮御盃を下されし時福嶋正則の士大將福嶋丹波い跛足關石見い瞎なり長尾隼人い聾なりしかば近習の人々能もかたいの集りなりとさゝやきけるを聞し召汝等年若とも能聞け女い容儀を尊ふことよよし形いかにもせよかゝる軍に功名したるを男といそるぞかし彼三人い世に勝れたる大剛の者なり汝等志十に二三を彼者に似せたらんいよかりなんとぞ仰せられける

○關ヶ原の後東照宮石田が亂い雨ふりて地かたまるといふに同じ此より靜謐ならんと仰有しに諸大名皆祝し奉りたる處に加藤清正仰の加く惡逆の輩誅せられ泰平たらん事必然なり然れども天下の治亂い天の陰晴にたとふなんにい晴渡りたる晴天と見るも俄に雲の出來て雨うつすが如き事も有ものなれば測かたきい人の心なりと申されければ淺からぬ御感ありしとかや

○關ヶ原の時黑田如水い豐前中津に有しが九千餘の兵を率ゐ九月九日打出て諸所の城ども攻落し筑前筑後の浪人共相集り大軍に成し時嫡子長政の使來り關ヶ原にて石田をはじめ敗北し金吾中納言秀詮い長岐の謀によりて裏切せられし由告られしかば如水大に怒りうつけ果たる甲斐守かな天下分け目の軍いわざと月日を過して浪人のすきはひをあたふるものなり何事の忠義たてぞ日本一の字つけい甲斐守なりとぞつぶやかれける其後長政ゑ筑前を賜いりければ如水も京に上られけるに諸國の大名如水の門ゑ來りて市をなしけり山名禪高如水と年比の友なりしが如水の許に來りて諸將の尊崇大方ならぬ殊に夜中に密談もありて

世の疑ふ事もありなん就中三河守秀康親の如くは敬ひ恐れかたく徳川殿怪しみ思召す處あり徳川殿遠き慮ある人なれべこなたに心安く立入人の中にもいかなる目附をか設けられたらん筑前守の武略徳川殿の賞恩淺からぬ斯て筑前守の爲に惡かりなん徳川殿しきりに用心あるも皆加水を恐れての事なりと人も申すなり猶又醍醐山科宇治に浪人あまた居候も如水の隱し置きたると人々疑ひ申なりいかにと申されけるは如水聞もあへず内府を攻亡し天下を取んと思ひんにいと易き事なり築紫をば皆打平げたり帰洛せみ殘りしかべあつかひを懸て味方とせん若猶つかべ攻敗ちん事尤易き所なり中國備前播磨まで皆空國にて有しかば我其頃二万餘の軍兵をひきゐ加藤鍋島ゐ臣に我に隨從すれべ兩先陣として海陸二手に分ち道々から浪人どもをかゝ集んに十萬ゐあるべし清正ゐ猛將なり吾旗本に有て攻のぼる程ならば内府を討滅ん事掌の中ゑ有と覺えたれどもわれ年老ぬ切從へし國を捨て京に上りしに臆病者どものたゐけにていろ〳〵の事に恐れていふ事を誠と心得られたるやとて扇をぬいて壘を打て大言せられしかべ禪高とかくの詞なくて歸られけり

○備前中納言浮田秀家ゐ關ヶ原の時一萬八千を帥られしが軍敗れて近江の伊吹山にかゝり落られし美濃の白樫村にしばしかくれて有しに遂に忍びて西國に落下り薩州に着れしに其事聞えて東照宮死罪一等を宥めさせ玉ひ八丈島にぞ流されけるまことに苦ふく竹あめる戸に雨をたまらぬ風もふせがねば黒木の柱を削りて書付らる

もしは燒ぢきめかる身ゐ浦風のとふはかりにやゆぶとどたへん

其後芳烈公光政朝臣備前におゐしましける比兒島一説西大寺村の商船風にはなたれて八丈島にいたりけるに秀家九十餘までながらへて居らきしが故郷の者とていとなつかしげにさまぐの物語して

われこそゐにひ嶋ゐりよおきの海のあら波風心してふけといへる後鳥羽帝の御製を短冊に書てかの船人にあたへられけるとぞ

○安藝中納言毛利輝元ゐ關ヶ原の時秀家と共ゑ徳川家に弓箭を取れしかども關ヶ原に自ら赴かざるの故に安藝備後等の國を削られ長門周防兩州を賜ゐりけり是より前小早川隆景遇訓して輝元を誡められし中に毛利家五十餘郡を領し富貴誠に溢れたりといふべし此より後苟にも國を貪る心あらば忽滅ぶべきよといましめられしに輝元隆景の戒を忘れ果して國を削られたりき隆景先見の明かなる露もたがゐざりけり隆景ゐ武勇のみにあらず智謀にすぐれたり父元就病重くありて其子を集め兄弟の數ほど箭を取寄せ多くの矢を一つにして

折たらんにハ細き物も折がたし一筋づゝわかちて折たらむにハたやすく折るゝ兄弟心を同くして相親むべしと遺言せられしに隆景其時爭ハ欲より起りぬ欲をやめて義を守らば兄弟の不和あるまじといハれしかゞ元就悅びて隆景の詞ゝ從ふべしといハれしとぞ秀吉九州を討平げられて後筑前五十万石を小早川にわたへられしに隆景これハ吾に過たる事なり此頃まで敵なりし身に大國をあたへらるゝハ吾を愛するに非ず九州をなつけん爲のかりの謀よと思ひて秀詮に國を讓り備後の三原に引こもられしとなり

○佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波ハ剛の者ゝて白練に火の車を畫て指物とす關ヶ原の亂に義宣上杉ゝ心を合ハせられしかゞ

義宣四万の軍をひきゐ水戸の城を出多珂郡に到るこれ上杉の加勢の爲なり然れども父常陸介義堅ハもと德川家に心有しかゞしひて諫められし故義宣も兵を水戸に返されしとぞ伏見にて義宣の八十万石を六十万石削られ出羽の秋田二十万石賜りけり若いなむならゞ其儘討亡さるべき体なれゞ義宣北國を經て秋田におもむきけり水戸の城を奪ひとれとて本多正信等向ひける時車野組に付し士六人と俱に物具し新羅三郎より傳へたる城を人に授ん事こゝ口惜けれ我とれもいん人々ハ城を枕に死ねやと呼ハり城中にかけ入りしを大手ゝて本多

等大軍にておしつゝみ生捕て磔にかけ火の車の指物をくゝり添けるを東照宮聞し召武家の道を知たる者を空しく殺しけるよと歎かせ給ひけり

○前田慶次利大怨々齋と号す加賀利長と從弟なり

前田の家を立去て

利大ハ文學を嗜みさまゝ藝にも達せり滑稽にして世を玩び人を輕んじける故利家教訓せらるゝ事度々に及べり利大々息ついてゐとへ萬戸侯たりとも心にまかせぬ事あれゞ匹夫に同じ出奔せんと獨言せしがある時利家に茶奉るべきよしいひしかゞ悅びて慶次が許に來られしに慶次水風呂に水を十分にたゝへてかくし置湯風呂ありし入り給ハんやと横山山城守長知をもていへゞ利家よかりなんとて浴所に至り何の心もなくふろにゆかれしに寒水をたゝへたり利家馬鹿者ゝ獃れしゝ引き來れといハれしゝ慶次松風といふ逸物の馬を裏門に引き立てさせて置さたりしに打乘出奔しけるとぞ又京ゝて夏の比馬を川入ゝやりけり馬取の腰に烏帽子を付けさせたり道にて往來の人立ちとまりふとくたくはしき馬なれゞ誰の馬なりと問ふ則烏帽子を着足拍子をふみて此鹿毛と申すハあかいちよつかい皮ゞかま茨がくれ鉄冑鶏のとつさか立えぼし前田慶次が馬なりと幸若の舞を謠ひて引さとはる見る人

の問し度ごとにかくしけるとなり

上杉景勝に仕へけり

初て目見する時土大根三本鼈に居て出しけり

朱柄の鎗を持せしかば何ゆゑぞと咎むるに父祖より持せ來りしといふ水野藤兵衛菲塚理右衛門宇佐美彌五右衛門藤田森右衛門年久しく朱柄の鎗持せん事を望み申せども許されじ然るに慶次を制禁なくべ四人ともに許されたしと訟へく許されけり直江山形に攻入引返へす時最上義光大軍よて追かけ洲川にて軍有りしに義光旗本をひいて切てかゝり合戰數刻に及びけるに上杉勢引き取り兼しかば直江怒てわれ大將として此口に向ひおくれをとる事口惜きよとてもだへ怒りけるに慶次馬乃前に立ふさがり笑へわれにまかせられよといひなてゝ敵味方にらみ合ひたる處に馬を乘かけたり杉原常陸へ発陣に有て種ケ島の鉄炮を下知しけるか慶次におり立てかゝられよといへべ馬より飛下りたり慶次其日の出たちへ黒き物具に猩々緋の羽折を着金のいゝ高の珠數のふさに金の瓢簞付たるを襟にかけ山伏頭巾にて十文字の鎗を持ち黒の馬に金の山伏頭巾かぶらせ唐鍬かけたり前田慶次と名乘てかゝりける處に水野菲塚宇佐美藤田四人も同く鎗を引提げおめきさけんで念なく敵を突退けたるに杉

原種ケ島鉄炮二百挺小高き所へおしあげうたせし故物わかれせしかべ慶次下知して引き取りけり上杉家祿知削られし後士多く暇を取て立去けるに慶次を七八千石一万石を以て招く大名あり慶次われ此度の亂に諸大名表裡の心見限たり景勝ならでわが主君とすべき人なし扶持し置きたまへれとて五百石の祿にて民間に引込風月を樂しみ歌學に心を寄せ源氏物語を講じて世を終れり

○上泉主水憲元へ甲斐の武田の家にて劔術の上手上泉伊勢守の弟なり法まれ有し者なるが京の相國寺の内に落ぶれ身を寄せ居しを秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが傳へ聞て對面じさまゝ上泉をもてなし會津へ遠國なれど景勝三千石の祿まゐらせんとなりといへべ上泉かゝる身に思ひもよらぬ詞を承るとて仕へけり直江出羽に押入る時上泉も三千五百の將たり最上方にへ山の上より幡屋まで二十四ケ所に出城を設けたるに直江へ眞直に山形よそゝんで攻とらんと謀りける所に幡屋より春日右衛門にしたしみある者のかへり忠せん事をいひおくる直江悅んで山形にすゝむ兵を押止め山路にかゝり幡屋によせんとす軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣を以て幡屋よすゝめ惣軍へ山形に攻入りて然るべからん敵我よ利をあたへ嶮岨にそびき入れ其ひまに山形の要害を能せん謀なりといへども直江もとよ

り杉原と中よからざれゞ我ゝ唯易に就んとて聞入ぞ頓て幡屋を取圍み一時攻に乗破りけり

それより出城を只一日の中に二十一ヶ所攻落しさらゞ山形に押寄せんといふ上泉が云山形ゝ勝れて要害よく西南ゝ沼なり東北ゝ石壁高く柵の木七重有り失倉二十餘所にかまへ且義光ゝ先祖より數百年此地に有り士卒に物なれたる者多し力攻にゝ思ひもよらぞ所々の小城數多攻取たるにて勇氣を示し軍を返されん事然るべしと申す直江あざ笑ひ軍を出せしゝ山形を攻んためなり今更山形の要害よけれゞとて引退くやうやある汝ゝ淺黄じなへの差物さして利根川二本木の先陣せられしによりて關東にてそれを憚りて淺黄じなへを指ものなしと聞きたりしにも覺ぬ事をいふと罵りけれゞ上泉口惜き事ありと思ひけり直江ゝ進んで菅澤山に陣したり此處も長谷堂より十九町なり義光も二万餘の兵をひきゐ山形を出長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣を長谷堂にゝ山形の加勢も來り要害よけれゞたやすく攻がたし討て出ての軍ゝ危しと制しけるに大風右衛門二百計にて切て出上泉が陣に向ふ上泉大勢にて押つゝみあまさじと戰ひけるが大風僅に打なされ切りぬけて城に入り伊達政宗も軍を出し先陣長谷堂の城下に來押たり陣を取りたり直江ゝ大風を討得ざると殘多し此城哉唯一時に打破れと下知し城際に攻寄せたり直江高き所より打上り石火矢を透間もなく打懸たるに只千雷の落かゝるが如し志村伊豆鮭延越前こゝを專途と追出しおひ込れ相戰うて其日も戰ひ暮しけり直江又三千餘を城の後の山に上らせ鉄炮を打かくれゞ城よりも切つて出死傷數をしらぞ直江軍兵をわかち四方を燒ばたらきす所々に軍あり長谷堂の城下に大なる池谷を堰にして水をせき滿へたると覺しければ物見の兵を遣し又一陣を以て燒ばたらきす城中よりひた冑八百計切つて出しかば直江使を以て引取れと下知すれどもにらみ合ひて引き退かぞ使も行とゞまりて歸らざれゞ次第に軍兵行重り鉄炮を打合ひけれゞ直江杉原にとく軍を引上げられよと云上泉我れとそ行かめといへゝ杉原進むゝ年若き人の業引揚るゝ老年の我に惜ひたりとて同心せざるに上泉存る子細ありといひもわへぞ馬を乘出しければ組に付けられし大高七左衛門馬を乘付上泉を引きとゞめ士大將の只一騎にてかけ出るやうや有べくもなしといへども耳にも聞き入ざれゞ大高もつゞいたり前田慶次字佐美民部上泉が陣に行き一陣の大將敵に乘入るをよそにひかへたるゝ士の本意ゝ非ぞいざかゝられよといへども進むけしきの見えざれば前田をはじめ二十騎ゝかり駈向ふ上泉大高ゝ馬よりおり立面もふらぞ鎗を打入れ突合たるが念なう敵を突退け引取んとする處ゝ政宗の兵三百計横あひより切つ

て懸りければ上泉兼て直江が詞を怒りたりし故に一足も引くまじと思ひ定めたれば又合戰を始め火出つる計に戰ひけるが敵味方討るゝ者多し前田宇佐美を始め大剛の者ども數度さつてかゝりしかば政宗の兵三十餘人討れたりかゝる處に政宗の士大將石川彌兵衛崩るゝ味方をもり返し又打つてかゝる前田巳下立ちこたへかゝりつ返しつ散々に戰ひけり直江日も暮かゝり進みがたしとく引きとれと下知しければ上泉心得たりといひ捨て敵に向ひ上泉主水といふ剛の者打取と名乘かけ死狂ひに數十人切伏終よそこにて討死しけり是より上杉勢亂れ立て敗北すれば義光政宗勝に乘あますなと追つむる芋川縫殿村上國清四千斗横合よりかゝらんと陣を整へひかへたるを見てふみとまりければ又取つて返し追立てそれより物わかれす石坂興五郎蓼沼日向前田慶次宇佐美父子物具に立所の箭各七つ八つ折かけ鎗ハ突もがめ刀ハ刃さゝらの如く斬なし人馬共殷にうみたるが上泉が組の扣へたる前を乘通ると各大將主水をすて殺しをのこの交りハなるべからぬ大高七左衛門のみ士なりと罵りて打過るに答ふる人なかりけり

○慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を間者にしてかこたりを伺れたり松川ハ阿武隈川の枝川にて伊達領の境なれば本條出羽守甘粕備後岩井備中杉原常陸栗生美濃岡野左内五千計にて守りけり政宗ハ國見峠を踰信夫郡より瀬の上の川を渉り五千の兵にて梁川の城を押へ松川をさして押寄る物聞ども斯と告れば本條出羽城を出川を渡してや戰ふ川を前にして半途をや打んといふ處に松本内匠敵不意の利を謀て押寄來るゑ味方川を渡りて待かけおゝ政宗思ひしにたがひて必そ引き退くべきなり川を渉らんこそよかりなめといふに栗生同心せず此川中程にて極めて渡す事たやそからぬ政宗わたらん處を半途を打つに利あらん岡野いや〳〵敵大軍なり爰に待んハ敵を恐るゝに似たり勇士の志にあらずとく川を渡して待設せんと云ふ栗生孫子に以少合衆是曰北といぬとあり小勢にて無謀の軍せんハ大敵の擒とならんハ必定なりといふ處に甘粕備後杉原常陸もはせ來りまづ物見を出せとて猪俣主膳本庄段右衛門井筒小隼人乘行て馳歸る猪俣ハ政宗川を渉らじといふ二人ハ政宗川を渡さん事半時計もやあらんといふ子細を問に猪俣敵馬の沓を取ぬ障泥をはづさぬ羽壺を常の如く附たりといふ井筒本庄が云我等見し所も同じされども政宗いまだ來らぬ其間五町計もあらん政宗川際に押寄て其支度せんに何の時刻を移すべき且小荷駄を遠く引退たれば戰ひを持たる敵あり政宗二萬の軍兵を帥て寄來り空しく引返せやうやあるまじといふさらば川端二町計置て陣を整へて敵を待んといふ所に岡野ハ切支丹を信ぜる人なるが南蠻

人の贈りける角榮螺といふ冑を着風先かけて川を打渡す栗生甘粕川を渡るべからぞと下知すれども布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門等二十騎計眞しぐらに川に乗入り打渡す宇佐美民部鎗を横たへ殘る兵をば押とめてけりかゝれば政宗押來り先陣片倉小十郎透間もなく切てかゝる岡野四百斗眞丸になりて鎗を打入面もふらぞおめきさけんで戰ひけれども大軍に取かこまれ左内僅に打なされ切ぬけて引退く北川馬の首を立直し小田切に向て唯今討死せん會津に殘し置きける十四歳なる吾子を嘱申よ是をかたみに送りてたまへとて猛々緋の羽折を脱で小田切に渡しければ小田切若万死に一生を得しならばたしかに送り申す可くとて羽折を腰にはさみけり北川今い思ひ置事なしとて追くる敵の中にかけ入て切死をしたりけり是をはじめとして歸し合せ火を散して戰ひけるが討たるゝ者多し政宗勇み進んで追かけられしに岡野猩々皮の羽織着て鹿毛なる馬に乗り支へ戰ひけるを政宗馬をかけ寄せ二刀切る岡野ふり顧て政宗の冑の眞向より鞍の前輪をかけて切付かへす太刀に冑のしころを半かけて斫はらふ政宗刀を打折てければ岡野すかさず右の膝口に切付けたり政宗の馬飛退てければ岡野政宗の物具以の外見苦しかりし故大將とい思ひもよらぞ續いて追詰ざりしが後に政宗なりと聞て今一太刀にて討取べきにとて大に悔みけるとあり岡野い川へ乗入たるに政宗又十騎斗にて追かけ來りさたなし返せと呼いりければ岡野ふりかへりて眼の明たる剛の者い多勢の中へかへさぬものぞといひて岸に馬を乗上たり宇佐美兵左衛門十六歳松川の向ひに岸にて危く見ゑしかば父の民部馬を川に打入たり栗生いかに先にい川を渉る者を止められしが何事に渡されしや名將の宇佐美駿河守の子息にいいかにと問へい民部謀も心より出ぞるものなりあれ見られよ一子の兵左衛門向の岸にてはやうたれぬべく見ゆれば心の亂れたるぞやといひも終らぞ川を渉り打連て引返す栗生い陣を整へて待かけたれば片倉が軍兵を退崩し川に追ひたすされども大軍見る内に重り攻寄しかば上杉勢い福島をさして引退く福島に至て行程ねなか道十八里なりといへり政宗いづくまでもあますなと馬煙を立〳〵追かけしかば物具を道よ捨る事數をしらす息きれて行倒れたる者もあり持鎗の長き柄いもち堪がたくて多くい捨けるとぞ岡野いもと蒲生家の士なりしが上杉家に仕へけり富有なる人にて儉を好み奢をにくむ一月の間二三度も金銀を山の如く積て其中に臥てなぐさみとしけるを聞く人そしりあへり或時岡野いつもの如く金銀を並べて見居たりしに近きあたりの士あらそひをし出し方人の者どもあまたかけ寄てさわぎしに岡野聞といなや正宗の刀を提て走り行一日一夜其家に有て事能とりあつかひて歸りけり岡野が馬取の下部大板金一枚持たりと聞及

び呼出して汝が志こそゆゝしけれ人ハ貴賤よらず貧くしてハ義理のなすべき事も心バかりにて叶ひがたしよく心がけたりと云て黄金百兩與へけり景勝會津に兵を起す時永樂錢一萬貫文を獻じ朋輩の親しみ深き人々にハあまた黄金をわかち送りけり軍のしたくに人々ハひしめきけれども岡野ハ猿樂に舞をゞれとてさわがず人に語りて日比ハ武備におこたらず猿樂ども世のゆたかなる時ハ諸方にまねかれて暇なし今人々あわてさわいでかの者どもいとまあれば玩にまねきたるよ軍に臨む者生て歸らんと思ハざればこそ今生の樂しみと思ひてなぐさみたりとぞ云ひける

○關ヶ原の亂をさまりて後東照宮本多正信を召て石田が子妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを寺中一同して重非の人の子なれども幼き時より出家したる者なれバ赦されよといふハいかにと仰有けれバ正信とくにも御赦されの有べき事ゆり治部ハ徳川の家よ大功をなしたる者なり治部よしなき軍を起し西國中國の大名をかたらひしに一戰に打負たる故にこそ日本六十餘州皆徳川家に歸服いたしたり治部が存立しよりかく日本ハ從ひぬれバ徳川家に大功を成たるよ非ずやと申ければ東照宮汝が理屈もさる事なりと仰せられてかの僧御ゆるされを蒙りければ岡部美濃守宣勝懇よして和泉の岸和田にて終りけるとかや

○關ヶ原の亂の時越後に一揆起り堀左衛門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を責る堀監物が子丹後守直寄坂戸の城にてかくと聞き後卷にかけ向ふを敵引たがへて坂戸を攻めば如何あらんと云もの有直寄いまだ下倉を救ハず敵此城に攻來らずハ敵の旗先をゞよ見ず口惜かるべしといふよりはやく打出て下倉に向へバ小倉も門を開て切て出直寄後より一文字に突懸り一揆の長田丸右京を打取たり此告を坂戸にて書する時勝利を得んと書せしかバいかゞあらんといふに直寄あざ笑ひ打まけば戰場の土とならんにと云て出られけり一揆柿崎齋藤巳下五千計猪山により前に平田とあてゝ陣しけれバ直寄借太閤の前よて九長老の孫子をよみしを聞たるに兵ハ少正合以奇勝といへり吾けふ奇を以て軍ゝべしとて山中數馬逃水織部に馬じるしを渡し直寄ハ六百計引分て林の中に待居たり一揆馬印を見て進み來る時林の中よりどつとかけ出直寄眞先にすゝみて思ひもよらぬ不意を討一揆二百餘討取て切崩したり此直寄ハ幼少の時紙でこ土でこひいなやうの物を玩ひて人の贈るにも他のものハ悦バずされバ人ごとに贈りけるほどに大なる籠に入て有しを人々あやしみ思ひけるに常に人なき所にかのでこを並べ武者押陣取をして戯れ悦ひしとぞ

○越後の一揆三條の城に寄る時道に伏兵したり溝口伯耆守宣勝兵を出して三條に赴くに世

問太兵衛先陣せしが小川の脇に新しき糞の有を見て此邊に兵を伏置たるならんとて搜しけれべ伏兵驚きて逃げるを追かけて百餘人討取たり

○眞田安房守昌幸ハ海野小太郎幸氏二十一代の末なり父海野彈正幸隆信州眞田に居て眞田氏と稱す武田家の臣となる嫡子源太左衛門信綱ハ長篠にて討死す二男武藤喜兵衛昌幸と云長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫をやけるに其一條にて昌幸に兄の家をつがせられけり父の幸隆後一德齋と号す昌幸信玄の近習にて十八の歳川中島にて鎗を合せたり天正十年勝頼諏訪に陣し四方より敵來りし時昌幸吾妻の城にこもられよといひけれども長坂長閑其諫を用ひも勝頼郡内に赴きて死去て國亡びぬ北條氏政兵を出して甲府を攻取んとするとき昌幸德川家に屬し依田信蕃と碓日嶺に陣して北條の粮道を塞ぐ東照宮北條と和平し給ひ上野の沼田を以て甲斐の都留信州佐久二郡に換らるべしと約あり是より前昌幸沼田の城を攻取て要害の地とせり眞田に上田と與へ沼田をば氏政に渡すべきよし仰出さる上田ハもとより信玄以來眞田が居所なり昌幸われ德川家に功有といへども僅に上田と沼田を賜ハりぬ賞甚薄しと思ひ辭し申して豐臣家に屬すべきよしを云送りし其折から秀吉東照宮の上京おき事を怒て此を悅び密に上杉景勝と眞田に力を合せよと下知せられしかば千六百の兵を眞田が許に援とす東照宮眞田ハ奸謀ある者なりともとより憎せられける上無禮の咎を怒らせ給ひ大久保七郎右衛門忠世鳥居彦右衛門元忠平岩七之介親吉柴田七九郎康忠を將として七千の兵を以て上田を攻させらる昌幸城より一里計隔たる加賀川を敵渡る時半途を打べしとおもひけるに甲州の浪人板垣修理たとひ敵の半渡を討て利有とも三遠の物師どもなれべ敵の後陣二の見の勝あらんと云ひけれべ昌幸尤なりとて城に近き砥石の城に嫡子信之矢津の砦に矢津但馬をこめ置き寄手必ず染屋平より寄べしよわ〳〵と引受けて不意に突て出んとの謀なり又城外小野山のかげに鄕民を伏置けり寄手すゝみて町口に押入惣郭の内横小路ゑ柵をくひ違ひにゆひて籠をかけ其蔭に伏兵を置鉄炮を打かくる昌幸思ふ處に引受城門三方より一同に打て出たれべ寄手支へ兼て崩しかべ討たるゝ者多し砥石矢津よりも切てかゝり鄕民もゝみ合ひたれべ大久保十四五騎にて蹈止り戰ひて加賀川まで引取つたり鳥居ハ高き道を退きけるを砥石の兵陰留んとて慕ひ來れば五六町計の間に討るゝ者數多なり大久保ハ鳥居が敗軍を見て忠世唯一騎引返へす弟平八忠孝彦左衛門黑き物具に銀の揚羽の蝶のさし物にて乘付て馬より飛下り鎗を提て扣たる處に敵押懸る中にも眞先なる兵を突伏たり忠世が返すを見て松平七郎右衛門をはじめ引返し來れり平介ハ小高き處にふみこたへたれども眞田も進

み得ぞ其間僅十間計り過ざれども忠世少しもひるまぞ日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす平介それこそ敵よ三つ巻を付ざるぞと云けるに日置いかゞあやまりけん味方ぞと心得て日置五右衛門なりと名乗て通る處を足立善一郎政定鎗おつ取鞍の前輪を突五右衛門が從者鎗を取直し善一郎を突平介が前をはせ通らんとすれば平介またつきけれども從者鎗を揃へて平介に向かふ其間に五右衛門乗扱し所を氣多甚六郎のがさじとて追さまに股のはづれを突其時五右衛門ふり廻り川中島の加勢と思ひて危ふかりしといひてかけ抜たり忠世平岩が陣に往て敵いまばらに追懸來れり我跡を詰られなば切つてかゝるべしといへども親吉敵小勢なれども必定近所に伏兵有べしとて進まぞ其間に昌幸城に引入けり此日酒井與九郎殿して敵の首を取ければ其日の一の功名なり翌日忠世康忠眞田が枝城丸子を攻んと鎗麾川を渡るを眞田見て海野町へおし出し八重原を一騎打に相働く忠世鳥居平岩に後を詰ば敵の中を取切討取るべしといへども同心せず眞田引取たり味方い八重原に陣し眞田も城を出て陣し足輕軍あり芝土居をつき柵を結菊田働きよ日を送るかくて溜松より井伊直政大須賀康高を始めとして五千餘援兵たりされども秀吉の下知により景勝大軍にて上田の後巻するとの聞る有り諸將相謀りて陣拂す昌幸が次男左衛門佐信仍つけ慕いんとす大返しにかへして軍すべき物色を昌幸見て信仍を制して追ざりけり其後東照宮太閤と和平なりしかば景勝の加勢の頼もなく信州甲州の人々を眞田頼みて秀吉に申て德川家に歸り屬すべき旨を申せば御飾容あり天正十五年正月七日昌幸信州深志の小笠原右近太夫貞慶と共に駿府に參りて東照宮に謁し奉る斯て北條征伐の事起れり天正十六年八月北條氏政の使として北條氏規聚樂に參氏政上京すべしといへども上野の沼田い天正十年德川殿と和平の時相渡さるべきを眞田恣なる事を申て北條家志を失ひ早く安房守に彼の地を北條に渡すべき旨をしめされなば氏政上京せんと申ける秀吉聞給ひ往年の事審に知ざる事なり北條家に土地の事能知る者を上京せしめよとて氏規に暇給いりぬ翌年坂部岡越中融成入道江雪大坂に赴きければ秀吉事のよしを聞給ひ眞田が上州の内の所領三分二并沼田の城を北條に渡し其換地よい德川家より眞田ゑ與へらるべし同所三分一名胡桃城とも眞田已前の如く領そべきよし江雪に命せられけりかくて眞田が方より沼田を武州鉢形の北條氏邦に渡し氏邦其從士猪俣能登範直を沼田の城代とせしにゐなか人にて得失の辨なく名胡桃の城を眞田が領せし事を怒りたばかつて城を奪ひ取たり昌幸太閤に訟へしかば太閤北條い沼田を得ば上京すべきと約しながら遲緩を怒られし上に此事を聞て氏政を征伐せんと志決して天正十八年秀吉師

を出して小田原に打向ふる東山道の先陣前田利家碓日嶺に至り上杉景勝ハ坂本に至れば名胡桃を奪ひ取し猪俣ハ戰ハもして城を捨逃落けれバ眞田信之後伊豆守城に入る事を得たり昌幸ハ去る天正十三年以來秀吉の恩顧を得しかバ大谷吉隆に申て次男信仍を秀吉の許に人質に出しけり其後石田兵を起すの時眞田父子三人ハ奥州に打向ふ途中に石田が使來りて秀頼公の爲に旗をあげ同心せられバ信州に故主君の地甲斐を添て參らせん偽なきしるしにとて起請文を送りけり昌幸素より德川家に二心あれバさらバ引返すべしといふ信之是ハ然るべからもも内府智勇勝れたる人なりいかでかたやすく討滅さるべき思ひも寄ざる事なりと諫れども昌幸聞入もも昌幸ハ引返して沼田の城にて信之が妻に對面せんと云けるに信之の北の方聞もあへもも飲に父子仇となりて引き分れ給ひしかば父にておハすとも城に入奉りてまみゐ申さん事思ひも寄ぎとて本丸の門を固めさせ自ら物具取出し女房共皆刀を側に置きたり厠にあし毛の馬あるべし厨の土間につなげとぞ下知せられける昌幸聞て吾過ちなり人々能聞日本一と世に云る本多中務が女なりけるよ弓取の妻ハかくこそ有べけれ此婦人あらんにハ眞田が家危からじといひけるとぞ昌幸夫より須河に至り高間越にかゝりて上田にかへりけり台德院殿木曾より登らせ給ふ時御使を以て禍をまねかるゝにてくそあれ降參せよ

と仰有りしに昌幸聞て秀頼の爲に城を守る攻られバ一矢仕らんと答へしかバ又御使にて石田小西等已が威權を恣にせんが爲にかゝる企に及べり豐臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知べし猶降參なくバ信之に腹切らせ其後城を攻破るべしと仰送られしに昌幸聞て太閤恩深き人々の背くハ此人々心の同じからざる故なり既に子なる信之父と相違ひたるにてしろし召さるべし信之に腹切せられんやと親の子を愛するハ誰も同じ事なれども信之父と、もに城にあらバ同じ枕に討死すべし信之を助くべきにあらぬと答へせしかバさらバ攻よとて陣を寄せらる其日ハ百姓の家に込入たりしに榊原康政眞田今夜必す夜討すべしとて物見を出し篝火を透間なくたかせたり果して信仍夜討せんと支度したりけれども康政の設によりて夜討ハせざりけり斯て明れば九月六日押寄給ふ淺見藤兵衛只一人堀際に進みける處に打懸る鉄炮に朱よ十二引の差物打されて其身もひしと折敷伏して味方の續くを待ぶ栗治右衛門大音あげ淺見功名せうとて深入しふかくなせそと呼ハるを聞淺見立上り汝に先をさせんやというて門に付處に門を開きて討て出淺見小栗得たりと鎗を合するに左右の出し扉より打出す鉄炮雨の降が如し淺見ぞ從者虎若といふわらハ剛の者にて刀を抽き鎗の穂先をくゞり入て敵の足を薙拂ふ淺見も痛手を負倒れしを虎若足を取て引提げ持歸りけるに

淺見小栗をも助けよと云虎若聞て主人の先途の爲にこそ來りたれ他人を何にかせんと云てかい負て引退く淺見差物をたゝき落されたりと覺ゆ取て來らずば生甲斐なしといふ虎若北るとて差物を落さゞ恥なり鎗を合ハせて落したるハ恥ゑ非ぞといふて念なく歸りけり城兵山本清右衛門依田兵部堤の上に上るを見て寄手三十騎計馬を並ておめいて駈よせひし〳〵と馬より下りて進み行齋藤左大夫山本依田前につと出名乘けるを見ると均しく御子神典膳辻太郎介わたし合入亂れてたゝかふ御子神ハたゞひなき早技にて鎗をかざし堤の中にひらりと飛入朝倉藤十郎中山助六戸田半平鎭田市左衛門太田甚四郎齋藤久左衛門きそひかゝりて鎗を合す依田朱塗の物具にて戰ひけるが深手負て倒れしを御子神辻依田を一刀づゝ切たりけり山本も鎗を打折り痛手負ながら依田が屍を肩に掛て引退く寄手追つむれば城兵又切てかゝるを中山鎗を合ハせ太田弓にてさし詰引つめ射たりしかゞ門に追込たりされども鉄炮をうち出ぞ事霰の飛がごとく寄手の先陣地ゑひしと跪てけり本多正信下知して城をべ責ぞ昌幸と信仍ハ中の手に出るを牧野右馬允康成同新次郎忠成はせ向ふ其間二町斗もあらんに眞田父子八十四人手づゝみを打て高砂の謠をうたふ榊原にくきやつかあといふまゝに嘶先に馬を乘出す其兵二千計後を取切んとすれば渡邊半藏も鉄炮をうちかけて進みしかば

松澤五右衛門敵の付入心許なくとく城ゑ入ゞやと諫めて眞田高砂の謠を終らぞして引入けり康政康成おしつゝいて寄けるを正信かろ〳〵しう攻ん事然るべからずと制しけれゞ引返す戸田辻等の七人を上田の七本鎗と世に申なり戸田ハ銀の髑髏のさし物辻ハ白き四半に辻といふ字を墨にて書たり信仍箭文を射させ二人の武勇を稱しけり此中山ハきゝめたろ馭法の上手ありとかやかくて力攻にせられゞ人死傷せん早く美濃に赴かせ給ふにしかじと評定有森右近大夫忠政を上田のおさへとし台德院殿かこみをとかせ給ふ榊原殿せしに眞田遙ゑ見て榊原が有樣吾を侮れり追かけてくひとめ一軍せんと云けるに眞田が許ゑ年老たる法師武者の謀ゆゝしき有けるが康政はどの者いかゞ其謀なかるべき古の兵法に歸師勿逐といふ事ありとてとゞめて追ざりけり東照宮榊原ハ必ぞかゝり引にすべきもの也と仰られしゆゑ後に召て御尋あり榊原承り御大將ハ城に遠き山にかゝりて引給へと申て臣ハ城下を眞直に殿仕たりとゆせしかば東照宮汝必ずからんと思ひしに果してたがハざりけりとぞ仰られける石田が軍やぶれしかゞ眞田父子を誅せられん處に信之此度父と引分れたりしハ父を助給へなりたゝへ大國を賜ハるとも何にか仕らんあハれ信州を以て二人の命にかへゆ度旨をゆされけるに信之に信濃十二万石の地を賜ハり昌幸信仍ハ御赦を蒙り城を出て

興昌幸
紀州
九度公ホ
退隱
圖
智信

紀州高野の麓九度山に引籠る信仍常に父と兵法を談じて天下の時勢を計りけり昌幸の六十七歳にて九度山に死す其後大坂の亂起りしに秀頼信仍を招かれけり此比世の中さわがしかりければ紀州の淺野長晟の領地なれば橋本山の百姓に真田大坂に行事あらんおしとめよと下知せられしかば用心きびしうしたりけり信仍橋本山の百姓數百人を九度山にまねきかり家あまた設けて酒宴ひてもてなし上戸下戸をいわせしひたりしほどに醉伏て前後なしらぎ其時百姓の乘來し馬にいろ〳〵の物取付百人計打立て紀伊川を渉り橋本山より大のめ路にかゝり大坂にぞ行たりける道々にて百姓のみな九度山にゆきぬ殘りし女わらべども信仍が鎗眉尖刀の鞘をはづし鉄炮に火ないをはさみもし押止る者あらば忽討殺すべき体を見てせんうたなし九度山に醉伏たる者ども夜明て見れば真田のおしいかにと問べ昨日しか〳〵の有樣にて河内路に起きたりといふ欺れしと悔めども力及ばぞ信仍大坂に至り只〳〵人大野修理治長が家に行信仍其比薙髪して傳心月叟といひけり大野が士信仍といしらぞ何國の修驗者ぞと問信仍大峯より承るといへば折節修理の居合せぞして番所のかたへに呼入置ぬ修理歸りて信仍を見て大に悦びとくも參られたるよと禮儀正しくして書院にぞねぎ入もてなしぬ秀頼速水甲斐守時之を使として黄金二百枚賜わり軍兵の事のやがて下知有べしとなり

既に東西の軍起るに及びて東照宮いかにもして信仍を降參させばやとて叔父隠岐守信尹を以て此旨仰られ信州にて一萬石賜ひなんとなり信仍同心せざれば又信州十國賜るべしと仰出されけり信仍怒て義の人の道なり秀頼に三心あらん事存もよらぞ重ねてかゝる使をせられなば存る旨ありと罵りて信尹を追返しける斯くて大坂冬の陣に出丸に有て防きけるが大敵の責じ時守固かりけり和平に及て信仍越前忠直に仕へし原隼人貞胤のふりしよしみ有て招きもてなしけり原のもと武田家の士也酒盃數献の後信仍鼓をうち子の大介に舞せて興しけるが信仍云けるは吾必討死せん身の思ひの外にながらへて再會する事よされぞ終にの軍に及ぶべし落ぶれて九度山に隠れ居しが一方の大將となりて豐臣家の恩たとへんやうなしあれに見ゆる鹿の角の立物の冑の眞田家に傳へたる物とて父安房守讃り與へある重ねでの軍にの必けんぞる物なれば見置てたまれ又命のをしからねども大介がおもひ出もなく空しく戰場の土とあらんの不便なりと語りけれの貞胤も涙を流し軍に臨む者誰か生て歸らんとおもふべきと者へしに信仍白河原毛なる馬に六連鐵を金もてすりたる鞍おかせ庭にて乘まわし原に見せて城の壞たれたれば天王寺口にかけ出で馳めぐり下知して思ふ程軍せばやと存ぜれば此馬のかゝゆくやと語て又酌醉て別れけり果して和平敗れしかば元和元年五月大坂よて

軍評定あり後藤は大和口の先陣にて平野に陣しぬ五月六日の夜信仍毛利豐前守勝永と二人打連て後藤が陣に行明なば國分の山を踰三万の軍兵を一陣にして闘東の旗本に一文字にかけ入軍神も照臨あり兩御所の首をとるか三人の首を實檢にそなふるか二の中よりとて最期ろ盃せり後藤は六日の夜半に打出道明寺口にて討死しけり毛利は藤井寺に陣を進し處はや後藤が軍やふれ闘東の軍兵二三十万もあらん洪水の溢れ來るが如し眞田を待どもいまだ來らぎ眞田は兄の伊豆守と同心して裏切するよと人々罵りける所に住吉街道より赤旗おし立馬煙ふみ立て來るをみれば金の蠅とりの馬印にて眞田なれば毛利が陣もいさみあへり信仍眞田の方にすゝめべさていよ〳〵二心よと人々あやしむ處に信仍堤の上にあがり鉄炮を進めて伊達政宗の先陣片倉小十郎に向て討てう、る信仍眞先に進てたゝかひしが片倉が陣敗北を逃るを追て敵あまた討取たり片倉金の鐘の差物にて麾をとりもり返す政宗の旗本の騎馬の鉄炮もすゝみ來る奥州は聞ゆる馬多き所なればよい馬を擇びて若き士に乘馬上より鉄炮をつるべ立させ敵ひるむ所を馬の首を揃へて忽乘破りかけみだして追崩す軍畧なり悉だ其間相去る事遠かりしかば信仍いさ疲れたるに息をつげ冑を脱と下知しければみな冑をぬいで休み居たり敵やゝ近付しかば信仍さらば冑を着よといふほどこそあれ冑の緒をし

め鎗の穂先をそろへて敵に向ふ政宗の鉄砲筒手なりに成てかゝり來り雨の降ごとく打かけたり信仍眞丸に成てとてものがれぬ所よ一足も引なもの共と下知しひた〳〵と跪て聲々に念佛をとなへ力を合せてこたへたるに信仍大音あげ一すも引な笑に死ねやと下知して鎗を取てかゝれば士卒一同に立上りおめいて鎗を打入たれば政宗の軍兵大に破れ一支もなく崩れけり此を世に眞田が天王寺口の軍とて大軍の騎馬鉄砲に打勝たる有樣をつたへて稱しけり信仍士卒を立固めたづ〳〵と毛利が陣に來る大介今年十六歳組討して取たる首を鞍の四方手に付手負たるが流るゝ血をもぬぐはで馳來るを毛利見てあれ父の子なりと感じけり信仍毛利が手を取涙を落し時刻遲く後藤が討死せし故謀空しく成ぬるも豐臣家の運盡ぬる所なりといへば毛利けふ大敵に打勝れし武勇の有樣古の名將にもまさりたりとぞ云けるかゝる所に秀頼の黄母衣の使番乘來りとく城中に引こもれと下知せられしに信仍は猶赤旗おし立今一軍せんと冑の緒をしめ直し勇氣殊にいかめしく見ゆたりけり水野日向守勝成此を見ていざ軍せんとて政宗にすゝめらるゝに同心の色なし越後少將忠輝こゝ陣を進められしが此も眞田が陣よかゝらんと冑を着玉ふ政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り日暮に近く軍危からんといへばはやりをの士どもいさかゝりて討とらん弱敵をあまたすじ

といふに片倉それゝひが事なり日本國を敵にして軍する大坂の者共を彼敵といふべきや片倉が組の士三十八人の中二十九人ゝ討死したり是見られよとてつゞまで血に染たる刀のまがりたるを見せてけり越後の士大將花井主水もいかゞをべきと軍奉行玉虫對馬にゝふ玉虫敵ゝこの身の勝を心がけ居しかゞ軍に利あるまじといひてためらひけり真田が陣にゝ手々に扇をあげて招き何とて軍し玉ゝぬぞと聲々に呼ゝりけり猶かゝらざりしかば信仍しづかに兵ををさめ關東武者百萬もあれをろこゝ一人もあしと大音に罵りて引取ければ東照宮玉虫に林道春よ呉子が六國の風を說たる章を讀しめられ玉虫を逐出されけれゝ七日の軍に信仍兵を出せしが秀頼の出馬をすゝめんため子の大介を城にかへしけり大介今年十六に及ぶまで片時もかたへを離れをたゝ今討死のきゝに逃たりと人のいゝんも口惜く去年母上にわかれ奉りし後文のたよりになりながらへて相見んゝねがゝしけれども合戰の場にて必父うへと同じ枕に討死せよ苟にも名こそをしけれと誡められしといひけれゝ信仍城中へ歸れといふも秀頼公の御ためなり父子ともとてものがるべきやゝ為て冥途に逢べきをしばしの別れを惜むこそ口惜けれとく城にまゐれとて取つきたる手を引放せば大介名殘をしげに父を見てさらば冥途にてこそとて引返す信仍大介を見おくりて落る涙をおさへ昨日鑒田にて

痛手負しがよわる体の見ゆるゝよも最後に人に笑ゝれじ心安しと云ひけるとかやかく大坂の軍敗れしかば信仍討死しけるを首をゝ越前忠直の士西尾仁左衛門取たりしに誰ともしらを真田信尹馬に乘て打通り此を見て其胄ゝ見知るぞ真田左衛門佐なるべし口をひらいて見よ向齒二枚闕て有べきといひしに信尹が詞のごとしさてこそ左衛門佐とゝしりてけれ彼胄ゝ原よ物語して見せたるなり弓箭とる身ゝおもひ出の詞かねて云おくべき事にてそいひあへり大介ゝ城中に入秀頼に從ひて蘆田曲輪の矢倉にてもりて父の事を尋ねけるに討死せしと聞てそれより物もいゝをゝ毋のかたみに賜ゝりける水晶の珠數を首にかけ秀頼の自害を待居しかゞ速水甲斐守大介に向ひて組討の武勇たくましきふるまひして痛手負れしと聞ゆ和平にて君も城を出させ給ふべし真田河内守信吉の方へ人をそへて送るべしといへをもちつとも動かを寄手矢倉を取巻じ時速水戸口に立出て大介が有樣をかたり武勇の血脉おそろしき者なりと云しとなり終に大介も矢倉の中に死して父子同じく豐臣家の爲に忠たり

○佃次郎兵衛十成ゝ加藤嘉明の左の先手の士大將なりからしまの船軍に十成敵船に乘移る時敵劍にて口中へ突入たれども少しもひるまを猶飛込けるを棒にて胄の上を強く打れ海中へ落入たれども水よ長じたれば泳ぎあがるを從者熊谷彌兵衛薙刀をさし出すに取付直に敵

船に乗入て船中の者どもを撫切にしたりけり嘉明船おまた乗取れし其一つなり關ヶ原の時嘉明い伊豫の松前を出て關東に打向いれしに十成に堅固に守れと下知して松前に留守居たり毛利輝元の兵村上掃部能島内匠曾根兵庫宍戸善右衛門等松前をとらんと支度しけり能島村上い河野の一族なる故招かざるに人々從ひなん豫州を攻とらん事掌の中に在と評議し豫州の人平岡善兵衛といへる者を鄉導とし三千餘をひきゐて豫州に打向ひ使を以てとく城を明渡されよ遲くば踏潰さんと松前へ云やりけう城代加藤内記佃と相謀り先敵をたべかるべしとて子細なく城をあけ渡すべし然れども妻子をかたづくる間を待れよと返答す左も有なんと侮りて三津浦に上り民家に陣して待居たり大洲の城に藤堂高虎有て加勢をさし向られしかば松前城中の人々よろこびあへり十成獨同心せぞ今敵大軍にて押寄來るといへども謀を設け一戰して義を守るい弓箭取者の法也城を枕にして討死すべし勝利を得ば生前の面目なりたとへ勝たりとも人の救によりて運をひらきたりといれん事口惜かるべしとて禮義を正くして辭したりけり此時國中一揆起り三津浦に酒肴をおくるよしを十成聞て双方の勝負を親て見合せ居たる黒田大溝永田村の百姓小ざかしき者四五人呼寄妻子を質に取り金銀どあたへよく云ふくめ酒肴をもたせ三津浦へ遣し嘉明近年松前を領じ仕置宜しからぞ

百姓ども困めり河野一族の人々國に入給い ん事百姓の安堵なりと悦祝ひ申そなり城中にゆかりの者とて具に承いれば嘉明關東へ出陣軍兵を拂て連られしゆゑ今殘りとゞまる者ども多からぞ大かた老衰病者にて一人も軍そべき者なし佃十成も大病なり鉛藥も乏く落支度の外更になしはや逃去なんと口々に云せたれば安藝の士大將さも有べしとて彌おこたりけり彼百姓一人立歸て其有樣を告知せければさらば今夜風雨の紛れに一夜討すべしとて嘉明の貯へおかれし白布を胴肩衣に裁縫で配りあたへ十成い背に松の字を墨にて書てしるしとし合詞を定め首いとるべからぞ貝の音を聞かば勝負を止て引とれと約束を定め慶長五年五月十八日戌の刻に打立けり忍の者歸りて今夜い村上が陣所ゑ集りて酒盛の半なり巒山の濱邊に張番の足輕松前のおさへに置たりと告る十成打破りて通らんい安けれども途中に滯りて三津浦へ聞ゑなば謀いたづらに成べしとて道を替江戸山を越て子の刻計に三津浦におし寄せ所々の民家に火をかけて切て入しかば大にさわぎて物音も聞わかぞ十成薙刀を提眞先に進みけるに掃部敵寄たりとて何程の事か有べきとてかけ出るを夜討の大將佃次郎兵衛なりと名乗て掃部をつき伏せ敵あまた切はらひ貝を吹立て軍兵をまとひしづ〳〵と引取たり掃部を始め内匠兵庫も討れければ引退て久米の鄉如來寺に楯こもる翌十九日十成又おし寄

けれべ加來寺にも支へかねて道後山に引退く十成も深手數多負て日い暮ぬ松前に引とりぬ道後山の安藝の人々近郷の百姓を相從へ刈田燒ばたらきして松前の城を攻んとそろと聞伝けれべ九月廿三日加藤内記道後村へ押寄せて相戰ふ十成い久米の戰ひに手負て出ざりしかど重ねて安藝の加勢來らべ始終いかでか勝べき今急に追拂いぞい後日の事覺束なし手疵を痛みて城中に死んとり敵に向ひ快く討死せんとて城下の町人近郷の百姓二百人計あつめ具足を着せ妻子を質にとりて帋旗を指せ十成引具して道後村よかけ向へべ味方是に力を得宍戸平岡に從ひたる一揆ちりぐになりければ終に風早の浦より船に乘藝州に引退きけり關ヶ原の後嘉明松前に歸りて戰功を撰るふに夜討に首とらざりしかば十成村上を討取たるい明かなれども其功をいわず生捕の者はたつぬるに村上が陣へ先だちて切込だる人の白き肩衣の背に松の字を大きに書たるが薙刀にて村上を突伏しを間近く見たりといひければ嘉明十成が功によりて松前をとられぞ殊に安藝の物主三人を討取大洲の加勢を辭せし事勇ましひ忠といひすぐれたりとて太閤より賜ひたる物具に感狀を添て澤穴郡久万山の庄六千石を與へられけり慶長十八年嘉明温泉郡勝山に城を築き松山と名付松山の北に別に一郭をかまへ五つ矢倉をあげて十成を置れぬ元和元年大坂の軍にも十成嘉明の嫡男式部少輔明成に從ひて淀川を渡り城兵を討取けり同年十成闕東に召れ葵の御紋の時服を下されぬ寛永四年嘉明奥州會津に移りて十成に一万石をあたへられけり寛永十一年十成病おもく子共どもを集め吾若かりしより戰場に出る事度々にて疵を蒙る事十三ヶ所就中豫州久米の合戰に鉄炮頭の右にあたりて猶其鉛皮の中にあり然れども運盡ざれば死せずしてかく老年に及んで病乃爲に死せんと覺ゆるなり是を以て思ふに弓箭取身い少しもきたなびれたる志あるべからぜかたみに是を殘さんとて刺刀をとりて皮を破り鉛丸をとり出して前に置三月二日八十二歳にて端座し終れりとぞ

◎堀久太郎秀政後左衛門督といふ土佐より下部にいたるまでつかふ上に下の情をつくすを第一に專ら心がけられけりかゝれべ下に恨る者なし奉行の從者と荷を持者と輕重を爭ふを聞て其荷物を自らふりかたげ往來し我力い彼者よりまされり然れども一里計り負たれば勞れたり持事あたいじといふい尤なりと決斷せらる或時武者押にはたさし後れたりけるを尤めけるが秀政自ら旗と負て試みさてい吾乘たる馬の肝よき故ならんとて肝よわき馬に乘たれべ旗さし後れざりき世に名人太郎といひけるいかく下をつかふに心を用ひられし故にこそと人いひあへりけり小田原陣中に卒せらる年三十八ありとかや

○大久保相模守忠隣ハ忠貞の人なり關ヶ原の時台德院殿木曾路より攻のぼらせ給ひしに石田敗北の後御着陣ありしかば東照宮御對面ましまさず忠隣近習の士を以て申たき事ありと申す中々口にもいひ出されずといふを聞てさらば直に申さんとて座を立けるをさらば先申て見んとてかくと申せば色を變じて内に入せ給ひしがやゝ有て相模ハ歸りたるかと仰ありて猶待居て退んけしきなしと申せばあくまで剛直の者なりよも空しくハ歸らじとて召れけり忠隣御前に參りて先何とも言出さで涙を流しければいかにと仰有忠隣此度上田を攻て道に遲留のありき上田を攻しハ忠隣と正信がしわざにて二人の中一人ハ召出され罪を亂さぜ玉ふべきはづなるにさハなくて不和に及べせ玉ふ事ひが事にてこそあれ過し年大軍にて攻たりし時も眞田が智勇に挫れたり上田固くとも遂に攻落さべきをすてゝのぼらせしに關ヶ原にて石田今しゞし支へなばなど戰功のなかるべきに石田もろく敗れて手を空しくなし玉ひぬ君萬歳の後に日本を治め玉ふべき御嗣に人の侮り奉るべき事をなし玉ふハ怒にひかれて忘れさせ玉ふにやとく嗣君に自害をすゝめ奉るべしと申されしに汝が言無禮なりとて立たせ玉ふ所をおしとゞめ忠隣が申處理あらば聞し召入れられよ正しからぜハ首を刎られよと憚る氣色なく申せしかば聞し召入られ汝がいふ所尤なりとてやがて御對面おハしましぬ忠隣ハ相州小田原の城を賜ハりたりしが慶長十八年切支丹を改る仰せを蒙りて京都よ趣きぬりしに謀反の志あるよし訟へ申者あり本多正信忠隣が惡逆の志あるよし申けるを世に申せしか忠隣をゝ井伊直孝の領國佐和山にとゞめ置れけり板倉勝重仰せを承て忠隣が旅宿に行折節忠隣碁を圍み居たるにかたへの人殿を流罪の爲に板倉來たれるよし云けれども驚く体もなく勝重よ達仰を承り更に恨の色もなし從者大に怒り讒言により流罪にせらるゝ事口惜き事なり切死せんといひしかば京都のさわぎ大かたならぜ二條の城にて門々を守りけり忠隣武具を纒にてかちげ勝重にさゝけしかば京都のさわぎしつまりぬ夫より佐和山に行れしかば直孝よくいたハり申されしがある時申開くべき旨あり直孝承りて達し申さばやと語られしに忠隣理を正して申さんにハ聞し召明らめられん事必定なりさらば讒言を聞し召無罪の者を流されし過ちを人しらば君の非をあぐる也此忠隣が志にあらぜわれかく朽果るとも つゆちりばかりも惜からぜといハれしかば直孝感服せられけり忠隣つれ〳〵のあまりに忠臣記二卷を作られけるとぞ

○天野三郎兵衛康景ハ天野遠景が苗裔にて百貫の地を領し來りしを東照宮瀧坂におかせ玉ひ遠江榛原郡を切取に仰出されし大剛の人なり後駿河の高國寺三萬石の地を賜る駿府の

城經營の時竹をからせ積置足輕に守らせしに御領地の百姓竹を盜みしを見咎めて斬殺そ殘る者ども逃ちりて代官井戸某に訟へしかば井戸百姓を殺したゝ解死人を出せと天野にいふ天野盜を殺す事罪にあらぞ守る者罪あらべ先天野罪に行わるべしと云ければ井戸訟へけり東照宮足輕を誅せよと仰出されしに天野始の如く申せしを聞し召天野わ不道のしわざする者にあらぞ子細あらんと仰られけるに本多上野介正純天野に逢て仰をいなむわ臣たる者の道にあらぞ臣として君命を承らざる事やあると云ひけるに天野さてわ臣たらぞわ苦しうからぞといふまゝに三万石の祿を辭して慶長十二年三月廿九日高國寺を去て行方しらぞなりぬけり程經て大久保忠隣尋ねいだし年ごろ親しかりしかば小田原の入かといふ所に隱し置れけり罪あき人を殺すに忍びぞ三万石の祿をすてゝ隱れし志を人々稱しあへり

○台德院殿太田某に五百石の祿を賜わりし時太田折紙を擲かへし退出しけるを死罪と思召けるに井上主計頭正就駿府に申て後罪を定められしと申すさらべとて井上駿府に參りて東照宮にかくと申を聞し召泰平久しかるべき基なり太田わ誠に無禮あり凡賞罰中らざれば下の恨るわ常の事にて太田も無禮とわ知たらん已が身をそゝ諫る心あるべし臣下の直言して諫る者怒に逢て刑罰せられ家を亡し大軍の中にかけ入る者わ多くわ身を全うして功名を立る故に昔より諫臣を忠の第一とす然るに今太田にあたふる祿賞に中らざるやと汝を以て問る、事政務に心を盡さるゝなれべ泰平の基と謂にてこそあれ汝にものがたりせん事あり

○東照宮三河にて池の鯉を鈴木久三郎が取て烹て喰ひ信長より賜ひし酒をもわれにあたへたりとておもふさまに飲たりき吾怒て眉尖刀を提鈴木を呼しに鈴木肌をぬぎ大音をあげて魚に人を替る不道にて天下に旗揚んとわ思ひもよらぞと罵りし時予鈴木が詞に屈伏して内に入つく〳〵思ふに走りの者池より鳥を取し罪にてとめ置しを諫ん爲ならんと心付て走りの者を赦し鈴木を近付汝が志返す〳〵悦しきといひしかべ鈴木涙を流し密に申べき事を今戰國の時なれば手あらなるがよきと存て無禮の詞を申せしにかゝる仰を承りて唇さの身にあまりたりといひ去也今太田にも三千石乃祿をあたへられよとて井上をとゞめ給ひ御刀を賜わりしかば江戸に歸りてかくと申す太田にも祿を增賜わりしかば涙を流して喜びけり台德院殿井上にわ汝が詞によりて孝行を知り賞罰の道をわきまへたりと仰有て左文字の刀を賜りけり

○東照宮濱松よおわしませし比ある夜本多正信御前に有しに誰人よてかありけん姓名をしらぞ懷より書を取出し誅め奉るべしとかねてより存る事のありて書しもの也と申せば大によ

鈴木冬郎
肌ぬぎて
尓德院を
罵る圖

ろこばせ給ひ夫よめと仰有りければ披きてよみけるに一條よみ終る度毎に宮なつかせ賜ひ尤なりと仰られよみ終りければ汝が志感ぜるに詞なしこれより後も心置なく告よ返すく〳〵も神妙なりとくり返し仰ければ添きよし申て退出ぞ正信居殘りて只今諫め申せし事用ふべき事にあらぜと申す東照宮大にけしきかゝらせ給ひいやとよ已が過ゝしらぜして、過るもの也國を傾し人を治る身にゝ過を告知せ諫る者ゝ鮮くて唯諂ひて主君のいふ事道にたがひてもさゝあるまじと詞を返す人ゝなきぞかし諫をふせぎし人の國をうしなひ身を亡し後世の笑ひ草となりしためし多し只今われを諫し者日比心を盡し見及ぶ樣に付諫んと思ひて書去るし時もあらば見せんと思ひ居たりし志何にたとへんや宮なし其用ふべきと用ふべからぬとにゝよらざる也唯彼が忠心を愛する也とぞ仰けるまた或夜の御物語に凡主君を諫る者の志軍に先がけするよりも大に險まされり其故ゝ戰に臨みて一番に進み出るゝ素より身をすてゝの事なれども必しも討死せぜ又討れたりとても後の世に名を殘し死后のはまれとなるぞかし幸に功名をとぐれゝ恩賞にて家富子孫榮る也されば得有て失なき忠なり諫ゝ然らぜ主君不道にて善をにくむにすゝみ出て直言する者十に九ッゝ刑罰にあひ妻子をはろぼし果る樣に成行ぞかし失ありて得なき忠なり武功ゝ名利の爲にもなるべし諫言ゝ聊も身の爲をおもふ心あらべいかで主君の前にて直言すべき唯人に君たるものゝ賞すべきゝ諫臣なりとぞ仰ありける

○箭矧の橋水に壞れしを造れと仰られしに策てより船渡にすべしといふ人の有けるが幸にて船渡よかりなんとゞを東照宮汝等末を知て本にくらし費をいとふゝ民の爲なり往來の旅人を苦めんゝ吾志にあらぜ又要害も其もとを論ぜれば唯國民の和と不和とにあり險をたのみて敵をふせぐゝ道を知ざるなりとて橋をまたかけさせ給ひけり

○東照宮大度勇略におゝしませし事ゝ誠に申も愚なり中にも禮儀と正させ給ひしかば今川義元討死の桶狹間を御鷹狩にて過させ給ふ時必御馬より下させ玉ふこれゝ御幼時義元のよしみを思召出されての事なりけり上杉景勝に途中にて行逢せ給ふ時輿より下させ給ふ是も父謙信のよしみを思召ての御事なり

○駿府の城中の池に阿部川の水を引入よと仰有しに水筋に小き寺有けれゝ外の處に引移さんと申けるを東照宮寺を移す事をとゞめ水を入るにも及ばぜと仰られけり此ほどの寺移さんにいか計の費あるべきといへばそれゝ大なる僻事あり田の爲に水を引んにゝ左あるべし吾庭の水ゝなくさみなり夫に人を勞する事やある無益の事ゝ地を捨るゝ敵に取れたるに同

じ百姓の苦みなりと仰られぬ

○東照宮御指の中節たことなり年老させ給ひてゝ屈伸しがたくおゝす是ゝわかき御時より數度の戰ひに初の程ゝ麾にて下知せさせ給へども事急なるに及てゝかゝれ〳〵とて御拳にて鞍の前輪をたゝかせ給ふに血流れて出るかくのとき事幾度ともなき故となり

○東照宮金の七本骨の扇に日丸付たる馬印ゝ參河の設樂郡牛窪の牧野半右衛門がしるしなりしを永祿六年に乞得させられて馬驗となし給ふ夫より前の御しるしゝ厭離穢土欣求淨土の八字を書たるにて大樹寺の登譽が筆なりそのしるし明歷丁酉の火災にかゝれりといへり然れども扇の御しるしゝ其前よりの事にや天文十四年公矢矧川にて織田家と軍有し時利なくて危かゝしに本多吉右衛門忠豐とく岡崎に入せ給へ御馬驗を賜ゝり討死せべしと申せども許されぞ扇の御馬じるしを取て清田曙にて討死しける其ひまに危さを遁れ給へり御しるしは忠豐が嫡子平八郎忠高が家に相傳へ忠高も又戰死しける其子忠勝が時に至りて永祿二年東照宮乞返させ給ひたりと云り

○加藤肥後守忠廣或夜物語に吾ゝ大力ゝれかしと思ふ也重き甲二領重ねて軍に出べ恐るゝ事あらじと云れしを飯田覺兵衛つく〳〵と聞先殿物具一領にて數十度の戰に終に手負せぞ

朝鮮に攻入て鬼將軍と異國の人も惶れ死生存亡ゝ天命にて人力の及ぶべきにあらぞといへども能戰へべ生惡く戰へゞ死ると申す事もあり國中の民を撫育し諸士よくなつき從ふ時ゝ席上にて勝敗の理を論じ軍兵を下知して進退自然に整へべ三軍の着たる物具ゝ皆大將の一身に重ね着たると同じ事なりたれか鋒を爭ゝん臣ゝ力を好ませ給ふ事然るべしとも存せぞと申て退出しける時先殿にゝいかでかくまでおとり給へるとて聲をあげて泣けるとぞ此覺兵衛ゝ清正の時武功の大將なり初ゝ角といふ字なりしに太閤覺の字に書替させられしとぞ覺兵衛云けるゝ我一生主計頭にだまされたり初て軍に出て功名しける時朋輩多く鉄炮に中りて死しけり危き事よはや是までにて武士の仕へゝすまじきとおもひたるに歸るやいなや清正時をすかさぞ今日の働神妙いゝんかたなしとて刀を賜りき斯の如く毎度其場を去てゝ後悔すれども主計頭其時をうつさぞ陣羽織或ゝ感狀をあたへ人々もみな羨みてほめたてたりしゆゑ其にひかれてやむ事を得ぞ麾を取士大將といゝれしゝ主計頭にだまされて本意を失ひたるなりと忠廣沒落の後京に引籠り再仕をぞしてありける時語りけるとかや

○前田利常大坂乃軍に功有て加賀に歸り討死したる士の爲にとて報恩寺といふ一宇を建立し戰死の人の追福よせられ自ら彼寺に詣し時討死の士の親族を供に連られけり自ら香を燒

涙に沈みて深く悲れしを見る人聞く人此殿の爲に死ん事露塵計も惜うらじとて一同に哭し泣けるとぞ

○慶長十九年黒田孝隆入道如水病重く成て子の甲斐守をよび汝ハ親にまされる事有我もまた汝にまされる事二つあり語て聞せん今我死べ我士ハいふにや及ぶ汝が上大將より士又至るまで悲みなげくべし汝死して我ながらへたらべ鹹に大なるさかしまごとなれども如水おハしますとて力をおとす士有べからぞ是人のなづき從ひて吾に服する事汝に勝る其一つなり次に我ハ無双の博奕の上手なり關ケ原にて石田今しばらく支へたらば筑紫より攻登り下部のいふ勝相撲に入て日本を掌の中に握んと思ひたりき其時ハ子なる汝をもすて、一ばくちうたんとおもひしぞかし又紫の袱に包みたる草履片足に木履片足取出し軍ハ万死に入て一生にあふ習ひなり十全を思慮してハ叶ふまじたとへば草履木履をはきたるごとく二つものかけの軍をする心得せられよ汝ハ才智有て先の事を豫め料る故よ大功ハゆめ〳〵叶ふまじ偖めんづと云物ハ飯を盛るものよ上天子より下百姓に至るまで一日として食物なくてハ世にながらふ者ハなき事なり國を富し士卒を强うするの根本一大事此飯入にあり必わするべからぞかゝる故に此めんづをかたみに參らそといわれけり

○加藤嘉明關ケ原の戰ひに大功有しかば五十万石を賜ハるべき處に本多正信其事をねしとゝめたりと嘉明傳へき、て本多を恨みられけるよ正信行れしかば覺ふ處とて對面せらる正信の曰大國を賜ふべきとなりしを我然るべからざる由を申止めき是忠ある子細なり其子細ハ御身ハ武勇智謀たぐひ稀なる人にて又豐臣家の恩深し人の疑有べし功成名遂て身退くと申事あり今領國の少きに聊の恨なくおハさんに恩過子孫に到らん若大國を領し玉ハば必人の後にかゝむ人にあらぞと世疑ひおそれて禍あるべしと存る所なり去とも恨らんにハ功なしと云たりしかば嘉明詞なくて止けり

○安藤帶刀直次物がたりの時本多上野介正純ハ家亡ぶべきなりと云しに程なく本多に祿を賜ハりけり人々直次にしかぐいハれしにいかにと問直次聞て後を見られよと云やがて正純國を召放れしかば人々又直次に神智有が如しいかなる故よやと問直次さればとよ台德院殿關ケ原の軍の時木曾路にて遲留の有しを正純是みな父正信が仕わざにて死罪に行ハれなば麗君の過なき事を人存ぜべきよしを台德院殿我爲にかくまで云つると仰られし由正純聞て已が功と思へり父を死罪にといへる三千の刑不孝にまさる事やあり此家の亡ぶべき理なりまして忠を君にいたせハ誇るべき事にあらぞ正純のほろぶるいと遲かりき

とぞいへれける

○台德院殿へ殊に禮儀正しくおはしまし苟にも疾言おはしまさぬ事なき時は泥塑人のごとくになんと人申せしが極めて下民に御心を尽させ給ひ孝道深くおはしましけり又信を失ひて天下へ保ちがたしと常に仰られ御鷹狩に出給ふ時も時を定められ御膳の半にも辰の鼓をうてべ箸を捨て出給ふ近習の人奉膳終らざれべ辰の太鼓をうたぬ井伊直孝是を聞近習の人々に向ひ是君を愛そると思へるは大なるひが事にてこそあれ君正しき道を好みたまへば汝たちも正しき道にて仕へられよかやうに事を料られなべ必阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべしとく膳を奉りて鼓の前に終りなんと何の苦しきことやある是等は誠に小事なれども君を欺くともいふべし君子は禍を未然に防ぐものなりと戒められけり

○直孝ある時林道春に物語して樊噲が勇氣たくましきと聞されども弓箭取の珍しき事にもあらぬ我とても噲が下に立べからぬといへれしに道春は噲鹹に穢多の子にて筋目もまさり給へりされども爰に一つの故あり戰ひに臨みて矢石の中に先掛するのみを勇氣といふべからぬ是は匹夫の事也噲が顏を犯して高祖を諫め申せし事有足下にいかゞにぞある廣言をはき給ふともよく〳〵自ら省られよ噲に及ばぬ事の有べきといへば直孝恥る色あり

是は其比大猷院殿御病氣とて大名に相見おかりし故に斯いへれしとかや世に道春一生の格言とせり

○悍窩藤歛夫東照宮の御前にて秀吉は大膽なる人なれども大心なりとは申そべからぬ朝鮮より明へ攻入んとは大膽なれども秀信を信長のあとゝは仰がれぬ自立して日本を掌握せられしは大心にあらぬと申されけるが後に此事を四辻亞相公聖卿にかたる人あり亞相の曰われも其論尤なりと思ふ也大佛建立はかの猿どころがはなれぬありといへれき

○紀伊大納言頼宣卿は東照宮の十一男にておはしましませしが幼き時より東照宮の膝下におはして文武の御物語を聞し召尋常の質におはしまさぬ諫を納給ふ事を並々ならぬ或時腰帶といふ佩前長光の刀にて立げさを試み給ひしに快く切て其まゝ立たるをつき給ひけれぬ二ッに成て倒れけり左右一同に驚入計りなり大に悅て那波道圓に異國にもかゝる利劍もありや又かく手のきゝたる人やあると仰有しに道圓承り異國は龍泉太阿など申利劍も有之なり人を殺して樂む人は夏の桀王殷の紂王と申惡王おはせり凡人を害して面白しとおもふは禽獸のしわざにて人間にてはなく日本にて罪人を切は穢多こそいたすべしと憚る色なくいひしにつと入給ひぬやがて道圓を呼て先に申つる所こそ至極の道理なれこれより再

び自ら試る事有まいぞ諫言こそ返〳〵も淺からねと賞美ありけり又ある時大高源左衛門といふ士に司る事に付てわれ不幸にして良き士持ざるゆゑ何事もおこたりに成ぬとしかりて人のなさ也と有しを道圓聞て己が目のくらくて人のよしあしを見明めざるをべ咎めぞして人のなさときい何事ぞや外様古參にも新參にもよき人を撰み出さんよい智者も勇者もいうほども有べきよ人のなさとい目の明ぬ故也と直言しけるをつく〳〵と聞給ひ道理至極せりとて再三感ぜられ深く先の詞を悔み給ひけるとぞ道圓常に其子よかたりて當世にい臣士君の爲に死する事有太平の世諫で死する事を忘るべからぞと戒めけり

○慶安四年辛卯四月大猷院殿過させ給ひて其七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ紀伊大納言殿の仰と稱し判形に似せ謀書を所々に遣し丸橋忠彌芝原又左衛門以下數百人徒黨し御鉄炮の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是に與し埋火にて遠くより火をさし徒黨の者ども船にて海上に出る時藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに心替したる者三人有て訴へ出あらいれしかべ丸橋をはじめ生捕れ正雪い駿河宮の町にて自害しけり右の謀書を數通浪人どもの許に有ける故大臣集りて一大事と案じ煩ひとかく頼宣卿を殿中へ召て此書を出ぞ外有べからぞ其時様子あしかりなんよい直に捕へ申せとてくつきやうの兵を

かくし置て出仕を待居たりしに尾張中納言光友卿水戸中納言頼房卿も出仕有此事を告申けるに尾張中納言何條かゝる企有べきや是謀書にてあらんとなりしに水戸中納言もいかにも思ひなんとぞ宣ひけるされども各々手に汗を握る處に頼宣卿出仕有りて座に付き玉ひしかべ井伊直孝酒井忠勝松平信綱此度浪人どものたくみの次第を申述たる所に阿部忠秋かの狀を披露しけり頼宣卿殘らぞ見玉ひて氣色うちとけて返す〳〵も目出度こそもはや何のおそるゝ事もあらん其子細い彼徒黨の面々外様大名の判を似せ謀書を作りたらんにい三代の御恩を忘れもしや氣ちがひて謀反を企るとの疑も有るべきに我等が判を似せたる故事故あく治りたるあり幼おき公方の御身にて若御疑ひもあらんにい我等只今國さし上げいかにも仰せに從ひ奉るべし天下安全にてこそあれと悅面にあらいれて見ゑしかべ兩公をはじめ一同に感じ嘆ぬ人もなかりけれべ頼宣卿其浪人どもの中壯年の者四五人助け置れよ重ねて詮義有べき爲なりとの給ひけるとぞ

○頼宣卿紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩ありて湊に船を付陸路を經給ひしに折節春たる麥を莚にならべ僅に路明たりしかば皆農民の年中の粮なるぞ供の者ふむべからぞと再三制して躙り給ひければ百姓ども悅びあへりしを供なりし横目の長臣の前に參りてかゝ

る次第なりと申す何れも感じあひけるに水野淡路守雪長一人今日殿の御ふるまひこそ心得ねかゝる事故下々の奴原殿の内冑を見て馬鹿にするぞとよ殿の通らせ給へんにハ麥を腹へ引のけ水を打てこそ有べきに何ぞや麥をはして通路をさゝへる事奇怪なり國の主の仁いさハ無きものなりといひしを頼宣卿聞給ひければ君も君たり臣も臣たりと人々申けり

○頼宣卿馬を乘給ひ駈の中にて頭巾の風に落けるを中に取て又鞍に乘直り給ひしを吉見喜右衛門といふ者松野惣太郎とハふ者に語りけり折節頼宣卿馬場におハしける時なるに惣太郎聞て殿にハいまだ馬上ハ練給ハぬなりといひければ頼宣卿子細ハいかにと尋給ふ惣太郎申すに東照宮ハ梅道一番の馬上の御名人と申奉りたると承りぬ小田原陣の時山道を武者押して過させ給ふ丹羽長重長谷川秀一堀秀政峯筈をおしけるが東照宮の御旗を見て皆々おし前を覇る爰に一つの谷川の細橋有此橋へ行かゝる人々橋の下を皆歩みわたりにす東照宮馬上にて橋際へ着せ給ひしかバ三人の大將聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さるゝ見よと云ひあへりけるに馬より下り給ひ御馬ハ遙の下を口つゞ四五人にて牽渡しけり人々是ハいかにと云けるをかの三人の大將大に感じ馬上の達人とハ是とこそいふべけれ馬上の達者ハ危き事ハせぬものなり殊に大事の軍を前に置ての事なればかく有べき事よと感じたりと承り傳へりと申けれハ頼宣卿つくゞと聞て大によろこび其詞を書て硯箱に入れられけり

○京極刑部少輔高和播州龍野を領せり國用甚乏しかりけれハ公儀の事ハ堀田若狭守に計り藤堂大學頭高次高和の長臣関七郎兵衛定次相加りて評議し新参の士に年を限りて永く暇を出すべしとの事なり佐々九郎兵衛長光年老ぬれども思慮ある者とて呼れければ江戸へ行き藤堂堀田に相會す評議の始終書記して佐々に見せるに是ハ存寄さる事なり是非新参の面々ゟ暇を出して賑ざるを足んとならバ禄多き者然るべしかく申を佐々一人が禄數十人より多し流浪すとも さのみ艱難にも及ばじ小禄の人々ハ道路に乞食せん是不仁の至にて行ふべき事にあらぎつくゞ論せられよと誡む佐々が思慮を問ハるゝに高次五百貫目を取次て貸れんにハ五百貫目ハ臣歸路に京ゟ借求んさればとも殿の能舞妓應狩屋敷の設衣服器物萬事に費をなし國の長臣其職に有るも乃身がまへしてあらば何の益かあらん此誡言ハ外成といひ大禄なれバ高次の任なるべしといふにより一座感じて佐々が言を用ひ暇を出さるゝ者一人もなしさて長光定次に向ひて此事を一旦評議ゟ及ぶとも國の長臣として猥に順從して一言も爭ハず不忠あり世の匿の長臣となる者其身の饒なるを省ず倚貪る心より其主君に諛ふ古より軍に臨て死するハ多く誡て席上に死

する者い慨し成難きをなすをすぐれたりとす何ぞ諫めて死せざるべき大かた財用の乏しきに及びてよその金銀を借求めて忽困窮ょ至りてい士の祿をはぎいとり約束の詞を違へ非義不道の事を申し行ふにも成ねるぞかし常に儉ならで足ざるに及て俄に患るとも其本正しからぞい武備を全うせんとおもへどもいかで事よく成べき君臣とも國郡を盗み祿を竊むの凶賊なるに其恥べきを恥とせぞ是非なき事ならぞや汝其職に居てかゝる心なきいかにといへべ定次一言の苔もなかりけり

○加賀中納言利常の士不破彦三四千石の祿を受て武名を知られたり其子も同じく彦三といふ性質愚鈍に見ゑて常に怠がちなる事多し是を諫る人有て時節といふ事有りといふ悦入りたりといひながら聽用るしるしも見ねざれば又いさめたり其時不破わざ笑ひ才覺ある御身五百石我愚なれども四千石さのみな誹られたるぞといへべ色を變じて人の勝る劣る祿の多少によるべきや何とてさほど理の不通なるぞといふ不破それい我も知りぬ今の詞い戯なり亡父常ょ我を誡めて小ざかしき利根だてなる事ゆめ〳〵すべからぞ人の心に入らんとてかりそめにも諛ふ事有べからぞ唯守るべきい義の一筋なり汝武勇の身なり士の義を忘れざれと申おきたり去に違いんかと日夜是を勸るの外他事なし衣食の美を好まぞ從者と類難

を同くせり日本第一の大家なる加州の士中我と祿同じき者多しくらべ見られよ人馬ゆすくやかなる武具の擬ひ整ひたる我に勝る者有とも覺えぞ又利にたよりたる事やなしたゝ諂ひたる事や僞を申たる事や平生日々身に省みて弓箭の家に生れし職をゆるかせにせぞ御身い亡父ょ親しき人なりし故かく諫めたまいる事も忝くよろこび存るなりさぞも正しき道に敎へ給いるべきょ只時を見て世に從へとや實の本意にい非るべしさらば言に從ぞして本意に從んい如何あらんと答ふれば諫し人大に心服したりけり

○井伊直孝大坂冬の軍に物見二騎をやるに雨に濡て歸りければ則着られし小袖二ッを脱てあたへられけり扨安藤帶刀の許より小袖をもらひて嶋の小袖革袴にて兩御所の御前に出られけるとぞ直孝の領地近江の彦根い湖上より船を泛べて都に行に甚近し太平に及ぞやゝ奢靡の風俗になりて彦根の士も都近けれべ衣服美麗になりけるを直孝戒ぞして儉約にすべき道をはかり江戸より歸る時木綿の衣服を供する士の數密に用意して彦根に着く時俄にくばりて着せられけり彦根の侍衣服をかざりて迎へけるに供の士皆木綿の衣服なり彦根の人々身を省て美服を裂たくありしとぞ一事の法令をも出さぞ彦根のおごりやみてけり

○永井信濃守尙政に執政の職を仰せ出されし時井伊直孝に對面し不肖の身かゝる任を受け

甚恐懼に及べり教訓を得て其職に居ばやと申されけれゞ直孝尤の事あり我をしへ申べし身を潔くし明朝來られよとゝ〻ければ辱きよしいひて沐浴し禮服して其明の朝行かれしかゞ直孝出あひて世の諺にゆだん大敵と申事定めて知られたるべし万事の危きに及ぶ事皆是ゆだんより破るゝ事なり此事かたく忘られなとぬいれけり

○青蓮院の宮にや幼き宮に中院内府通茂公後見たりしに常に碁双六を制せられけりある時公參られしに將棋の盤の有りしを見て家司坊官を招き兼て申せしにかゝる物を何とて置たるぞはしたなき業ゝ素よりあしけれどもたとひ有りても年の長じて心づきの有てやむ事もあるなり是等の類ゝさしも惡事にあらざる故其事に慣空しく月日を過し學問の志怠るものなれば第一のあしき物にこそあれとて退出せられけり又ある時其宮に參る人尺八の名管を持來れり重器なりとて人々玩びける時公參りて是ゝ誰が業ぞかやうの物をとて柱に打あてゝ碎れけりかの主の甚重器と思へるにかく計になしていかにせんといひけるに其主來り事のよしを聞て誰某が持たると内府の聞し召れん事恐しくそれとしられ申さぬゝ大なる幸なりと云ひけるとぞ

○細川忠興に胄の物ぞきをいかにせばかといふ方の有しに詳に書しるして使にあたへられけり使立物の下地桐の木とかき給へるゝ折やすきものにていかゞあらんといへば忠興色を變じ汝ゝ弓箭取の使とも覺へぬなり軍に臨む者誰か生て歸らんと思ふべき二ッなき命だにしかり何條立物の折るを厭ふべきかろきこそよけれ立物の折るべかりに働きたらゞ何の見ぐるしき事あらんひと面目にてこそあれといいれけり

○細川忠興豐前に在し時同州竜王の城に飯河豐前宗祐祿三千石岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石宗祐の子寵せられて長岡の姓を興へられしに父子とも罪有て慶長十一年七月廿一日二人とも誅せらる宗祐ゝ河北石見逸見治左衛門を討手とし宗信ゝ增田藏人を討手とせらる宗祐散々に戰ひて死傷多し宗信が妻ゝ米田助右衛門是政が女なり宗信と睦じからぞ對面せざる事三年ゝ及べり忠興是政が後室の尼雲仙院といへるをよびて豐前肥後非有て誅そといへども汝が女と孫の女に罪なし密に告知せて命を助けよとなり後室の尼聞て肥後が妻常に中よからぞ然れども夫をそてゝかゝる時に遁んとゝ得こそ存ぜまじけれど仰の添さをば告申させんとて文して告やりければ誠に仰ゝ添けれども今ゝのきゝに夫をすてゝ遁れん事人道にあらず女子ゝ東西をわきまへざる者なれど發育して給ゝれとて使につけて尼のもとへ送りけり宗信是を聞て大に悔み我過を謝し終に共に自害したりけり

○黒田長政の嫡子満徳丸とて四の歳袴着の祝ひ有毋里但馬ハひき目親にて常にぢいとなつかれしが其時但馬満徳丸の髪をかきなで、とく成長して功名し父上よりよくしたまへと申けれバ長政何といふ事ぞや我武畧をさみするか若き時ハ汝又備後栗山とも相謀りて朝鮮にわたり又關ヶ原の合戰も皆汝等が扶によらぢ大敵に勝たり其後世太平なれば立べき武功もなし満徳いかに思ふとも我を越る事存もよらぢとて膝立直し但馬をにらまれしかば人々汗を流すところに但馬かたへに向ひて故おき怒かな人ゝ子に功名し給へと云ハひが事かとて物もとも せざる体にて長政の方を見向もせぢ長政いや父よりまされといかにと怒らせしかバ但馬打わらひ色を靜めて聞給へ武功ハ幾度事にあひても仕すましたりと思ふ事ハなく度ごとに不足なる者なり他人ハたゞひなしと褒たつれども慢して過ぎよき軍兵を引具し地の利よく幸に勝給へるを自讃ハ以の外のひがごとなり今まで勝軍になれて毎度斯の如くならんとならバ必敗北あるべし味方崩れたる時一足も引ぢ討死ハ殿の得もの、なり其ハ大將の道にあらぢ味方を討せぢ軍に勝を良將と申す殿の武畧進む一途ハ得ものにておハせども進退闇に中る一途ハかげておハします此是非の論ハ備後老功の者にてあれバ時々とハせ給へ満徳どの只一人かけ出て討死する事ハ楽武者の業なり死ぬやうに軍に勝を大將の道にハする事なり此詞よく覺えてとゝより能し給へと髪をなで、長政の怒を物とも思ハぬけしきなり備後守次の間に酒宴して有じが聞つけて銚子かハらけ取持て走り出長政の前に跪き憚も顧ぢす、め奉りとて盃を差置若き時如水公の小性たりしかバ御酌ハいたしならひし小笠原の贈義存ぢるとて酒をそ、めけれバ長政うちとけ盃をかたむけられしかバそれを但馬に賜るべしとて氣ちがひよそれ〳〵罷出よといひけれバ但馬す、みより其盃を戴きて三度引うけ飲て後殿ハよしなきに怒り給ひ今日の祝ひに興さめたり少し酔給へと云しかバ長政も又盃に十分引受られし時但馬いざ肴よとて田村をうたひ出し舞すましたり鬼の如なる男の稽古せしか拍子も耳目を驚かせり皆一同に兵のまじハりとぢたひて酒宴盛におりければ備後守高聲に若き人々能聞れよ心掛の深さも殿又思慮なきも殿なり大たハけハ但馬又たのもしきハ但馬なり黒田の家の武勇自出度時ぞよとみな〳〵酒を酌かハし事有ん時鎗を合せなすべき事をなしおく時ハ何事もゆるし給ふぞ人々うたへや舞やとて酒宴やみてけり又長政或年の春歳初の祝ひ栗山備後守がもとゑ行れしに酒宴あり四ツ比に及んで興政われ居たらば若き者ども酒おもふはど得飲じおとにて打とけて酒もりせよとて歸られしに但馬今少し居て若きもの共に懇に詞をかけ人々悦ぶやうにこそ有たけれとかく我まゝ

の直らぬ殿なり頂に大なる灸をしてこそよかりなめと大音にて云しを長政聞ぬ体にて歸られけり

○慶長年中禁裡よ散樂の有し時貴賤群參しけり吉岡建法といふ染物屋劍術の妙手にて有しが無禮の事有しを雜色咎めければ建法外に出羽織の下に脇差をかくしもとの所に入先の雜色をたゞ一打に切て夫より縱横にかけ廻るもとよりあくまで手きゝ多數おしらず板倉伊賀守勝重日の御門に有しが眉尖刀の鞘をはづし向ゐれしを太田忠兵衛何條手をろさせ給ふ事やあるとてかけ行を勝重此長刀にてとてあたへられしかゞ太田吉岡に向ひ惡逆無禮のをのこ首をのべよと走りかゝれゞ吉岡ゐ紫宸殿の階に息つぎ居しが我に太刀打せん者汝ならでゐといひて階を下りて立向ふ太田己に眉尖刀ゐ無益なりといふまゝに刀をぬく吉岡走りかゝりさまに倒れけり太田大音あげ倒れたるを切ゐ士の恥なり立て勝負せよといふ吉岡立あがる所を飛かゝり一太刀に切殺しける勝重悦ひて太田に祿を增し盃をあたへて後吉岡が倒れたるを切ざるゐ勇餘り有といへど氣に驕の失あるに似たり吉岡商買賤しき身なれども劍術ゐいかなる人も及びかたし倒れしゐ天の興へなり然るを切ざるゐ虛を打の理にくらしとゐいふべきにやと云れしに太田仰せ誠よ賤し然れどもこゝに一ッ存る故あり多く敵の倒れたるを起しも立ぬ打んとそる故に身を忘れ脚を切れて倒れたる者の勝になるとあり倒れたるに虛實の二つ有吉岡が倒れしゐ虛也吉岡たとひ實に倒れたりともたやすく斬る、男にあらぬ倒れし時ゐ身を防く事虛に似たれとも近付ならゞ斬んと存るゐ實あり虛にも實にも倒れしもの、立あがらぬといふ事ゐなし其立あがる時ゐ躬を防ぎ敵をきりはらゐんと存る心虛になるものなりそこを打てたやすく斬とめたりき誠よかゝる小き業匹夫の事にて殿のしろしめす理外の理なりされども陣をわかち軍する道にも相かなふ事もやと憚を省ぬして申しけるといへゞ勝重大に感せらる

○柳生但馬守宗矩ゐ大和國にて世々柳生の庄の地頭なり關ヶ原の戰の後德川家よ仕へ奉りて父より劍術を受傳へ無双の妙手と聞えてけり大獄院殿御年わかゝりしより此技を好ま

せ給ひ宗矩御師範に參りて御心を盡させ給ひ頗其妙を得させ玉ひけり只此藝によりて其人を信じ敬せさせ給ふと人々おもひけるよ實に其技によつて治平の政事を喩し申けるにや常に御側の人々に天下の治めゐ但馬守に學びてこそ其入体を得たれと仰られしとぞ聞ゑける宗矩年老病重かりし日も辱くも家に入せ給ひき正保三年三月終に空しくなりけるよ其ころ追めしなさ贈位の事を執し仰られ從四位下にあげさせ給ふとかや宗矩死せし後事にふ

れて生て世にあらべ尋問べきものをと深くしたゝせ仰られしゝ誠に有がたき事なりし其中一事相傳ふるゝ島原凶徒の亂江戸に聞ゑし頃ゝ十一月十日也宗矩有馬玄蕃頭豐氏の家よ散樂有て行向ひしに家隷尋來て但馬守を呼出し肥前國島原よ土民相集りて楯籠りぬ是切支丹宗門の者にて松倉にそむきての事なりと早馬來り板倉内膳正追討の御使を承りはや御發向とぞ申ける宗矩さらぬ体にてもとの所に歸り坐し用人に向ひ急て宿所に歸べき事出來ぬよき御馬をかし給へといへゞ心得たりとて馬に鞍置て率たつ宗矩打乘て品川にはせ付板倉ゝ如何にと問べ遙に過させたりと答ふ川崎に馳着て問べ今ゝ二三里も隔りたりとやすす日已に暮に及へば引返して御城にあがり近待の人々を以てやべき旨有て伺候しぬと申せべやがて御前に召て何事にやと仰有宗矩畏り只今承れば九州よ切支丹宗門の逆徒發起し内膳正重昌追討の御使を承りはせ向ふよし仰と稱しおしとどむべきと存追かけしとも追つかせ此よし申さん爲なりとやそ何故よおしとゞめんとゝ思ふぞと御尋ありけるよ君ゝひたそらの土民べら立籠ると思召て追討の御使かろくこそ思召さるべし宗門よ付て起る軍ゝ大事のものにて重昌一定討死仕申べしいかにもはかつて止めばやと存せしとやすす以の外御氣色損じ御座を立せ給ふ宗矩猶夜ふくるまでも退出せゞ此よし聞召又御前に召て重昌討死すべき子細いかゞと御尋あり宗矩さればこそ兵れ道ゝ勇をさきとす勇士ゝ死を悲まゞ三軍みな恐れざる事ゝ今の名將の專一とする事なるに凡愚の輩宗門を深く信じ其法をかたく守りて死を以て身の悦とす百千の人死を恐ざるの勇士となりしゝ宗門の故なり織田家の武威を以て一向門徒に勝事能ゝゞ天子の命を假て和平になりぬ三河國の一揆も近き御家の事なり大坂の時重昌年わかゝりしも數十万人に撰ばれ唯一人大事の御使承りたる者なれば是等の土民打亡すべきに何事か有べき誰かゝ其下知を背くべきと思召たらんゝ事の違ひにて重昌位高く祿も有て年頃重き職を司つて常に人に敬ゝる今の重昌が身にて城を攻なんに西國の諸侯いかゞゝ下知に從ふべきもふにも似ゞ攻あぐみなん又御一門の人々かさあらゞゝ宿老の内重て追討の御使下さるべし然らべ重昌何の面目ありて生て再び關東に歸るべきあたら人を土人等に打せなん事誠に口惜くこそ是ゝ御家の恥辱とも申べきをや御ゆるしを蒙なべ追付參りてとかく押へとゞめて具して歸るべき物をと憚る所なく申けれべ御後悔の色あらゝれさせ給ひしがそれも叶がたくや思し召けん夜も更たりとて入せ給ひしかゞ宗矩も退出しひそかに人にかくと語りけるとかや誠に宗矩が計し事掌をさすがごとくなりしかべ尤深計遠慮ありとぞ申べき

○島原にて寛永十四年切支丹一揆の時討手に石川主殿頭忠綱板倉内膳正重昌なるべしと云けるを石川聞て我年老たり板倉其器に嘗れりといいれしが重昌仰を奉り肥前に趣き城落ざりしかば又討手の大將を下さるべしといふを石川聞て我始い其撰にあいん事をさのみ悦ばざりき今思ふに泰平の世に徒に死んも志に非ざあいれ仰を奉りて西國に趣かばやとぞいいれける重昌鉦紫に向ふ時京都にて所司代板倉周防守重宗に對面ありて今度の仰を承る事辱き由を語られけり重昌既に京都を立て後重宗重昌がおもふ所を察するに必討死をべし再會是までなりとはいれけり松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞て重昌城を攻て討死せられたり人重宗に其いいれをとふ重宗城にこもる者い百姓の身なる故に内膳正忍攻落すべしと思へる色あらはれたりたとひ此城を攻落そとも一揆の奴原さのみ功名ともいふべからぎ只今四方無事の時一揆たのみなき城に籠りて降参するとも悪うち殺されん事を知て其心一和すべしたやすく落べからぎ日數を經ば又他の大將を指向られんに内膳何ぞ生て歸るべき吾是を以て討死せん事を知ぬといいれけり

○細川忠利の士川北九大夫といふ者あり川尻の代官を勤めよとなりしに出陣の時供に連られなば代官の職ンとひべしといひければ尤とて出陣の時供そべきと定めらる天草い動もす

れば一揆をなす所と西國の人のいひたる事あれば心にかけて川尻い海邊船の着く處にて細川家の米藏あり天草へ海上七里と聞ゆ川北兼て地鉄炮の數をしらべ置けり地鉄炮といあ獵師の事也天草の一揆起ると聞て川尻の海岸に一間に一本づゝ竹を立させ一本ごとに火縄をゆひ付五本に一人の地鉄炮を配りけり後に天草にて生ぞられし者のいひけるい其夜川尻の米を取んに船ををし出して見しに川尻にいくらともなく鉄炮を備へて見えたる故さていい熊本より軍兵のいや川尻に來れりとて船をもどしたるとなり川北なかりせば川尻の米を取れ天草の城たやすく破れまじかりしに川北が謀にて天草の粮いやく盡てけり

○天草の一揆を圍み攻らるゝに城中粮米既に乏しくなれば夜討して米をとらんと本田但馬が謀にて先諜早口の塀の外の水を汲せける時鉄砲をならべて寄手に見せたりかくする事三度に及て後にい漸々に遲く夜に入て汲せたり是い夜討に出る時の鉄砲の火を見咎めさせじとの事也其後毎夜塀裏にて切支丹のとおへごと天帝といふ事を數千人一同にをめく是も夜討に出る時の物音をまぎらいさんとの謀なりかくて寛永十五年二月廿一日の夜五百人をもて黒田忠之の陣所におしよせ二陣の兵二千人を二手に分ち縄だすきして額にいくるす鉢を卷にして相餅い丸か丸と定め首などとりそ食物をとり來るを第一の功名にせんと下知し

諫早口より出て出郭のかたへある有江口へ退入べしと定め陣屋を燒んゝ爲に檜の木を削りかけにして腰にさゝせ丑の刻ばかり月もおぼろにくらかりしを便に黒田の陣所に押寄同時に鬨の聲をあぐれゞ城中にも鬨の聲をあゝす士大將黒田監物しよりぎゝにありて父子とも面もふらぜ支へ戰ひしが流れ矢に中りて討死しけれゞ從兵四十三人枕を並べて討れけり一揆大に勇み進みしかども黒田美作入道睡鷗物しにて柵壕さりの守りかたくためらふ中に黒田市正高正鎗を提出あひ二三人突伏せ小性に首とらせ市正こゝにあり一足も引なきたなさふるまひせゞ軍神も照覽あれ斬て捨るぞと呼ゝる聲を一揆聞て爰ゝ破りがたしとて寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行三宅藤右衛門支へ戰ひ痛手負たり一揆又鍋島勝重の陣所の井櫻に火をかけたりしに松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介尼子八郎兵衛紀州の使者山中作右衛門と打連て來りしが山中ゝ銀の間にて十文字の鎗を持さん〳〵に相戰ふ鍋島の軍兵馳集り入たて玄と防ぎけるに竹把に火も付て白日の如く一揆かなゝで引かへす時四郎矢倉より有て勝鬨をゝくらせそれより城中靜まりけり其後水野日向守勝成岸原より着陣し黒田睡鷗に夜討の有樣かたらせ聞てむかしより四方を固く取まかれ竹把を付柵の木二重三重にゆひたる寄手の陣に討て出たる事を聞ぜ古今無双の武略をしたる一揆也されども一揆を一等超て

はたらかんゝわが士卒なりと云れたり

○黒田忠之天草丸を攻る時本田但馬きびしく防ぎ支へて先陣攻入得ざりしかば忠之直はだにて進まれけるを黒田睡鷗物具特むよたらぬとゝ申せども大軍を下知し給ふ身の甲を着ざれべうろたへたりと人の嘲りあるべしといひけれゞ忠之物具とつて肩にかけ胄をば着ぜ手ぬぐひにて鉢卷し走り出わが士ども年比吾家の恩よみちし奴原けふいかにして進ざるやわれ此處を一足も引まじきとて鎗の鐏を地よさしこみ折しきてすゝめ者共と下知せらるる雨の加く打出す鉄砲に打すくめられへり睡鷗ゝ是を余所に見てひかへ居しかゞ忠之何とて一方を下知せざるや年老て老耄したるかと大音あげ齒がみして罵らきしかども少も騒がずいまだゝやしとしづかにいへゞ忠之いよ〳〵怒り罵ふれしを弟市正彼入道ゝ物しなりまたせられよといふ所に睡鷗つと立上り麈を取てかゝれやといふ詞の下より軍兵一同にどつと進みて天草丸に乘入攻取たり後に忠之睡鷗を近付軍兵我下知を用ひず玄て汝が一言にて忽城を攻破りたるゝいかなる故ぞと問れしにすべて城攻に四方より押寄せ先陣ひしと攻つむる時を見ゝかりて無二無三よ進んで手負死人を顧ぜ乘入ゞ攻破る事を得申す四方の味方いまだ押寄ぜ一方より攻破らんといそぎけり城中も外の防ぎをすて、先きびし

く攻るかたを支へるもの故外の持口よりも防ぎ甚つよし其ひまに一方より攻入時い容易く撃破りぬ早過たる方い却て手後する事常の理あり臣こゝのわきまへをしりてしづまらせたりとゆせども殿いそぐせられし故昧方に手負討死多かりきと申けれゞ忠之高政ともに大に感せられけり

○島原を攻落す時水野美作守勝重い江戸にて暇りたる白川月毛といふたくましき馬に乗戸田氏鐵の陣所よりわが陣所に乗切て歸られしに勝重の軍兵ども金の束のしの馬じるしを見るより我先にといさみけるを勝重馬上にて冑を取て着武者奉行河村瀬八士大将上田彦蕃に向ひわゞ下知なき以前にかゝるならば軍神にかけて斬棄よと大音あげて呼いり麾を拔出し軍兵をすゝめ塀を破りをめきさけんで攻入けるに自分馬より鎗を杖にして本丸を目にかけて進まるゝ嫡子伊織十四歳眞先にかけ出るを祖父の勝成後陣より見て本丸をうち破れと下知せらる本丸にたてこもるもの共數千人けふを限と思ひ定め防ぎ戦ひけれゞ討るゝ者多し鍋島の軍兵ひるみて見ゐし處を水野父子横さまに面もふらぜ切かゝりて三の丸より本丸へ逃入一揆を討取る事數をしらぜ本丸の石壁より打出す鉄炮の玉霰の飛ちるが如し石壁い五間七間斗も高く登り兼たる處に水野父子大音あげて今日本丸を攻とらぜい生て離よか面

を向べき死や〳〵と聲々に呼いりうてども射れどもひるまぜわれ先にと攻かゝる旗奉行神谷李之丸旗十本の内一本持せ來りて自竿にて手をかけ本丸に入んとす繞奉行進藤七兵衛小野田正太夫金の束のしの馬印をふりかたげ來りて松の丸ま押立しかゞ神谷も旗を入水野父子の兵恐なく石壁を登り本丸に攻入たるを勝成二の丸より見やりてわれ今生の思ひ出なり美作い大坂にて武功あり伊織いけふを始めの軍なるに本丸を攻取し事家の面目ありとよろこばれたり有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純い寺澤忠高の後陣なりしが唯一人從者に鎗をもたせ寺澤の先陣をかけぬけて天草丸の方へはせ入本丸に進んで五間斗の石壁を登り今日本丸の一番乗有馬藏人なり心ある士いよく見候へと呼る處に勝重の士鈴木半之丞取たる首を石壁の上に置て息を繼居けるが此聲を聞て鎗を横たへ藏人に向ひ只今こゝに來り一番とい何事ぞや本丸は水野美作守攻入旗馬印入置ぬ二番とならゞ是へ上られよといふ藏人聞入られぜい唯一鎗にとおもへるけしきなる上に水野の旗本丸に建しを見てさらば美作守につゞきてい藏人なりといれしかば其時鈴木半之丞美作守父子の外大將たちいまだ本丸にい見ゐぜさきれあき二番なりとて手を取て石壁ま引わぐるに永純つめの丸くひ違ひの處に進み行美作守いづくにやと問ふ神谷美作守い腰郭の上に居て爰に旗を入たりと答ふ永

純聞てさてハ美作守ハ我より後にてこそあれといれたり永純本丸に押入たりと勝重聞て使をたて只今攻入られしよしくるわ有所にありもし夜に入て一揆討て出る事もあるべし爰に一所に有りて下知せられしとなり藏人聞もあへず作州ハわれより後に攻入れしよ藏人ハ一寸も敵近き所を好むほどに後へハ引まじ一揆打て出るとも藏人爰にあらバ危き事あるまじと答へられけり勝重よし〳〵詰の丸より切て出バ敗北すべしとて士三十人計鎗を横たへ鉄砲を前に並べたり藏人ハ鉄の楯を取寄前に押立て夜の明るまで待かけられしかども一揆討て出ず信綱下知して勝重も鍋島の陣に入かハられしかども永純ハしりぞかず使度々に及て引かへされけり落城の後三月朔日永純勝重の陣所に行丸本の一番ハ藏人なりといふ勝重年若くて左の給ふ本丸の奴原命を限に防ぎしを美作守父子おし寄討破りて旗を一番に入し事誰かあらそひ申べきと答ふ鈴木も進み出たれば永純また鈴木が申せし言もいかで忘るべき作州父子ハ一番とおもひて藏人二番と申せしも分明なりざれども旗入置れし所に行て見しに夫よりハるかの跡にひかへてこそおハしたれ鈴木も旗を證に玄て利口を申たれとかく に一番ハ藏人なりと云れけれハ勝重たゝへ陣所ゑ在たれバとて旗を一番に入しハ是軍の法に於て誰かハ一二を論ぜべき父子が兵ども身を棄て力攻に乗取し本丸を他の一番に定めん

事思ひも寄ず能思慮し給へと答へられしゑ永純旗の前後ハ論せず將たるもの、先がけハ藏人が外誰かある作州ハ跡より使を給ハりなば一番ハ藏人なりと怒られしかバ勝重只今のあらそひ無益の事なり軍に慣たる物しゑ問て一二を定められよといれしかば永純打とけて小性を呼び茶を飲て出られしが鈴木に向ひいかにも詞和ふかに云て歸られしかバ藏人もなみ〳〵ならぬ人ありと譽あへり

○島原の城攻に細川家の士大將松野龜右衛門井櫻より見るに本丸と二の郭の間に坂有て人集る中に大紋の羽織着たる者あり松野指ざして鉄砲にて打たる五町ばかりにてたゞ中にあたりてけりそれより空箭なく打しかば彼坂を夫より後たま〳〵通る者身をかゝめ走り通りけるとぞ松野ハ鉄砲の妙手留刑部一火に學びて妙を得たり

熊本にて一夜の筒をみゞさ居しに庭の南天蜀の實をひよ鳥の來て喰けるをかなものしはめて藥をこみ目的を見ず箸にて火をさして打に中らざる事なし島原の前の事なりしにや細川家の長臣南條大膳悔をふくむ故有て細川家を傾ん事を謀りけるに北比深く密する事ありて泄なゞ細川家の禍なる事を知たりければ先切支丹の事訴へけり江戸より南條をめす細川家驚きたれどもせん方なし松野我にまかせられよとて四人なれバ厚き板にて

詰牢をつくり醫者一人よ密謀を云ふくめ熊本より出るに天氣を待とて處々に舟をとゞめ日を經る内ゝ人參の入たる藥とあたへ朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり南條ゝ氣の鬱したる上人參數百斤飲たうしかゞ心狂亂したりけり松野江戸に打具し至りて商條ゝ數年狂氣の者にて候とて出しけり切支丹訟の事を問るゝに狂言のみなりとく熊本に歸すべしとて松野に返されぬ此謀たゞ醫一人のみ知たりと云へり

○福島左衛門大夫正則ゝ關ヶ原の軍功に依て尾張の清洲より安藝備後を賜りけるが物荒く政惡きのみならず多く無罪人を殺し且東照宮に對し奉り無禮多かりけれゞ元和五年六月に福島領國を削らるゝ旨廣島へ聞あけれゞ福島丹波諸士を皆呼集め預置れたる城なれゞ公方の仰なりとも渡し難し又備後守殿爲なれゞ渡すべきかと評論す上月文右衛門進出て人ゝいかにもあれ我ゝ本丸を預りぬる上ゝ命あらん限ゝ人に渡すべからぎと申切たり丹波心得ざる氣色なり村上彦右衛門聞て福島上月兩人の思ふ所に同心の面々別々に判形せられよと二通書て指出す酒井主膳とて丹波が從子なるが座を立鎌田主殿を呼いかにおもふぞ丹波ゝ伯父なれども上月がいふ所尤ありといへゞ主殿も上月よ同心して判形をしたりけれゞ皆是に同心しけり其時上月人々皆かくの如くなれゞ丹波が妻子を本丸に入らるべきやといへゞ丹波卽妻子を本丸へ入それよりわれ先にと妻子をこめけり城を受取べき爲に諸將うち向ゝれしかゞ丹波吉村又右衛門水野治郎右衛門二人を使として左衛門大夫領國めし放たれしより仰のおもゝ謹で承りぬ又然れ共主君預置れし城を證據とすべき書簡なくて渡さん事ゝ人〻の存る處思ひやられけり次よ領國に入給ゝん事ゐなかの若き女原無禮の恐れ有領國をさげらるべしと申送るさらば左衛門大夫ゝ程遠し伏見にある備後守の書簡を證據にせんやと云せらるゝよ父子たる事ゝ論あしといへども備後守が領國にも城よもわらぎ備後守が言ゝ用ふるよたらぎといふ所に正則が書簡來りしかば城門の大手にて書簡を受取ぬさて廣島ゝ船入二所あり人多くさゝがしくて士どもの妻子退去る時爭あるやの恐れもありとて一方をゞ人をとゞめ一方の口より退散せ城中の士ゝ門の左に付禮服して並び居城受取の使安藤對馬守重信ゝ城門の右よそひて城に入れけり丹波と文右衛門とゝ密に相謀りて初よりたてこもるべきとひて同心する人なき時ゝ別にそべき道なき故に事を二つにして士の心を試みたるなりと其比いひあへりさて後城を守るに決せし時丹波上月よ向ひ吾と文右衛門腹切たらば何事も外にすべき事なしといひしとかや

左衛門大夫罪せらるゝと聞て暇を乞たる士三十人ばかりありしかば狹間くゞりといへれ

けり妻子を本丸へ入たるゝ諸でもりと名付妻子を城外に出し其身のみ城を守らんといひしゝ片籠りといふ後に京都耳塚に札を立三色に分ちて姓名を書て世の人に見せしゆゑさまくゞりの面々ゝ餓死に及びぬといへり上月ゝ祿五千石士大將たり正則上月が志を感賞し書簡とあたへらる今度我等罪御預に成候是よ依て城を枕と存候よし心底察入候然ども存寄有之候間早〻城相渡し可申候貴殿志之段不淺過分之至に存候とぞ書れける大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり同し時大崎ゝ備後鞆の城に有秋田下総も同じく鞆に有しが大崎を廣島にやりて己一人よて鞆を守り討死して名を揚ばやとや思ひけん大崎に向ひ江戸より城を受取べき使近き内に着陣有べしとく廣島にこもられ然るべからんと云大崎聞て殿の下知なくて城を出んこと思ひもよらぬといふ秋田城中を廻り防戰の支度專らなりしに大崎ゝ柱によりて眠る外ふし人々大崎をそしりたるに大崎あざ笑ひ秋田ゝかくゆゝしく防戰の用意するなるべしわれゝ思ひ定めたる事有て萬事ひまありといへゞ其子細を問に大崎此城を守り日本國を敵になし万に一つも勝べきやあたら人々を徒よ殺さんもいかゞなりわれ一人大手の門外へ出て城代大崎玄蕃と申者なりとて腹切ん後城を受取給へ城の人々殘らぬすけられよと云て各たちの命に換るべし何の用意の有べきといひけりかゝる所に正則の證書來り事故なく城を渡せしかゞ大崎と村上彦右衛門眞鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家に仕へけり大崎ゝ若き時木村常陸介師春に奉公し後正則に仕ふ鬼玄蕃といはれしものなり

○正則配流の時正則の邸表の門前に蒲生下野守忠鄕裏門へゝ鳥居左京亮打向ひ皆士卒物具したりけり芝の邸へゝ最上源五郎義俊打向へり蒲生の士ども正則公命を承りたりと聞ていそぎ邸を出らるべしといひ入ければ正則仰にも及べぬとく信州に赴くべきとて熊澤半右衛門守久上月新八両士をよび奥筋の風俗常にがさゞなり蒲生鳥居の者ども門内へこみ入に於てゝ吾士ども無禮を咎めて事の破も有べきなり汝兩人門内に有て理を尽すべしそれとも聞入ぬべかゝ來りて告知せよ自害すべしといはれしよ半右衛門これゝ畏り難旨仰をも承りけるといひも果ぬに正則我今日公儀に背きかく成果し故おのれさへあなどるやと大に怒られしに半右衛門驚かぬ新八に向ひて只今仰のごとく出羽奥州の風俗のがさつなるゝ勿論なり立向ひいかに理を云たりとも聞入べからぬ其時かけかへりなべ追立られ逃入たるとそれを注進なし其後殿ゝいかにもならぬせられんやと云けるに新八もとより同心なりと答へ同じ事にて末の世までも恥辱なるべしさらばこみ入奴べら腕の力のつゝかんはぬ切あひて

しに正則悦で打うなづき二人がいふ所尤至極なり幾重にも穏に理を尽し承引せざば志のごとくにせよといはれしかば両人畏り承るとて座を立て門内に出むかひけるよ事故なかりしかば正則信州に趣れけるとぞ

○正則常に物あらく人を誅そる事を好めると世の人もいひあへり或時近習の士少の咎ありて城内廣島の櫓に押こめ食物をあたへざ餓死せしめんといはれしに其士の恩を受たりし茶道坊主非なくてかゝる有様をいたみ潜に夜燒飯を携へ行たり彼士われい罪ある故に斯成たり汝只今のふるまひを殿聞し召れなばわれよりも罪重からん又飯を喰たりとて命助かるべきにあらざれどとく歸れといひしに茶道云けるハ同じ罪に行はるゝとも後悔なしわれ先に既に殺さるべき事の有しに君の救ひにて一度たすかりぬ恩を空けて報ぜざるハ人にあらざこなたも又よわげなる心おはして吾志を空しくし給ふ事こそ口惜けれといへば彼士悦んでさらばとて是を食す夜ごとにかくの如くしたりけり程經て死したるならんとて正則矢倉より行れしに顔色少しも衰へざ正則さてハ飯を送りたる者あらんと怨られしに茶道來り某こそ送りたれと申す正則はたとにらみておのれ何故にかくしたるや頭二ッに切わりなんと膝立直されし時茶道少もさわがざ我昔罪を得て既に水せめにあひて殺さるべかりしに彼人の申ひらきたりし故今日まで思ひかけざ命存らへき其恩を報せん爲毎夜しのびて飯をはこびなんといふ正則怒る眼に涙を流し汝が志感ぜるにあまれりかくこそ有べけれ彼士をもゆるすべしとて其まゝ矢倉の戸をひらきて罪を宥め茶道をも深く賞せられけりされば暴悪の人と世に稱しけれどかゝる義に感ぜる事の切なる故に士のおもひ慕ひて力を竭し正則の爲に身をすてて奉公しけるげにも故ある事にこそ

○台德院殿諸大名をめし土井大炊頭利勝をもて來年嗣君に世を讓らせ給ふべき旨仰出されしかば皆祝し奉りたる所に井伊直孝默然として有しかば利勝かたへに招きいかなる事ぞと問に天下亂の本たりと存ぜれば目出度事とハ存もよらざと申す子細いかにと問ふされば其事なり大坂の亂幾程なく江戸石壁のいとなみ日光の土木天下の諸大名以の外に困窮せり又世を讓らせたまひなば諸大名獻上奉る物に費多く將軍宣下の饗禮を取り行ふべし愈困窮に及び下を剝民を苦むるの外更にせん方なからん是民のなげき亂のもとゝ存るなりと申されしかば利勝尤なり此旨ありのまゝよ申べしとて直孝を御次の間にともなひ利勝御前に參りてしかくのよし申たりければ即直孝を御前に召れ汝ごの申所尤なりされども既に仰出されたれば易難し猶是より後憚る所なく申せと仰られしかば直孝臣が申むね然る

べからぬと思召れしより聞し召入られぬ臣が言尤と思召なべ御用なからん事仰とも覺ら
れぬと申されけるに暫く御詞なかりけれべ利勝臣既に年老ぬ壯年の者直言を申し上る事治
世長久のもとなり明日諸大名を召掃部頭申旨尤なるにより相とゞめらるべきよしを仰有
て然るべしと申されけれべ台德院殿則諫に從はせ給ひけり其時直孝臣が申旨用ひさせ給
ひ辱き旨謝し奉りて退出せられけり台德院殿の諫に從はせ給ひし事直孝の直言美を盡せ
りと人申けり

○大猷院殿の御時國姓爺日本に援兵を乞けれべ諸長臣を御前に召出され是を捨置れなべ日
本の恥なり援兵をつかはさるべき旨仰られしに小事たらざる故に各とかくを申出かねら
れし所に稻葉丹後守正勝援兵の事然るべからざる旨再三申されけれべ色を變じ內に入せ給
ひけり明日又召出され昨日申せし處思召にかなはざりしがつくゞ御思慮有しに申所理
なり援兵に及ぶまじき由仰出されたり

明の末鄭芝龍といふもの万曆年中日本に來り肥前松浦の平戸にあり又長崎にもありて崇
禎年中に明帝より召返されけり平戸に在し時妻とりて子を生む其子を鄭彩といふ芝龍官
を得て長崎の奉行に告て妻子を迎ふ公又申てゆるされを蒙りたり明滅し時大祖の苗裔を
福州に建て元を隆武と号す清と度々戰ひに及て勝難き故に援兵を乞たりしなり明帝朱姓
を賜ひけれべ國姓と稱し爺ハ老成を尊むの詞なん芝龍が事明末の書に詳にしるせり

○正保元年ハ明の崇禎十七年なり明朝亂れ陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり一揆を
起し北京へ攻入明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに福建の鄭芝龍書簡をさゝげて加勢を
乞けるに依て紀伊大納言頼宣卿異國より加勢を頼み申事日本の武威四海にかゝやくとも申
べし諸浪人を集めなんにハ數十萬も有べしそれに西國中國の大名小名差加へられ然るべ
からん拙者に總大將仰付られなべ何事の悦びか是に過ん異國に攻入おもふまゝに日本の武
勇を見せ申べしと顯ひ奉り給ひけれども御加勢の事やみけれべ無て仕へ申せし武功の物し
ども清兵と一軍して老後の思出にせんといさみける人々殘多き事にといひあひけるとかや

○大猷院殿の御時晴の猿樂有んとする前夜に大雨にて御前に見えわたるべき塀の白土壞
れしを(一說に朝鮮來聘使者出べき夜櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり)いかゞ
せんと人々云ける處に松平伊豆守信綱白き奉書の紙を以てはらせられしかば皆其捷智のは
ぞを感じあひける處に酒井讃岐守忠勝一說土井大炊頭利勝ともいへり伊豆守に向て讃岐守が存る處ハ貴人
にハならざる事ハあらざると知せ奉るぞよき仰出されんに何事も仰のまゝならんと思召れ

んにハ驕奢をみちびき奉るにてあそあれ其時ハいかゞし給ハんといはれしに信綱ふかく心服せられけり

○江戸の墨田河に橋なかりしを酒井忠勝申て橋を掛られけり要害の爲あしかりなんと云人あり忠勝天下を治むるに人を以て要害とすべし人苦んで何の益か有べき人を苦めて要害とせバ江戸ハ一日もゝちこたへ難しと答へられけり

○板倉周防守重宗京の所司代たりしが江戸に下りける時松平信綱對面し公方よも政事に御心を盡されける京都の事も委細に聞し召度是より後ハ同職にさし越れし書狀京都の事詳に記されよといひしに周防守百二十里の行程隔りたる事何程に聰明におはしますとも及びでなる事ハ得知し召れじ其故に周防守を京に指置れし事なれバ申上るに及ばぬと答へたるをさてハ周防守ハ致身ものなりと感ぜさせ給ひけり

重宗の父を伊賀守勝重といふ初ハ四郎右衛門とて祿五百石なりしに京都の所司代を仰出され二万石賜ハりけり是ハ本多正信が薦め申せし故となり勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ重職の任を身にうけん程に歸りて妻なるものに相謀りて若同心せぬハ職を固辭申上べきよし申けるに正信打うなづく勝重家に歸りてかゝる仰を奉りしなり重き任なれバ

内緣を頼み訴する者あるべし公私に付て口をそへられぬ仰と畏り奉らんもし少じにてもいろはれんとならば只今其よし申て京にハ趣き申さぬといそれければこれいかなる事をのたまふぞ仰をかしこまらせ給へ女の身いかで公の御事にたづさハり申べきといはれしかばさらばとて出る時はかまの腰をねぢらしてきられしをそれハいかにといはれけれバ勝重さればよかくあるべしと思ひし也とて重々にいましめて後仰せを奉りたりと世よハいひ傳へたり勝重尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長嚴和尚が弟子にて長祐といひしが還俗して四郎右衛門といひけり勝重嫡男を重宗次男を重昌といふ二人とも江戸にあり或時大猷院殿訴訟をひとつ巧に構へさせ給ひ二人をめして判斷せよと仰有けり重昌仰を奉り理非分明に決定して退出す重宗やゝ久しく思慮して後重ねて決斷の旨を申上んとて退出し二三日過て後御前に參り判斷の旨を申たるに弟の重昌が申たるに相同じ人々兄にまさりたる重昌也とはめあへり其後勝重京より江戸に下りし時大猷院殿かの訴の判斷の事詳に示させ給ひ重昌が才器を御感あり勝重承り内膳正ハわか氣にて思慮あく周防守ハ國家の政事を取申そとも其任に叶ふべし其故ハ訴を判斷する事ハ政事の一ッの條目にて政事ハ至て重き事にて一言を以て天下の利害にかゝるなり苟にきはめ

申べき事にハあらぞ政事ハ大事とくりかへし思慮いたしすべし左すれば重宗ハ政事をとり申そとも仕損ぞまじく只打見たる所を以て己が智慧を人に見せんと存ぜる所ハ重昌がわか氣と申物にて思慮なきと申けれバ御感淺からざりしとなり其後伊賀守年老たり所司代の職に任ぜべき才をあらび汝が替りにせバやと仰有しに勝重子なる周防守所司代の任にかなひしよし申たりければ内々其ごとく思召れしと仰せ有けり周防守ハ斯ともしらで御小性にてありしに父伊賀守がかはりに仰出されけり周防守上京せられしに伊賀守衣服をあらため左右の職に居る人を並べ置記錄をも悉く取出し周防守を上座にまねき鍵で江戸靜謐の事を窺ひ今日より所司代なれば萬事引渡し申す可しといふ周防守只今まで御側に仕へ奉り世の有樣ゆめ〳〵存ぜぞ仰にも父を見ならへとの事なりと申されしに伊賀守いや〳〵其職に居るべき者なりと擇出されし故かゝる重任の仰ハ奉りたりと覺ゆるなり人の心ハ面の同じからざるが如し我に付そひ居たれバとて我にはあるゝ時ハ自ら決斷そるより外の事なし汝が不才を隱しなバ五畿内いふにや及ぶ西國までも禍有べしちつともかざる事有べからぞ只不才とあらハそを第一とすべし不才をしろしめさせなバ其任に當るべき人を擇バれて仰付らるべし更に恥辱にあらぞ今日より所司代の職に居るべしといれしかば周防守其詞に隨れぬ勝重ハ町家をかり置たるがそこに引移り碁を打て口ぞさみに今度の所司ハきびしいものよわれをあひしらひたるが如くならば必罪せられなんとて碁を打てありしとぞ

○周防守重宗京都の職に有こと凡三十餘年人敬ふ事神明の如く愛そる事父母に似たり父子誠に同じ名臣とぞ聞しされば重宗ハ寵恩も殊に厚く從四位上にのぼり官左近衛少將にすゝまれけり重宗職に任じて後毎日決斷所に出る時西面の廊下にして遙に伏拜む事有て決斷所よ出此所に茶磨一ッすゑ置あかり障子引たてゝ其内に坐し手づから茶ひさて訟を聞人皆不審しあへりけるに遙に年經て後問人有しに重宗答て先決斷所に出る時西面の廊下にて遙に拜する事ハ愛宕山の神を拜そる也多くの神の中殊に愛宕ハ靈驗新なると聞し程に所願ありてかくハ拜しぬ其所願ハ今日重宗が訴をことわらんに心の及ぶほど私の事あらじ若あやまりて私の事あらば忽ち命をめされよと年頃深く頼み奉るうへハ少も私心有んにハ世になあらへさせ給ふなと毎日祈誓するとなり又訴をわかつ事の明かならぬハ我心の事にふれて動くが故なりと思ひあしぬよ人ハ自ら動かざらんやうにこそあらめど重宗それまでの事ハ及び難く唯心の動と靜なるとを試るにハ茶を挽てする心定りて靜なる時ハ手もそれに

應じて磨のめぐる事平かにしてきしられてれつる所の茶いかにも細やかなり茶のこゝやかに落る時にハ至て我心も動かぬと知り其後やうやく訴をわかつ又明障子をへだてゝ訴を聞事ハ凡人の顔かたちに打見るよりにくさげなるとすはれましきとあり誠しき有かだましきあり其品多くしていくらと云數をしらぬ見る所の誠しきと思ふ人のいふ事ハ眞實ときかれかだはしきと見ゆる人のおす事ハ何事もみな僞と見ゆあれましき人の訟ハ抵られたる所有かと思ハれにくさげなる人の爭ひハひが事ならんと覺も是等の類ハ目に見る所に心のうつされて彼詞を出さぬ事ハにはやわが心の中に邪ならん正しからんよからん直ならんとおもひ定むる程に訴の詞に及びてハ我おもふ方に聞なす事多し訴のなるに至てハあれましさに憎むべきありにくさげなるに憐なるあり誠しきに詐有此たぐひ殊に多し人の心の測りがたきかたちを以て定ん事叶ふべからぬ古の訴訟を聞よハ色を以てすといへどもそれハ重宗が及ぶべきにあらぬ又さらぬだに訴の庭に出んハおそろしかるべきにまして生殺を司れる人を見てハいぶせくて自いふべき事をも得いハで罪にも科にもあふ人あらんと思へバ所詮互に面を見も見られもせぬにしかじとおもひかくハ座をへだつるにてこそあれと皆へらしとぞ

○關ヶ原亂の後毛利森とも記ぶせんのかみ勝永ハ土佐へ流罪せられしに大坂に事起ると聞或夜妻せるあり豐前守勝永ハ土佐へ流罪せられしに大坂に事起ると聞或夜妻にいひげるハ我罪有てかゝる所に居住し汝にも斯うき事を見せる事ぞとよされども我志あり詞にあらハしがたしと語りけれバ妻のいハく世の變ハいかなる人もはかるべからぬかく成はてたりとも更に悲しむべきにあらぬ妻ハ夫に從ふ道とこそ聞て其御志を承らバやとひふ勝永云我武名を傳へて數世に及びぬるにかく沉み果なん事口惜き事なり命を秀賴公に奉りてんと思へども我爰を忍び出なバ憂がうへにも猶うき事や御身の上に添らんと泪を落しけるに妻つく〳〵と聞て打笑ひ弓箭取の妻となりていかでかゝる事をおそれなんやはや此曉船に乘て武名を潔くし給へ君のため家の悅び何事かこれにしかんわらハが事な思ひ給ひぞいかにもあり給ひたらバ此島の波に沈むべし運命めでたく頓て逢奉らん急ぎ給へといひければ勝永悅んで小舟に取乘大坂に至り籠城しけり其後山内對馬守より豐前が妻を固く誡しめおきかくと告られしかバ東照宮聞し召勇士たる者の志感賞すべき事なり豐前が妻罪をる事有べからぬと愁に仰有けれバ豐前が妻大坂の城中に入けるとぞ

○池田左衛門督忠ハ東照宮の御女北條氏直の北の方にておハしけるが北條家亡びて後國清公ハ再嫁ありて生れ給へりしかば東照宮の御外孫なり大坂冬陣にハ十六才ぬり一旦和平に

成て師を返されし後軍に從ひし士ども寄集りて物語をる時一人の云若き殿の此度の軍に日比と大に違ひて諸事の下知兎角いゝん詞もなし中にも今まで詞に出さぬ事一ッあり仕寄場にて寒氣はげしきにさぞ苦勞ならんとて小さ手樽に酒を入て給ゝう又綿入の肌着を賜り此事ゆめ〳〵人になぬしそと仰られし志の忝さ忘れがたけれど語るなと仰ありし故今まで〻泄さゞりしといへば一座十四人手を打てわれ〳〵も其通なりき我一人のあしらひなりと思ひしに皆斯の如きゝためしすくなき事なりと感じあひけるとぞ

○大坂冬の城攻に興國公の攻口ゝ天滿橋の邊なりしに先陣の士大將波多野掃部須賀左京竹把を付るに兵少くして夜にならでいいかにも調ひがたく日のうちとならば兵を增給ゝれといひしかば其樣を見て給れとて芳賀内藏允先陣に行芳賀ゝ茜染の羽折着たり先陣の兵ども家屋の燒後土藏の陰に扣居て橋より上にしるしの株を見られよといへば芳賀すゝみ行芳賀近頃寵せらるゝ者ぞ武者ぶり見よといひあへり芳賀馬よりおりて徐に川岸を歩むを城中より搏出す鉄砲川水にひゞきわたれり芳賀ちつともさわがぬ足の數をかぞへて歸りいかにも兵少くてゝかなふまじというて旗本に歸るこの芳賀ゝもと祐筆なりしが岐阜落城の日國淸公勝軍の書を芳賀に書せられし時麓に將机に倚ておゝす芳賀其前に跪て在しに城中の

燒たつる火鹽硝の庫に入て其音山嶽の崩るゝがごとく敵押寄るかと騷ぎしに芳賀が筆把て書し樣少しも騷く体なかりしかば事に寄て試らるゝに器量大おりければ頻に用ひられて祿二千石賜ゝり後國政を執しに度々直言を申諫め爭ひてことよく治りけり

○大坂冬陣に佐竹義宣今福口を攻る士大將澁井内膳先陣して柵の木を打破る佐竹に付られし軍の目付安藤治右衛門屋代越中守先がけして安藤さゝやかに物具せしを柵の中より鉄炮にて胄の上を打かする安藤折しきたれば頻に打かけて立上り得す屋代父子伊藤右馬允かけ來りいかに安藤日比ゝ年若しとて自慢せしにゝたがへりといひて柵を打破る木村長門守重成城より助け來り柵を隔てよらみ合たり木村ゝ黑き平袖の羽織を着し柵に取付てあゝれ鎗にてたゝき崩さばやといへとも鉄砲の足輕ちり亂れて來らざりしに井上忠兵衛と云者鉄砲を持せて馳來ければあの鳥毛の羽折着たる敵ゝ物しよ打落せと下知して柵の木に鉄炮をもたせて澁井が胸板を打通せ木村おめいてかゝり寄手を追崩せ平塚五郎兵衛澁井が屍をふみこゑしを木村が從者首をとらんとそれば平塚其ひゐたる首何にせんというて敵を追たつる

義宣使者を上杉景勝に遣ゝして加勢を乞れしかば杉原常陸横合に兵を出す杉原ゝ大坂に師を出す時吾物具以の外ふるくて日本國の弓取に笑ゝるべしとて猿樂の半臂を用意せしが其

日物具の上に着て麾の緒を腰に結びてさげ七百斗をひきぬて川の中の洲に進みしかども水深かりしかバ玉藻を惜まぎこみかへ〳〵城兵を打しらます軍兵を下知そるに進退思ひのまゝなり杉原が士卒を下知そる有様を諸將の陣なりを靜めて見物す營へバ馴たる雀の子を呼に似たりといひあへり東照宮遙に杉原か出立を御覽じ上杉が家ハ古風なるゆゑ鎧直垂を着たるなるべしと仰有しい半臂を遠く御覽有ての事なり其後上杉家の士大將に御感狀を賜ハる杉原御前にて讀で上を包みたるをとき讀終り始の如く包み本多正信のかたを見やりて感じ仰詞殊更に忝く覺ゆ景勝武功を賞せさせ給ふゆゑに倍臣までか、る仰を承る事誹信弓箭の遺風を天下にあぐる所なりといひて退出したりけり

○志貴野にて上杉景勝先陣柵をやぶり非上五郎左衛門を始として敵百計打取大和川まで攻入る時景勝直江を呼て城兵援來るべし先陣ハいかにと問直江先陣ハ士卒少けれども安田上總介二陣ハ隅田大炊介長則に定めよと申そいや〳〵隅田を先陣にして二陣を安田に繰かへよと下知せらる是激の道なるべしかくて安田ハ先陣を二陣にくりかへられ口惜き事おりと齒がみをなし隅田が軍兵ハ安田に踰て功名せんと勇み両陣とも勇氣倍しけり廿六日曙に隅田押寄多切豐後守真先掛て首を得北條清右衛門等も討死し遂に打勝て井上五郎左衛門を討取柵二重破りたりけるを城中より大軍我先にとはせ向ひ大野修理治長木村主計頭宗重渡邊内藏助糺竹田永翁等競ひかゝる隅田は百挺の鉄炮を一の木戸口に立囲め打たてさせけれども城中よりの加勢眞黑に成て切てかゝるを半時計さゝへて戰ひ鉄炮の物主石坂新右衛門一足も引す討れ終にれし立られぬ二陣の安田は兼てよりかたへに陣をおし出せし故隅田か士卒景勝の旗本前へ崩れかゝる景勝三陣の士大將杉原常陸親憲金の輪扳の立物打たる冑を着金の鎰の馬印を取て大將の仰そ隅田人數両方へわかれよと呼はりて馬しるしを打ふりて下知しけれバ隅田が兵忽ち両方へわかれて引取けり杉原敵をおもふ樣に近々と引受て前に立ならべたる鉄炮を雨の降でとく打かけしかば安田二町あまり脇にひかへたるか横あひに鎗を入る隅田も忽もり返し城兵を追崩そ隅田は初に討負たるを口惜くおもひて從者五人に て敵の中に紛れ入首二つ取て歸る景勝進んで押詰んと見えしかバ久世三四郎乘來り俄に攻ば死傷多からん後陣の堀尾山城守忠晴と入かはられよと仰られしといふ景勝聞もあへす弓取の先をあらそふ時一すましといふ事あり今朝よりはげしく軍して取敬たる所を人に讓りて退く事あるまじと少しも動かぎ丹羽長重景勝の陣に行て見れバ景勝將机に倚て城中をはたと睨み物具もせぎして青竹を杖につき左右に軍兵三百計鎗を横たへ跪きて紺色に日の丸

の旗毘の文字の旗二本に淺黄の扇の馬しるし押立しづまりかへりて長重を見むさもせぞ長重も勇將なるが後に人に語りて景勝を譽られけり

○大坂の事起りし時井伊掃部頭直孝を召て兄右近大夫直勝の陣代をぞ仰出されける

直孝ハ直政の二男にて母は松平周防守康親の從者の女なり直孝六ッに成し時母の方より直政に送りけるを百姓の許に置れけるが十二の時民家に盗の入てさわぐを聞かけ出て暗夜の事なるに盗山へ登りけるを追かけて高股と切て落されけりかくて人あまた來りて盗をバ打殺しぬ直政に申せバよび寄て冬の事なるに北に向たる座敷の雪の入る處に跪かせて置れけり雪ひざを降うづめどもちつとも動かぞ直政悦んで呼入られ犬の子をあたへられけり十四の時直政病重くて死に及ぶ時其生さきやしるかりけん麓に甲を添てかたみにあたへらる直孝は上州にて一万石を賜はり大番頭を命せらる直政の長子父の跡を嗣へども多病にて公事勤勞しがたしといへり

○越前忠直大坂に師を出す時士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり將机によりて聞居しが勇將麾下無弱卒といひしにかたへより高祖帳中有張良といふを聞く門出の目出度さよとて打出けり

○大坂にて城兵千波を燒ける時後藤又兵衛備前勢必つくべし若き人々待伏して功名あれといひけれバ後藤が詞たがハじとて待伏しける所に敵つけ來らぞ後藤が功名だてと喇りけり後藤積りも時々ハたがふ事ある者也備前勢付ざるハ花房助兵衛まだながらへて居るならんといふ此時戸川肥後守達安を始として烟まぎれにつけんといひしに花房聞て城中に後藤といふ功者あり必兵を伏置たるべしと止めて付ざりけり烟消て見れバ花房が云しごとく果して敵待かけ居たり其後和平に及で肥後守が弟彌右衛門後藤に對面し樣々の物語する時千波の事を云出し備前勢の付ざるハ如何にと問に兩人のはかりし事更にたがハざりけれバ人々聞傳へて稱しけり花房助兵衛職之ハ秀吉の心に忤ふ事ありて佐竹が許に流され居けるに東照宮御心を付られ花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預け置しを後に柳原康政養ひて飛彈守といふ助兵衛老衰席上にも人に扶けらるゝはどなりしに東照宮の仰にて大坂の軍にも從ひたり乘物にて攻口に向ひ軍急ならば吾乘物を敵に向てすてよ爰を墓と思ひて出たりとぞ云ける東照宮御打廻りの時道のかたへに乘物を置其中に蹲居したりしを戸川肥後守かくと申しかバ花房大事の時とおもひ武を好む事老ぬれども志ハおとろへぞ誠に大丈夫なりと仰られけり

○大坂にて台徳院殿諸將の攻口を打巡り有馬豊氏が陣所にて井楼に上らる時御馬驗を城中より見て火矢大銃を打かくる井楼を下給へとやせども聞ぬ体にてましまそ所に水野日向守參りて物見と巡見とゝ別なり陣々悉く御覧あるべけれゞ一所にのみおしまそべき様おし志貴野を御巡り然るべしと申せゞ則井楼をおりさせ給ひけり

○大坂にて東照宮志貴野を御打巡りあり上杉の攻口にかゝらせ給ふ時鉄砲をならべ立たるが一同に城に向て打かけたり大將巡見の時の故實なりといへり景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を洒ぎさらびやかに掃除して景勝直江只一人打具して平伏して御目見申たりけれゞ東照宮いかにみお骨折たるぞと御詞をかけられしに童部いさかひにて骨折なき旨答へけるとぞ

○眞田が丸を攻る時小田切所左衛門城ぎゝに近く寄たるが鉄砲にあたりたり其玉をとり出し平野彌次右衛門に見せて打笑ひ物語する体平生のごとし又玉一ッ額に中るを取出したれゞ血流るゝに冑ゝ大事の物よ此冑ゝ信玄公の許に有しなりといひて少しもひるみたる色なかりしとなり平野も小田切と相ならびたる武者ぶりを敵味方ともに譽あへり平野が從者五右衛門といふ者矢面にたち鉄炮頻よ打かけしかゞかすり手十八まで負たる大剛のふるまひを城中より高聲に稱美して姓名を承らんといふ平野則五右衛門に吾氏を讓りあたへしかゞ五右衛門大音あげて平野彌次右衛門が下人五右衛門といふ者是までの褒美に只今氏を讓られて平野五右衛門と申おりと名乗けるとぞ

○十二月四日雪深く眞田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻寄ける事軍令を背きたれゞ如何すべきと台徳院殿仰有しかゞ先伺奉り然るべしとて本多正信東照宮の御陣に參りけり東照宮いかに今朝ゝ將軍にも悦びに有べきよ掃部頭堀際へ押詰め敵に威を示して味方を勇め立たるよと仰有しかゞ急ぎかへりてかくと申す頓て御本陣に御出あり其道筋掃部頭陣を打過させ給へゞ直孝出迎ひたるにゝらみて通らせ給ひぬ孕石備前にかくと告れゞ孕石聞もあへぬ其ごとく物に心得ざる大將ゝ此方よりもきつとにらみかへそが然べしといふ程なくかへらせ給ふ時直孝出迎ひけれゞ今朝の軍賞譽の御詞有て打過させ給ふを孕石聞て合点ゆきならんにゝ其筈の事なりといひけり

はじめ陣を移しかふる時井伊家鉄砲をうたせし事ありし時本多正信申せし事と相同じ一事を二事よ云傳へたるなるべし

○大坂冬の陣に塙團右衛門重之阿波蜂須賀の陣所よ夜討せんといかり

國右衛門ハ遠江横須賀の人なり加藤嘉明に奉公して祿千石足輕を預りしに關ヶ原の時嘉明塙に下知してそびき來れといハれしに塙行て見るに諸將みな陣々を整てひかへ居たり君命とハいへども敵に後を見せん事口惜く思ひ種ヶ島の鉄砲をならべ散々に打立て歸りけれバ嘉明汝ハ勇のみ有て進退の理を弁へぬ大將と成て士卒を下知する事ハ思ひもよらぬ汝を遣したるハ我過なりといハれけれバ塙敵弱けれバ詮方なく無理なる咎を蒙るとて夫より恨をふくみ伊豫を出奔しける時其家の中に遂不留江南野水高飛天地一閑鷗といふ二句を大文字に書たり嘉明怒て塙が行先の奉公をかまハれしかバ塙所々にて落ぶれ後にハ京の妙心寺大竜和尚の許に居て僧となり名を鉄牛といふけさの上に刀を横たへ鉢を扣く人或ハにくみ或ハ誹りけるが遂に秀頼にまねかれたり

年十六才已上五十已下の士八十人をすぐり出し從者各一人と定めたり塙と御宿越前と門口に鎗を入まじへて一人づゝしづかに出しけるが鎗を取とて從者をよびさわがしけれバ塙怒りて刀にてせよ何鎗とる事やある首な取そ敵の旗を始として武具を奪ひとれと下知しどつと押寄たり蜂須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を着胄ばかり着て馳合せけるを木村喜右衛門突伏しに稲田修理透間なく走り來り木村と突合寄手駈集り防ぎ戦ふ米田監物ハ池田左

衛門督の陣所を押へ居しがこれもかけ來りおめいて攻入しかども寄手おひ〳〵にかけ集りしかば引返す生駒又右衛門首とりて大野主馬か許に持せやり猶進んで中村が倒れたるを見て首をとらんとする所を修理が子九郎兵衛十五歳なりしが生駒を討取たり

此夜討の前蜂須賀の士大將樋口内藏助今夜々討入べしと云若士どもいかゞして見定めたるやとさゝやく所に中村右近をちをやきて涙迴んとて内藏助をかたへに呼入問とて夜討有べきやと問ふ内藏助されバとよ城の橋殘らず燒落したるに本町口の橋ばかり燒ざるハ夜討すべき爲なり今日狹間より外をのぞき見る体見ゆるゆゑ夜討入べしと答ふ皆さわらんといふ隣の陣小屋稲田修理に餅をふるまハんといひ遣す修理其まゝ來る道にまハるなれば七八十間もあるべきにとく來られといへバ修理間のしきりの板ゐる所にわらをこみおきぬそれをハづして來りたりと答ふ果して其夜半夜討入たり右近具先に出る修理おしつゞき出たり右近ハ胄ばかり着たるに從者物具を持來りて着せたりともいへり右近刀をふり廻し敵の鎗を切拂ふ修理大音あげて右近と〻もにはたらき右近ハ鎗七八本にて突伏たりといふ説もあり右近が子若狹ハ阿波の留守に殘し置れしに其胄に右近修理に向ひて若狹此度戦場に出ざる事を口惜くれもひ度々來るべき旨いひおこせしを軍法を破る罪

ゞをおそれ呼よせぞと語る修理、尤にこそあれいひやりてとく來られよと告べしといふそこにてとく若狭ゝ陣屋近きあたりに來りてかくれ居しかゞよび入て其夜手に逢たり右近父ゝ次郎左衛門とて信長の扈從阿波守につけられて祿千石士七十人添られけるとぞ

塙ゝかねて支度して夜討の大將塙團右衛門と書たる木札を道々にまかせけり和平の後今福口の南に長二尺あまりの木に塙團右衛門と書て建てたりしを人々あやしみ問に塙加藤嘉明我をにくみさがし出して誅せんといゝれしと聞ゆゑ討手を待といへり塙が好ある面々あまた訌來りけるに水野勝成の士黒川三郎右衛門尋來りしかゞ過し昔の交りをおもひ出して來られしこそ悦びなれ林半右衛門ゝ日比親しみ深かりきいかにして一度の音づれもせぬにやいぶかしさといひけれゞ黒川聞て林ゝ池田の家に奉公して今天滿橋の陣所に有かくと尋て見んとて歸しが林にしか〳〵といへゞ林されば〻我塙と相約せしゝたとへ大國を領すとも手づから鎗を提おもふまゝに軍せぞゞ男子にあらじといひつるに塙夜討せし時橋の上に將机に腰かけ馬じるし押立麾を取たりと聞く年四十八老たりといふべきにもあらぞむかし相約せし詞にたがひたれば使をも遣さゞりといふ黒川又塙が方に行かくと語りければ塙林がいふこそ理なれされども我嘉明に士卒を下知せんことおもひもよらぞと罵られし事口惜く一度麾をとり軍を下知して嘉明にしらせゞやと思ひて其夜も手づから鎗を横たへ突てかゝり度おもひしかどもさゝせざりき既に志を遂たれゞ重ねて軍のあらん時にゝ鎗刀の折るほど戰ゝんといひしとかや

○大野主馬が組の士此夜討に功名有木村長門守を頼て感狀を賜ゝらん事をゆす木村聞て上にもよく聞し召たれゞ感狀においてゝ定めて下し賜ゝるべし但し感狀を拜領して誰に披露せられんや一本鎗の士ならゞ又他國の主君に奉公せん時の眉目にそべし大野兄弟ゝ大坂の長臣たる身君と存亡を共にすべき人の何のための感狀ぞやと云しに主馬恥て詞なかりけり

○東照宮後稻田に御感狀を賜ふ太平の後御旗本の人々稻田に逢て大坂夜討の時の事語られよといひしに九郎兵衛聞て十五の年の事隔りてみな忘れたりとて强て問ども一言もいゝぞ公方より賜りたる感狀の詞をとへども存寄ざる賞を得て深くをさめ置再び見たる事なければこれも忘れたりとて語らざりしとなり

○細川三齋病を養ふとて吉田に寓居せられける時渡邊面龜蔵兵衛訪て物がたりする時大坂にて塙が夜討せし時蜂須賀の士ゝ感狀を賜ゝりたるゝ如何なるゆゑにや夜討ゝ虚を見て討つ事古今同じ虚有て討れしに賞有しゝいぶかしといふ三齋聞て夏又事有べきに遠く慮ら